

特20
512

中華書局
影印

吳大澂
尺牘
全

湯淺常山先生原撰

Handwritten signature

明治二十年一月十日 湯淺常山先生原撰

杉山益世先生評註
增補
鶴巖社梓

常山紀談序

常山紀談者。備前湯君之祥。紀戰國將士武功也。權謀形勢。備矣。於馳驅周旋。蓋獨詳焉。世之君子。動謂兵。顧將畧何如耳。馳驅周旋。匹夫之勇。非所尚也。此不稽古者也。不通今者也。三代之世。寓兵于農。卿出爲將。善射御。先士卒。勇敢有力。養之禮義。用之戰爭。士卒亦以武自喜。左氏具載焉。春秋之時。師徒撓敗。至泯社稷。而死者不過千百。則先王之遺也。秦漢以來。文武異官。大將不手兵。兵發於卒伍。雖數立軍功。擢至將萬人。而黥面刺臂。目不識字。士大夫視以爲奴隸。人人不自重。惟以賞罰威之耳。時將亦制陳法。明懸令。以一切立功。終不能使士卒自喜焉。後世之戰。僵尸百萬。功唯數大將。而裨將以下。無一傳名者。兵制異也。故謂先王之世。不尚馳

驅周旋者。不稽古也。昔者 皇朝軍團取法隋唐第異邦俊民。皆從事科舉。惟魯亡識者。乃爲兵。我 邦則公卿世官。州郡之民。不舉朝廷。豪傑之士。不在南畝。則爲兵。東夷數叛。源氏世將。恩義下結。武人漸貴。保平之後。皇綱解紐。自鎌倉至室町氏。日尋于戈。時將皆賴士卒之勇。以決勝。人自爲戰。未暇違講兵法也。至甲越二公。稍有節制。而士愈益自喜。以接勝國名垂竹帛者數百人。神祖初起。尤名得士。一統宇內。封建諸侯。諸侯亦各建將帥。爲卿大夫。世其祿位。寬永以後。有兵家者。流潤色。甲越遺言。以教人。舉世宗之。其人守一家所傳。不用心於將士之談話。戰國之事。往往失實。或又謂戰國時。多屢軍立功者。故諸將不吝爵祿。以畜士。太平已久。世無喋血。有如萬一。邊圉有警。則莫如遷異邦之法。明法令。嚴

賞罰。以率之。近世將士之談。無所用也。殊不知異邦之兵。皆卒徒。故唯可以法使也。我 邦士大夫。皆出自武騎。國家待士。養其廉恥。使人人自喜。平生待以君子。則臨事不可徒以法令約束之也。故謂馳驅周旋。非當世所尙者。不通今也。士大夫不聞將士之談。則無以自勵。人君不聞將士之談。則無以作士氣。在今兵法之要。莫先於近古將士之談。今列國士大夫。莫不學兵法。習武藝。而不用心於將士之談。教者之過也。世多野史。志戰國之事。真偽雜糅。言無統紀。獨湯君折衷百家。撮其雋永。以垂不朽。國初以來。未之有也。其書務崇節義。雖小必錄。末又概載 國朝太平君臣言行之美。以翼名教。蓋其善志也。君世仕西藩。落落寡合。弗爲名計。世妙知君者。爲人博學篤行。器識高邁。當世未見其倫。此書也行。

人其庶幾窺豹之一斑矣乎。常山備之望也。君居有常山樓。

明和丁亥九月甲子

龜山松崎惟時撰

予嘗慨往事之勞々。若滅若亡。傳於今者。何寥寥哉。蓋載籍未備。世遠磨滅也。夫前言往行者。得失之林。君子可以觀世矣。載籍散佚。不獨吾邦爲然而已也。倚相之丘索。惠子之五車。向歆孟堅之所錄。逞々乎零墜。而况吾邦乎。於乎。室町氏以前亡論已。及群雄尅闕。並爲戰國。網漏吞舟之魚。疆場多壘。采山煮海。塞井夷竈。信々乎沐猴哉。豐王以竊金。黔首攘臂乎草野。奮其威詐。雷震霆擊。鞭笞海內。三韓草靡。安知非炕龍絕氣。紫色擲聲。聖王之驅除乎。宜哉不祀。忽緒其間。仁人義士。齋志吞憤。以沒世者。卓行懿範。湮盡罔聞。豈不悲邪。迨吾神祖聰明神武。革命創制。解民倒懸。列朝重熙。百年謐如。或遇大史氏采簡錄謀。臣經國之略。武夫野戰之功。則何以哉。

湮盡罔聞。豈不惜乎。予適每有勝國以來遺逸事。得諸敝篋。斷簡聞長老黃髮。所謂記。迺削牘識之。往事之焚々。庶幾存十一於千百。匪有意於備不朽。埃大史氏之所索也。近者取而閱之。其所識多國俗犴獮所憲。技擊相高。賈勇搏人之談。犬鷹之事哉。其人骨已朽矣。庸何足傳乎。後世予於是乎重慨之。烏乎。保平之間。源平迭興。上義媮死。尙信伏節。習以成性。孰與元天之際。士無常君。國亡定臣。朝委質而夕倒戈。戎首者乎哉。風俗之道。士爲政。前言往行。得失之林。君子可以觀世矣。是爲序。

元文四年己未五月九日
湯 元 禎

評註 常山紀談序

余固と兵事に習はずして今濫に軍談に喙を容れ之が評を下し其形勢を論はんとするは寧ろ輕卒の所爲にして人或は田畑の水練座上の空論實地の戰場に臨て圓器方底到底用うべからずと夫れ或ハ然ん左はあれど兵事を論ふ者未だ必ずしも兵家ならず戰功を奏する者亦未だ必ずしも兵談者ならず故に百戰百勝の謀士と雖ども兵事を論ふに於ては拙くして充分ならざる者あり然るに實地の戰場に出ては敢て功名なき者も兵事を論ふに於ては大に妙を得後世の兵家を利し以て其戰功を成さしむる者あり試み其一例を示さん孫武吳起は實地の戰場に於ては奇計敢て人を驚

かすに足るものあるなきも兵法を論ふに於ては頗る
妙を得後世の兵家をして因て以て則らしむるに至る
然るに孫臏孔明は實地の戦争は大に妙を得奇計妙算
擧て數ふべからざるも之を論ふに於ては拙き所あり
と見れば敢て遺書あるなし余敢て孫武吳起なりと云ふ
にはわらねど兵事を談ずるに於ては後日の戦争も益
する所もあらんか常山紀談に因りて以て戦國の形勢
を論ひ或は其兵略を説く其談新奇にして世の耳目を
驚かすものあらんか今や天下無事平穩の外觀を呈出
すと雖ども互に虎視眈々彼れ罅隙あれりしと祈り若
ち寸にても罅隙の乘るべきものあれば倏ち乘りて蠶
食併吞するは第十九世紀社會の權略にして所謂笑中

刀あるものなり實に恐るべき腕力社會にして此の社
會に立つ者は宜しく自國と守護の道を講せざるべ
からず然るに此時に當りて兵は凶器なり戦は危事な
り直を以て怨に報ゆ何んぞ兵法を學び軍事を講ずる
を要せんやなど聖人主義を執らば倏ち他邦の屬領と
なさるべし之を要するに爭論を訴へ被害を訟ふるの
法術あれば敢て兵法を學び軍事と講せずして可なり
然れども社會列國の上には此等の法術あるなし所謂
彼の列國公法の如き平時にありては稍々活法の觀を
保つと雖ども一旦爭端を開き干戈を交ふる時に至れ
ば則ち一個の死法にして之に一國の保護を托するこ
と能はざ故に是非とも國民自ら自國を守護の道を講

せざるべからず天下安しと雖ども戦ひを忘るゝとき
は以て危し賊を捕へて繩造るは愚人の所爲宜しく平
時にありて兵道を講ずべし即ち上は一定の法あり兵
を徴して之を訓練すれば下も亦常に宜しく英氣を養
ひ略兵事に通ずべし然らざれば一旦事起るに及んで
遽に其用に立つ能はざるべし我邦古昔は専ら箭劍の
戦争なりしが箭劍の戦争衰へて刀鎗の闘争となり刀
鎗の闘争又微へて銃砲の戦争となりぬる程に古昔の
戦争は今日の撃戦と異なるもの往々之れあるべしと
雖ども而かも前言往行は得失の林敵情を推し或は敵
軍を欺き或は士氣を作し或は其形勢を察する等兵法
の要は多くは敢て違ふことなし實に兵法の要は前世

將士の談を聞くより先ぎなるはなし是れ他人の経験
を以て我が経験に換ふるの道早く其道に通る是れ
より善きはなし敵將若し愚にして前世の軍事に通ぜ
ざる者と推せんか然らば或は古へ名將の施したる妙
計を其儘用うるも可なり若し敵將智にして過にし兵
事に通ずる者も察せんか然らば或は古へ名將の施し
たる謀計を一轉して其反を謀るも亦可なり虚々實々
變化の妙皆前言往行より來るべし余茲に思ひあるこ
と久し近頃鶴聲社主人より常山紀談の評註増補を屬
托せらる是れ最も余が望む所なれば聊か評註を施し
或は若干の新件を増補し面白く好ましく娛讀の間識
らず知らず兵道に通ぜしめんと欲するの婆心なりと

云爾

明治十九年十一月

杉山蓋世識之





鴻津義弘

長曾部元親

長曾部元親



今川義元

武田信玄

上杉謙信

織田信長



徳川家康

豊臣秀吉

常山紀談凡例

一 凡此書天文永祿の比より泰平に及ぶまでの事實とあつめしむるせり戦國の時勢國初の風俗武人の言行是皆世を觀る人の尤識るべき所にして是輯録の本意なり明君賢佐亂臣奸賊の勳徳よ具ふべき自ら其中に見ゆれば必しも評論をしるさず

一 吾國の士風源平の世と戦國の世と異同なきも非ず凡古の風信と尚ひ義を尊び節操を重んじける事ども古き物語に見たり戦國の士多くは利名と貪るにあり今川氏實の没落北條氏政の滅亡は時死に殉たる人悲しされば節儀の士の姓名散逸せん事なげかしくつとめて殉難忠臣の姓名しるせるも又此書の本意なり

一 戦國の間紀載詳ならず相傳る所誤れる事少からざ一事にて異説多きあり同異孰か是としらざるは其説々とも悉しむるせり人の姓名及年月の密ならざるも只記之傳へかたり傳ふるまゝとしむるは比較すべき典籍のなけれむなり

一 戦國の武者詞一種あり物わかれくひとめられたるといふの如きこれなり皆其傳へたるまゝにしるせり又いひ傳ふる世の詞も其傳ふるまゝにしるせり文字を脩飾せざる事は其世代よりて記録の實不實分明なるが故なり左傳は其世の實録にて公毅の二書は後の世よしむるるといふも其詞によりて分る、處奇ればなり然れども大に謬れるに到ては改しむるもあり世人甲

をかふと胃とよろひとよむが如きは曾改しるせり

一 賞譽すべき事にも非るとしるせるわり是は唯其世の有さまを想ひ見つべきが爲なり昔賞譽したりと覺しき事にも心得がたき事あり天正年中肥後の有働と秀吉柳川にて殺されし時立花宗茂有働が臣の供して來れる新田善良が剛の者なりとて惜みて告しらせられしに善良其事を有働にかくして告しらせず運をひらくべき道なきと知りたればとてわが主君の明日禍にかゝるべき事を告ざるをいかよして其時ハ寝たりしにや此ハ非義の義なるべしされをかくる類は此書にしるさず

評註 常山紀談 増補

凡 例

- 一 原書は二十五卷拾遺四卷附録即ち雨夜燈一卷都合三十卷に分てる所煩きを避け便に就んが爲め合して一卷となす又明かに其評註増補の區別をあらざるものは聊か寓意の存するものにして讀者は敢て此等の區別を知らずとも唯其兵道だに知らば可なり且つ毫も妨る所なく却て其煩きを避くるの便あるべし
- 一 本書は固と天文永祿の比より泰平よ及ぶまで戦國の記事を集めたるものなるも増補の新件ハ聊か其前後の事歴をも記載したり是れ敢て深意あるにあらず唯婦幼の目を娛樂せしむるまでのことなりとす
- 一 本書原撰の多くは殉難忠臣節義の事蹟を輔録されたるものなるが今日の形勢は昔日と異にし殉難忠臣節義の事蹟を貴まざるにはあらねども此等の事蹟を記載せんより寧ろ其事歴の謀略に屬するか或は其妙味を含みし方讀者の好むは固より其裨益もあらんと思ふまゝに増補の新件は自ら原撰と其趣さゝ異にする所あるべし
- 一 原文往々假名遣の誤ちあるもの、如しと雖ども最も急速の改修訂正は係れば一々之を正す能はず然れど余の評註増補文は皆之を正す但し或は活版の誤植なきを保し難し并は已を得ざ

ること、知られたし

評註 常山紀談

- 一 藤原秀郷平將門に面會の事
- 二 鎌倉景政豪氣の事
- 三 源義家征東の事
- 四 宇治河の役佐々木掬原先登争ひの事
- 五 義経景時逆権争論の事
- 六 楠泣男奇計の事
- 七 新田義貞水中刀投の事
- 八 楠正成奇計妙策多き事
- 九 大内康俊謀計を以て榎田城を復す事
- 十 亡瑞の鎧の事
- 十一 貞任歌の徳に因て一命を助る事
- 十二 源満仲敵の謀計に就て却て敵と闘る事
- 十三 源義家雁行乃散亂るを見て敵の伏あるを知る事
- 十四 平軍水鳥の羽音を驚かして京都に逃登る事
- 十五 齋藤實盛髪を染めて死する事
- 十六 源義経一谷峠越坂落の事
- 十七 熊谷直實平教盛を撃つ事
- 十八 那須與一扇子を射る事
- 十九 源義経弓と惜む事
- 廿 辨慶洛中太刀奪ひ牛若丸に出逢事
- 廿一 備後三郎櫻樹に忠志を書する事
- 廿二 楠正成子正行に遺言する事
- 廿三 武田信玄天下の形勢を談ずる事
- 廿四 長尾親虎越後を治められし事
- 廿五 輝虎平家と語らせて聞れし事 附 佐野天徳寺の事
- 廿六 參河國伊田合戦の事

三十七 持資京に上りし時の
事 附かゝるとききの歌
の沙汰
三十八 木全知短連歌の事
三十九 輝虎私市城を攻られ
し事
四十 輝虎太田三樂が子を
質に取れし事
四十一 北條氏康示弱乘強
の事
四十二 上杉謙信大人氣ある
事
四十三 上杉謙信と甲斐に
送る事
四十四 吉川元春醜婦を娶る
事

三十七 近江國音羽城軍の事
三十八 荒木安藝守討死の事
三十九 甲斐國非崎合戦の事
四十 箕平三郎功名の事
四十一 佐伯惟常高崎城を乗
取事
四十二 北條早雲智計の事
四十三 毛利元就嚴島合戦 附
盲人問者の事
四十四 元就伊豫の河野に船
を借れし事
四十五 那須の臣大關夕安深
慮し事
四十六 太田持資哥道入志す
事

四十五 板垣信形勢應黑白と
分る事
四十六 眞田昌幸謀北條勢
を破る事
四十七 羽柴秀吉遠計を以て
信玄と斯く事 眞田
昌幸秀吉が謀計を碎
く事
四十八 東照宮大高城へ兵糧
を入れ玉ひし事
四十九 大久保忠俊の事
五十 桶はざま合戦今河義
元討死の事
五十一 信長上京の事

五十二 東照宮大高城と引取
玉ふ事
五十三 武田信玄忍びの者を
討れし事
五十四 信玄鹿島傳右衛門を
呼れし事
五十五 備前國竜口落城の
事 附 浮田直家の事 并
岡剛助高名
五十六 遠藤喜三郎三村家親
を打事 并 備前明禪寺
合戦の事
五十七 上杉謙信小田原へ攻
入れし事 附 上京の事
五十八 新發田治長が事

五十九 信濃國川中島合戦の
事
六十 謙信軍中み青竹を持
れし事
六十一 謙信松山城後巻の事
六十二 東照宮一向宗の黨と
厚木板にて御軍あり
し事 附 峠谷半之丞が
事
六十三 同針崎合戦の事
六十四 向井與左衛門かへり
感狀の事
六十五 日吉師僧と欺く事
六十六 日吉奇略刀を奪ふ事
六十七 羽柴秀吉大言の事

六十八 眞田昌幸奇計の事
六十九 武田信玄夜物語の事
七十 武田信玄自己の倅と
造る事
七十一 眞田昌幸北條勢を欺
く事
七十二 中島元行が母備中經
山城を守る事
七十三 石川敷正淺岡某の標
の緒の結び様を習ふ
事
七十四 東照宮三河國一宮
城御後巻の事
七十五 三好松永光源院義輝
朝臣を弑する事

- 七十六 三好實休戦死の事附
光忠の刀の事
- 七十七 浦兵部功名の事
- 七十八 中村新兵衛永原安藝
守一騎打の事
- 七十九 北條綱成地黃八幡の
旗を捨る事
- 八十 柴田勝家水缸を破て
越を守りし事
- 八十一 勝家先陣の將となる
事
- 八十二 坪内某料理の事
- 八十三 大澤左衛門が手の者
ども 東照宮を窺ひ
奉りし事
- 八十四 清洲にて 東照宮信
長公御對面の事
- 八十五 信長公伊勢の國司と
亡し玉ひし事
- 八十六 大久保忠隣功名の事
- 八十七 高木主水村越與三左
衛門後殿の事
- 八十八 太田下野謙鑿の事
- 八十九 北條丹後指物の事
- 九十 淺井長政齋藤龍興と
軍の事
- 九十一 九毛兵庫助軍配の事
- 九十二 馬場美濃守今河の館
を焼く事
- 九十三 大友義鎮肥前國退口
の事
- 九十四 信長公 東照宮に爲
朝の鎌と進らせられ
し事
- 九十五 姉川合戦の事
- 九十六 同榊原二の手功名の
事
- 九十七 三井角右衛門生瀬平
右衛門功名穿鑿の事
- 九十八 金松彌五左衛門物見
の事
- 九十九 信長公朝倉を撃玉ひ
し事
- 百 長野信濃守上野國箕輪城
を守る事

- 百一 箕原原合戦の事
- 百二 同信玄遠謀の事
- 百三 同 東照宮御退口の事
- 百四 山崎長門守詫美越前守
討死の事
- 百五 中川重秀和田惟政と擊
つ事
- 百六 梶川彌三郎楨島先陣の
事
- 百七 山内一豊馬を買れし事
- 百八 奥平貞能父子歸降の事
- 百九 東照宮大井城御退口大
久保忠世高名の事
- 百十 渡邊守綱を鎗半藏とい
ふ事
- 百十一 謙信單騎佐野城に
入られし事
- 百十二 大河内政房節義の事
- 百十三 鳥居強右衛門忠節の
事
- 百十四 酒井忠次駒集城を乗
取れし事
- 百十五 長篠合戦の事
- 百十六 内藤四郎左衛門返答
の事
- 百十七 多田久藏が事
- 百十八 佐久間信盛偽て勝頼
に降る事
- 百十九 二股城攻内藤櫻井功
名の事
- 百二十 芦田信蕃二股城を
退く事
- 百二十一 信長公秋山伯耆を
刑し給ふ事
- 百二十二 松平忠次諏訪原城
を守るる事
- 百二十三 山内治大夫進士清
三郎功と讓る事
- 百二十四 長九郎左衛門能登
國發向の事
- 百二十五 越中にて謙信月と
賞せられし事
- 百二十六 信長公松永彈正を
恥しめ給ひし事
- 百二十七 山口六郎四郎奥田

三河守高屋城を
落る事
百二十八 長坂釣閑跡部大炊
邪佞の事
百二十九 東照宮勝頼と大井
川にて御對陣の事
百三十 栗田刑部幸若が舞
所望の事 附時田が
首實験の事
百三十一 岡田竹右衛門見切
の事
百三十二 朝日千介西郷伊豫
と討つ事
百三十三 菅沼定盈騰氣 附山
口五郎作後藤金助

討死の事
百三十四 岡崎三郎君の御事
百三十五 攝津國花隈城落る
事
百三十六 高天神落城仁科信
盛戦死の事
百三十七 徳川家康即智の事
百三十八 眞田昌幸即謀の事
百三十九 眞田幸村前後奇計
の事
百四十 眞田幸村智謀の事
百四十一 勝頼の首穿鑿の事
百四十二 秀吉勝頼の滅亡を
惜れし事
百四十三 信玄の館の跡を信

長公見給ひし事
百四十四 勝頼天目山にて最
後の事
百四十五 禪僧嚴巖院勝頼の
屍を葬る事
百四十六 信忠慧林寺を焼る
事
百四十七 東照宮依田信蕃と
助け給ふ事
百四十八 武田信綱誅戮の事
百四十九 戸田半右衛門山口
小弁佐と清藏功名
の事
百五十 小山田信茂誅戮の
事

百五十一 馬場美濃か女召出
さる、事
百五十二 辻彌兵衛が事
百五十三 明智光秀信長公を
弑する事
百五十四 秀吉備中にて光秀
が書と取れし事
百五十五 秀吉西國の米を買
れし事
百五十六 光秀居城を築く事
附 幸時の松の事
百五十七 森蘭丸才敏の事
百五十八 光秀反狀の事
百五十九 秀吉浮田を欺きて
上洛の事

百六十 黒田孝隆思慮の事
百六十一 池田家使使者筒井
願慶を試る事
百六十二 明智秀俊湖水を渡
して坂本城に入る
事
百六十三 東照宮和泉國堺よ
り御歸國の事
百六十四 小寺黒田始末の事
百六十五 井口兄弟武勇の事
百六十六 吉田六之助首供養
の事
百六十七 生田木屋之介武功
の事
百六十八 備前國鞆岡城合戦

福井小次郎歌を遺
して討死の事
百六十九 再福岡合戦藥師寺
額田片岡三士討死
の事
百七十 山崎合戦の時堀秀
政寶寺の山ととる
事
百七十一 森寺政右衛門武名
の事
百七十二 則武三大夫功名の
事
百七十三 澁川一益麻橋を退
く事
百七十四 光秀愛宕山にて連

歌の事

百七十五 幸田彦右衛門が母
義死の事
百七十六 志津が嶽合戦秀吉
智謀れ事
百七十七 堀七郎兵衛見切の
事
百七十八 志津が嶽七本鎗の
事
百七十九 石川兵助戦死の事
百八十 佐久間盛政生捕る
、事 附 久右衛門安
次源六郎實政が事
百八十一 尼子家の十勇士
百八十二 信雄長臣を誅せら

れし事

百八十三 平松金次郎始末の
事
百八十四 水野勝成高名 并 行
状の事
百八十五 本多忠勝忠勇の事
并 忠信の冑の事
百八十六 柳原康政秀吉を誅
りて札を立られし
事
百八十七 初鹿傳右衛門が事
百八十八 秀吉 東照宮の御
陣へ戦書と贈られ
し事
百八十九 東照宮暨江御出陣

の事

百九十 東照宮の御軍器小
依て暨江城降参の
事
百九十一 九鬼嘉隆暨江の湊
出船の事
百九十二 中村一氏紀州の一
揆と追拂はれし事
百九十三 竹中重治の事
百九十四 戦國の士功を譲る
事
百九十五 羽柴勝雅敵を免す
事
百九十六 前田利家末森城後
卷合戦の事

百九十七 利家鳥越城を攻め
らるゝ事

二百四 謙信信玄二將の批評
二百五 甲陽軍鑑虚妄多き事
二百六 仙石權兵衛九州に間
者乃事

二百十三 紹運齋藤鎮實の妹
と娶られし事
二百十四 志賀親次山海が嶺
に兵を伏る事

百九十八 本多重次強諫の事

二百七 鳥津家久鳥原合戦の
事 附 惠勝 某が事

二百十五 高畑三河功名の事
二百十六 森迫親正討死辞世
の事

百九十九 秀吉 東照宮に和
と乞れし事

二百八 立花道雪行 状の事
二百九 道雪仁愛深かりし事
二百十 立花道雪高橋紹運猶
尾城の寄手よ加はる
事 附 道雪死去の事

二百十七 薩摩勢根白の砦と
攻る事
二百十八 巖石城合戦坂小
坂先登の事

二百一 本多正信遠謀言上の
事

二百十一 稲葉一徹罪人を免
さるゝ事

二百十九 野矢甚右衛門功名
の事

二百二 東照宮伊豆にて北條
父子に御對面の事

二百十二 高橋紹運討死の事
附 立花統増薩摩に

二百二十 秋月種長降参の事

二百三 信長公平手政秀を惜
み給ひし事 附 小瀬甫
菴信長記太閤記と著
し事

二百十一 高橋紹運討死の事
附 立花統増薩摩に

二百二十 秋月種長降参の事

二百三 信長公平手政秀を惜
み給ひし事 附 小瀬甫
菴信長記太閤記と著
し事

二百十二 高橋紹運討死の事
附 立花統増薩摩に

二百二十 秋月種長降参の事

二百三 信長公平手政秀を惜
み給ひし事 附 小瀬甫
菴信長記太閤記と著
し事

二百十二 高橋紹運討死の事
附 立花統増薩摩に

二百二十 秋月種長降参の事

二百三 信長公平手政秀を惜
み給ひし事 附 小瀬甫
菴信長記太閤記と著
し事

二百十二 高橋紹運討死の事
附 立花統増薩摩に

二百二十 秋月種長降参の事

二百三 信長公平手政秀を惜
み給ひし事 附 小瀬甫
菴信長記太閤記と著
し事

二百十二 高橋紹運討死の事
附 立花統増薩摩に

二百二十 秋月種長降参の事

二百三 信長公平手政秀を惜
み給ひし事 附 小瀬甫
菴信長記太閤記と著
し事

二百十二 高橋紹運討死の事
附 立花統増薩摩に

二百二十 秋月種長降参の事

二百三 信長公平手政秀を惜
み給ひし事 附 小瀬甫
菴信長記太閤記と著
し事

二百十二 高橋紹運討死の事
附 立花統増薩摩に

二百二十 秋月種長降参の事

二百三 信長公平手政秀を惜
み給ひし事 附 小瀬甫
菴信長記太閤記と著
し事

二百十二 高橋紹運討死の事
附 立花統増薩摩に

二百二十 秋月種長降参の事

二百三 信長公平手政秀を惜
み給ひし事 附 小瀬甫
菴信長記太閤記と著
し事

二百十二 高橋紹運討死の事
附 立花統増薩摩に

二百二十 秋月種長降参の事

二百三 信長公平手政秀を惜
み給ひし事 附 小瀬甫
菴信長記太閤記と著
し事

二百十二 高橋紹運討死の事
附 立花統増薩摩に

二百二十 秋月種長降参の事

- 二百二十一 新納武藏守豪氣の事
- 二百二十二 黒田家岐井谷合戦の事 并小川傳右衛門野村太郎兵衛岐井友房と斬る事
- 二百二十三 豊臣關白北條征伐出陣の事 附本多重次放言の事
- 二百二十四 井伊直政關白を討んど言れし事
- 二百二十五 鳥井源八郎先登士志を論ずる事
- 二百二十六 南部越後攻口の事
- 二百二十七 上機日和いふ事
- 二百二十八 伊奈熊藏兵糧と司る事
- 二百二十九 蒲生氏郷の陣夜討の事 并氏郷金の三階菅笠の馬印を免されし事
- 二百三十 武藏國八王寺城落る事
- 二百三十一 大音藤藏雨森彦三郎功名の事
- 二百三十二 信雄卿那須に請せらるゝ事
- 二百三十三 坂部岡江雪免る事
- 二百三十四 關白鶴ヶ岡參詣の事
- 二百三十五 關白宇都宮にて佐野天徳寺と物語の事
- 二百三十六 蒲生氏郷大志の事
- 二百三十七 奥州葛西大崎一揆の事
- 二百三十八 蒲生家の士大將軍兵調練の事
- 二百三十九 氏郷伊達家の刺客を免されし事
- 二百四十 氏郷佐々木の鏝

- 二百四十一 本多忠勝萬喜が舊臣を呼出されし事
- 二百四十二 東照宮武田北條の跡御制度乃事
- 二百四十三 東照宮武田の舊臣と召て御物語の事
- 二百四十四 東照宮物具の御物語 附小野木笠の事
- 二百四十五 秤御定の事 附一
- 二百四十六 酒井金三郎本を忘さる事
- 二百四十七 成瀬正成忠信の事
- 二百四十八 東照宮相摸堺御打廻りの事
- 二百四十九 豊臣關白五腰の刀の主を察せられし事
- 二百五十 竹俣兼光の刀の事
- 二百五十一 本庄正宗の刀の事
- 二百五十二 冨の名様々有し
- 二百五十三 伊藤七藏高名の事
- 二百五十四 井伊直孝用意の事
- 二百五十五 黒田孝高法跡の事
- 二百五十六 眞田幸村謀計を以て大里と退くる事
- 二百五十七 眞田幸村稻荊陣の事
- 二百五十八 大関勇氣大言の事

- 二百五十九 朝鮮蔚山の役加藤清正敵情を察する事
- 二百六十 黒田長政慢言の事
- 二百六十一 曾呂利新左衛門屢々頓智の事
- 二百六十二 上杉景勝大人氣なる事
- 二百六十三 木村重成上杉定勝と追ふ事
- 二百六十四 馬場重介武功の事
- 二百六十五 利家白雲の琵琶と種村に與へらる、事
- 二百六十六 秦桐若勇威の事
- 二百六十七 澤村大學朱柄の鎗を持つ事
- 二百六十八 加藤清正天草の一揆退治の事
- 二百六十九 森本義大夫組討功者の事
- 二百七十 朝鮮陣の時 東照宮御遠慮の事
- 二百七十一 伊達家の士卒異風出陣の事
- 二百七十二 朝鮮南大門合戦 附向の備の事
- 二百七十三 國富源右衛門組討の事
- 二百七十四 加藤光泰大言の事
- 二百七十五 吉田又助川巾を積る事
- 二百七十六 清正虎を狩れし事
- 二百七十七 清正船を取せられし事
- 二百七十八 大岡名護屋まで大言の事
- 二百七十九 菅政利後藤基次虎を斬る事 附山先生南山銘の事

- 二百八十 泗川の城に狭間を切る時の事
- 二百八十一 加藤嘉明拔懸高名の事
- 二百八十二 淺野長政諫言の事
- 二百八十三 井口與市主従功名の事
- 二百八十四 清正の武備嚴重なりし事
- 二百八十五 朝鮮より虎と象とを渡す事
- 二百八十六 清正の士卒土穴に任し事
- 二百八十七 森本庄林黒白鳥毛の鎗鞘の事
- 二百八十八 清正の花押筆畫多かりし事
- 二百八十九 後藤基次龜甲の車と造る事
- 二百九十 和寧館合戦栗山利安武功用意の事
- 二百九十一 栗山利安儉約の事 附日根野備中守黒田家に銀を返す事
- 二百九十二 竹中重治心掛の事
- 二百九十三 峯澤某諫信と
- 二百九十四 久世三四郎坂部三十郎物見の事
- 二百九十五 野々口彦助物語の事
- 二百九十六 石谷定清御供に參る事
- 二百九十七 坪内玄蕃心得の事
- 二百九十八 道化清十郎平野與兵衛に對面の事
- 二百九十九 谷太郎左衛門物前心得の事
- 三百 可兒才藏の事

三百一 石田三成が事
 三百二 關白秀次公生害の事 附 吉田修理が事
 三百三 木村信隆介最後の事
 三百四 秀吉有岡城へ使者に行れし事 附 河原林越後山脇源大夫が事
 三百五 成田助九郎誅せらる、事
 三百六 秀吉公連歌の事
 三百七 三木牛之介銚形の詩歌の事
 三百八 谷大膳武勇討死の事

三百九 戸川肥後守秀吉公と信ふ事
 三百十 黒田如水先見の事
 三百十一 秀康卿伏見にて妓女國が舞々見給ひし事
 三百十二 直江兼續が事
 三百十三 石田三成直江兼續密謀の事
 三百十四 兼續惺窩先生に逢し事
 三百十五 石田が黨 東照宮と謀奉らんとせし事

三百十六 細川忠興忠告の事
 三百十七 東照宮細川家の難と救ひ給ひし事
 三百十八 七人の大將石田と討んとせられし事
 三百十九 東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立せ給へる事
 三百二十 東照宮花房助兵衛よ起請文を書と仰られし事
 三百二十一 下野國小山にて上杉入鹿義論の事
 三百二十二 渡邊惣左衛門野中市左衛門忍て

十四

三百二十三 大坂に使用する事
 上杉景勝會津表手配の事
 三百二十四 東照宮小山の途中にて竹を伐せられし事
 三百二十五 伊達政宗膽氣相馬の城下に宿せられし事
 三百二十六 竹村半兵衛田中長胤を押止る事
 三百二十七 岐阜城攻の事
 三百二十八 森寺四郎兵衛飯沼小勘平を討つ事

三百二十九 南部越後母衣串をぬかさりし事
 三百三十 兼松又四郎一柳の陣見切の事 附 兼松武功官上の事
 三百三十一 山田多門兵衛幼年功名の事
 三百三十二 米田助右衛門見積の事
 三百三十三 後藤又兵衛決斷の事
 三百三十四 合渡川合戦黒田三左衛門毛付の功名の事

三百三十五 神谷小介先登の事
 三百三十六 藤堂玄蕃赤坂町を鎮むる事
 三百三十七 寺澤廣高加藤嘉明度量の事
 三百三十八 春日九兵衛見積の事
 三百三十九 村上彦右衛門先見の事
 三百四十 土方三九郎武功の事
 三百四十一 小栗又市谷々見の事
 三百四十二 秀頼夜討せんと

十五

- 三百四十三 いはれし事 林瀬川合戦の事
- 三百四十四 稲次右近功名の事
- 三百四十五 浅香庄次郎働の事
- 三百四十六 林半介殿の事
- 三百四十七 伊藤金左衛門三宅平大夫後殿の事
- 三百四十八 毛屋主水物見の事
- 三百四十九 關ヶ原合戦島左近討死の事
- 三百五十 飲尾甚大夫一騎
- 三百五十一 先駈の事 附 成合 平左衛門が事 蒲生備中父子戦死の事
- 三百五十二 大谷吉隆平塚爲廣最後合戦和歌贈答の事
- 三百五十三 瀧川内記功名の事
- 三百五十四 本多正重の事
- 三百五十五 梶左馬助御書を認る事
- 三百五十六 田邊甚兵衛幼年功名の事
- 三百五十七 辻小作中黒道隨
- 三百五十八 島津義弘關ヶ原退口の事 附 大坂の商賣義氣の事
- 三百五十九 東照宮勝開の儀を延給ひし事
- 三百六十 細川忠興の北に方義死の事
- 三百六十一 安養寺門齋三成を生捕んとせし事 附 姉川合戦の時門齋生捕れし事 並 遠藤喜右衛門討死の事
- 三百六十二 大津城合戦京極
- 三百七十三 渡邊才兵衛武功の事
- 三百七十四 石田三成生捕る事
- 三百七十五 小幡助六郎忠死の事
- 三百七十六 河村權七郎が事
- 三百七十七 加藤清正の北の方大坂を忍び出られし事
- 三百七十八 淺井曠合戦前田丹羽の將士功名の事 附 松平久兵衛軍學鍛煉の事
- 三百七十九 山田勘六郎討死

- 三百六十三 家の士戦功の事 附 赤尾伊豆が事
- 三百六十四 高次大津の城を出られし事
- 三百六十五 立花家足輕鉄炮の用意 附 細川家の口薬入吉田大藏
- 三百六十六 猿頭ノ事 伏見落城の事 附 島居忠政雜賀孫市を獲れし事
- 三百六十七 村上三右衛門大
- 三百六十八 島源二武者振の事
- 三百六十九 三刀谷監物田邊城に籠る事
- 三百七十 田邊城 勅命に依て和平の事 附 細川幽齋古今集傳授の事
- 三百七十一 古田助左衛門思慮の事
- 三百七十二 伊勢國阿濃津城軍の事 附 佐治縫殿が事
- 三百七十三 長束大藏大輔降参の事
- 三百七十四 渡邊才兵衛武功の事
- 三百七十五 小幡助六郎忠死の事
- 三百七十六 河村權七郎が事
- 三百七十七 加藤清正の北の方大坂を忍び出られし事
- 三百七十八 淺井曠合戦前田丹羽の將士功名の事 附 松平久兵衛軍學鍛煉の事
- 三百七十九 山田勘六郎討死

- 三百八十 黒田如水凶相の馬に乗れし事
- 三百八十一 黒田大友石垣原合戦の事
- 三百八十二 三宅喜藏武勇の事
- 三百八十三 肥後國宇土城攻杉本次郎介夜討の事
- 三百八十四 福嶋家の士大將 東照宮と拜する事
- 三百八十五 加藤清正治亂と論ぜられし事
- 三百八十六 黒田如水豪氣事
- 三百八十七 浮田秀家八丈島へ配流の事
- 三百八十八 小早川隆景遺訓の事
- 三百八十九 佐竹義宣國替の事 并 車野丹波が事
- 三百九十 杉原常陸智勇の事
- 三百九十一 前田慶次が事
- 三百九十二 出羽國長各堂合戦上泉主水討死の事
- 三百九十三 伊達上杉陸奥國
- 三百九十四 松川合戦の事 附 永井善左衛門岡野左内が事
- 三百九十五 石田が子の僧助命の事
- 三百九十六 城後國一揆堀直寄武功の事 附 千利休が事
- 三百九十七 世間太兵衛伏兵を知る事
- 三百九十八 眞田昌幸父子三人始末の事
- 三百九十九 西村孫之進武功の事
- 四百 佃次郎兵衛伊豫

國松前城と守る事

- 四百 大久保忠佐よ三枚橋城を賜ひし事
- 四百一 細川幽齋古歌と書て忠興を諫められし事
- 四百二 本多忠勝功名と論ぜられし事
- 四百三 井伊家の附人連署して直政を諫めし事
- 四百四 堀秀政を名人太郎といひし事
- 四百五 大久保忠隣忠直の事
- 四百六 天野康景藤原高國寺城を去れし事
- 四百七 井上正就駿府へ御使の事
- 四百八 東照宮諫言を容給ひし事
- 四百九 三河國矢矧橋を修造せられし事
- 四百十 山名禪高敝衣を着られし事
- 四百十一 東照宮禮と正し給ひし事
- 四百十二 駿府城中へ水と引
- 四百十三 東照宮御中指の事
- 四百十四 金の七本骨の扇の御馬印の事
- 四百十五 加藤忠廣物語 并 飯田寛兵衛が事
- 四百十六 前田利常戦死の士を吊はれし事
- 四百十七 黒田如水遺言の事
- 四百十八 本多正信加藤嘉明を諭されし事
- 四百十九 安藤直次先見 并 本多正信遺言の事
- 四百二十 台徳院殿御行狀

んとせられし時の事

細川忠興の立物の説

忠興飯河豊前同

肥後父子を誅せ

られし事 并 肥後

が妻節義に死る

事

黒田清徳丸袴着

の時母里但馬舞

とまひし事

龍由大隅江戸の

石壁を築きし事

吉岡建法狼籍太

田忠兵衛手柄并

太田武技と論ず

四百三十三

四百三十四

四百三十五

四百三十六

四百三十七

佐々九郎兵衛經

濟格論の事

不破彦三武備の

事

井伊直孝衣服儉

約の事 附 戦國の

時質素なりし事

永井尚政執政の

用意を直孝に問

れし事

中院通茂公幼宮

を教訓の事

松平信綱恭敬の

事 附 信綱幼年奉

公の事

四百二十七

四百二十八

四百二十九

四百三十

四百三十一

四百三十二

林遣春格言の事

藤愷窩秀吉公と

論せられし事

紀伊大納言頼宣

卿諫言を歡び給

ふ事

由井正雪反逆の

時頼宣卿出仕の

事

水野重長諫言の

事

松野惣太郎前田

權之介賞せらる

事

四百二十一

四百二十二

四百二十三

四百二十四

四百二十五

四百二十六

四百二十七

四百二十八

四百二十九

四百三十

四百三十一

四百三十二

四百三十三

四百三十四

四百三十五

四百三十六

四百三十七

四百三十八

四百三十九

四百四十

四百四十一

四百四十二

四百四十三

四百四十四

四百四十五

四百四十六

四百四十七

福島正則領國と

召放る、始末の

事

福島正則信濃國

へ趣れし時の事

正則茶道坊主が

義氣に感ぜられ

し事

井伊直孝直諫の

事

明の鄭芝龍援兵

を乞ふ事 并 稻葉

正勝諫言の事

大納言頼宣卿援

兵の總大將と願

事

攻破る事 并 黒田

睡馬武零の事

水野勝重父子有

馬永純本丸一番

乗を論せられし

事

陣佐右衛門一揆

の長四郎が首を

取る事

松野龜右衛門鉄

炮修煉の事 附 松

野才覺の事

藤堂高虎阿濃津

にて勢揃せられ

し事

攻破る事 并 黒田

睡馬武零の事

水野勝重父子有

馬永純本丸一番

乗を論せられし

事

陣佐右衛門一揆

の長四郎が首を

取る事

四百三十八

四百三十九

四百四十

四百四十一

四百四十二

四百四十三

四百四十四

四百四十五

四百四十六

四百四十七

四百四十八

四百四十九

四百五十

四百五十一

四百五十二

四百五十三

四百五十四

四百五十五

四百五十六

四百五十七

四百五十八

柳生宗矩劍術御

師範の事 并 宗矩

先見の事

板倉重昌肥前國

島原の賊追討の

事 并 周防守重宗

先見の事

川北九大夫肥後

國川尻を守る事

天草の一揆夜討

の事

鍋島榊原島原城

先登の事

黒田勢天草丸を

取

攻破る事 并 黒田

睡馬武零の事

水野勝重父子有

馬永純本丸一番

乗を論せられし

事

陣佐右衛門一揆

の長四郎が首を

取る事

松野龜右衛門鉄

炮修煉の事 附 松

野才覺の事

藤堂高虎阿濃津

にて勢揃せられ

し事

攻破る事 并 黒田

睡馬武零の事

水野勝重父子有

馬永純本丸一番

乗を論せられし

事

陣佐右衛門一揆

の長四郎が首を

取る事

松野龜右衛門鉄

炮修煉の事 附 松

四百五十四 酒井忠勝直旨の
事 給ひし事
四百五十五 墨田川に橋と掛
られし事
四百五十六 板倉重宗京都所
司代しだいの事 附 板倉
勝重器量かちしげりやうの事
四百五十七 重宗訴訟うづたへを聞
え心得こころえの事
四百五十八 板倉重矩いかけのりの事
四百五十九 毛利勝永大坂よ
入る事
四百六十 池田忠繼朝臣士
を懐なつけられし事

四百六十一 芳賀内藏允武者
振ふるの事
四百六十二 佐竹勢今福口を
攻うる事 并 杉原常
陸武功りくぶくの事
四百六十三 上杉景勝志貴野
口合戦くちあひの事
四百六十四 上杉家の士大將
に御感状ごかんじやうを賜たまふ
事
四百六十五 井伊直孝陣代いひのちかの
事
四百六十六 本多伊豆守出陣
聯句れんくの事
四百六十七 東照宮御父子御

四百六十八 陣替さんかへの事
後藤又兵衛花房
助兵衛見切暗合
の事
四百六十九 大坂よて 台徳
院殿諸將しよしやうの攻口
御巡見ごめぐみの事
四百七十 東照宮志貴野御
巡見めぐみの事
四百七十一 小田切所左衛門
平野彌次右衛門
武者振むしやうふるの事
四百七十二 眞田が丸を攻た
る時の事
四百七十三 塙圍右衛門阿波

四百七十四 の陣へ夜討よさうの事
木村畑田屋牧野
四百七十五 四士武功ししぶくの事
木村重成感状きむらむねなりと
辭ことせし説せつ
四百七十六 稻田九郎兵衛武
功を語かたらざりし
事
四百七十七 細川三齋夜討評
論ろんの事
四百七十八 大坂城中軍評
定の事
四百七十九 堀直寄見切の事
四百八十 山本權兵衛功名
の事

四百八十一 毛利孫左衛門野
村越中むらこしなを詰とめる事
四百八十二 井伊木村挑戦重
成討死なるぢ井伊家諸
士功名しこうめいの事 并 横
田甚右衛門藤堂
高虎たかとらを激はげます事
四百八十三 脇五右衛門某氏
三彌武功さんやぶくの事
四百八十四 増田兵大夫討死
の事
四百八十五 青木長屋生捕る
事 并 井伊家赤
備あかひの來由
四百八十六 藤堂家合戦渡邊

四百八十七 勘兵衛功名かんべいこうめいの事
并 渡邊始末わたなべしまつの事
横田佐久間井伊
家の陣へ御使に
ゆく事
四百八十八 片桐丹後守一番
首くびを取とる事
松平助十郎先登
戦死せんじの事
四百八十九 安藤彦四郎討死
の事
四百九十 本多忠朝討死の
事
四百九十一 孕石備前廣瀬左
馬助討死ばすけぢの事

四百九十三 廣田圖書が事
四百九十四 毛利勝永軍配相違の事
四百九十五 伊藤武藏守馬駿を拾ふ事
四百九十六 郡主馬が事
四百九十七 野村城中才覺の事
四百九十八 長曾我部盛親生捕るゝ事
四百九十九 大野道軒生捕るゝ事
五百 渡邊内藏助が子城と落し事
五百一 齋藤織部落武者を助

五百二 澤原孫太郎節義赦免を蒙る事
五百三 丹羽左平太才覺城を落る事 附 左平太初陣義氣の事
五百四 大坂御陣中御支度の事
五百五 本多落合功を論ずる事
五百六 後藤又兵衛が事
五百七 古田重勝滅亡大河内元綱先見の事
五百八 石川重之功名 并 隠遁の事

二百四
五百九 直江山城守閻魔王に書と贈て訴訟人を斬る事
五百十 安藤直治紀州打の刀を成瀬正成に贈られし事
五百十一 土屋敷直執政の事 并 土屋忠直成立の事
五百十二 塚原卜傳劍術鍛煉の事
五百十三 東照宮松倉市橋堀桑山別所五人へ御遺言の事
五百十四 鮭延越前組下ゝ慈愛ありし事

五百十五 烏丸光廣郷行狀の事
五百十六 中院通村公江戸にて和歌を詠給ひし事
五百十七 本多忠義書籍評論の事
五百十八 義經の鞍の事
五百十九 根來法師賞功の定并 大澤仁右衛門の事
五百二十 大音左馬助先登を論ずる事
五百廿一 永田治兵衛功名の事 附 榎井合戦の事

五百二十三 於萬の方塙國右衛門と扶持せられし事
五百二十三 奥平家の士の妻髪を切て節を守る事
五百二十四 優婆塞の馬の事 附 信玄馬を擇ばれし事
五百二十五 森寺藤左衛門池田家興立の事 并 森寺政右衛門武勇の事
五百二十六 伴玄札殉死を止る事

五百二十七 番大膳二條城へ使に参る事
五百二十八 熊澤了介の界傳小櫃與五右衛門會津神公を諷諫せし事
五百三十 水戸義公御事業の概略
五百三十一 渡邊數馬報讐始末の事
五百三十二 多賀孫左衛門同忠大夫仇撃の事
五百三十三 大久保家の婢女主の仇を撃し事
五百三十四 林田左文劔術妙

- 五百四十 家康公甲の心得御示の事
- 五百四十一 家康公合戦心掛御示の事
- 五百四十二 小幡景憲物語の事
- 五百四十三 野間左馬進田螺を以て勝負占物語の事
- 五百四十四 老功の士相言葉物語の事
- 五百四十五 家康公駿府にて相討御吟味の事
- 五百四十六 柴田因幡守退治上杉景勝出馬の事
- 五百四十七 紀伊大納言頼宣卿十三歳にて大坂攻御先手を望むる事
- 五百四十八 高麗攻南大門合戦物語の事
- 五百四十九 越前黃門秀康卿伏見御屋敷へ於國を召る事
- 五百五十 津田長門入道道慶物語の事
- 五百五十一 島原落城の砌り平塚勘兵衛比類なき働きの事
- 五百三十六 尼崎幸右衛門が女親の仇を撃し
- 五百三十七 伊丹康勝搭言の事
- 五百三十八 佐藤直方直言の事
- 五百三十九 長篠合戦小武田勝頼人敷を出す事
- 五百三十五 石井兄弟報讐の事
- 五百三十四 手の手事并馬爪源五右衛門先見の事

- 五百五十二 大坂落城の時細川玄蕃頭鎗合言上の事
- 五百五十三 伊藤伊右衛門武田勝頼を討しを津田幸庵物語の事
- 五百五十四 塙國右衛門持道具の事
- 五百五十五 筑前岩出城攻秀康御年十四歳よて武勇御心入の事
- 五百五十六 越後浪人大井田監物の事
- 五百五十七 家康公駿府御花見の事
- 五百五十八 朝鮮攻に後藤又兵衛物見の事
- 五百五十九 加藤家足輕具足を着ざる事
- 五百六十 同家騎馬武者馬上鉄炮の事
- 五百六十一 藤堂高虎家中具足の事
- 五百六十二 同家土梅原庄右衛門刺物類當の事
- 五百六十三 讃務源英公の家士西尾右兵衛が
- 五百六十四 高麗陣の時完耳太郎兵衛南大門一番のりの事
- 五百六十五 同陣清正の家來矢木八右衛門矢疵の事
- 五百六十六 大猷院様日光山繪圖御覽の事
- 五百六十七 關ヶ原御一戦御勝利稻次右近高名
- 五百六十八 上杉浪人門田造酒之丞物語の事
- 五百六十九 丹羽五郎左衛門

- 五百七十 物語の事
榊原の家人黒田彦左衛門の事
淺野左衛門家人永田治兵衛働の事
- 五百七十一 信玄豆筋韭山とりつめ山縣同心
辻彌兵衛働の事
三筋吉田城迫合
信玄廣瀬幸と得る事
- 五百七十二 攝劔花熊城攻森寺清右衛門八田八左衛門手柄の事
- 五百七十三 輝政公武將の重寶を示さる事
家康公尾筋小牧合戦御勝利の事
家康公同合戦御自讃の事
福島正則關ヶ原出陣日柄れ事
- 五百七十四 同役田中兵部太輔長胤の中間水練の事
- 五百七十五 同御合戦終り御詮議の事
- 五百七十六 同御合戦毛利秀元戰場にて東方へ返る事
- 五百七十七 同御合戦終り御詮議の事
- 五百七十八 同御合戦終り御詮議の事
- 五百七十九 同翌十六日江筋佐和山へ向はる處大雨によつて御下知の事
- 五百八十一 同牧方面に御旗と立られ首御實檢の事
- 五百八十二 同役石田三成淨田秀家が謀を用ひさる事
- 五百八十三 同御合戦終り御詮議の事
- 五百八十四 同御合戦終り御詮議の事
- 五百八十五 同翌十六日江筋佐和山へ向はる處大雨によつて御下知の事
- 五百八十六 同牧方面に御旗と立られ首御實檢の事
- 五百八十七 備前少將光政の士上泉治部左衛門具足箱評話の事
- 五百八十八 瀧川左近將監一益極暑に馬上にて川を渉す時水を飼事
相圖の旗と云ふ事
- 五百八十九 武田信玄相圖の旗と用ゆる事
保科驍正信州高遠水籠城の事
上杉景勝最上義
- 五百九十二 元と合戦の事
美濃大垣にて八月廿四日より九月四日まで鉄炮追合の事
甲州山縣同心長坂重左衛門の事
信玄小田原發向の時根來法師一番鎗の事
輝政公岐阜貝吹右衛門が事
朝鮮陣の時兵器と塗馬糞にて乾かせし事
- 五百九十三 松永彈正久秀が馬の事
- 五百九十四 輝政公關ヶ原行軍順見の事
- 五百九十五 大坂陣の時利隆武者奉行の事
- 五百九十六 同役池山の諸士類當なき事
- 五百九十七 冨の頭心得の事
- 五百九十八 上杉謙信馬印の事
- 五百九十九 大坂夏陣井伊家士小笠原傳兵衛手柄の事
信玄嫡子義信と不和の事

- 五百八十七 備前少將光政の士上泉治部左衛門具足箱評話の事
- 五百八十八 瀧川左近將監一益極暑に馬上にて川を渉す時水を飼事
相圖の旗と云ふ事
- 五百八十九 武田信玄相圖の旗と用ゆる事
保科驍正信州高遠水籠城の事
上杉景勝最上義
- 五百九十二 元と合戦の事
美濃大垣にて八月廿四日より九月四日まで鉄炮追合の事
甲州山縣同心長坂重左衛門の事
信玄小田原發向の時根來法師一番鎗の事
輝政公岐阜貝吹右衛門が事
朝鮮陣の時兵器と塗馬糞にて乾かせし事
- 五百九十三 松永彈正久秀が馬の事
- 五百九十四 輝政公關ヶ原行軍順見の事
- 五百九十五 大坂陣の時利隆武者奉行の事
- 五百九十六 同役池山の諸士類當なき事
- 五百九十七 冨の頭心得の事
- 五百九十八 上杉謙信馬印の事
- 五百九十九 大坂夏陣井伊家士小笠原傳兵衛手柄の事
信玄嫡子義信と不和の事

六百七 大阪にて石川宗左衛門江坂清次郎組討の事
 六百八 藤堂の土田中權右衛門組討の事
 六百九 大阪冬陣上泉義郷指物の事
 六百十 東照宮と越前少將忠直卿御不和乃起原の事
 六百十一 大阪の役木村長門守と井伊家へ撃取の事
 六百十二 松平讀岐守船具足屋岩井孫四郎物語

六百十三 米倉丹後が子彦十郎鉄炮疵妙薬の事
 六百十四 佐野修理亮宗綱長尾但馬守顯長合戦の事
 六百十五 上杉彌五郎が事
 六百十六 佐久間河内守物語并渡邊内藏助が狂歌の事
 六百十七 岐阜攻の時川々洪水によつて後藤又兵衛尋問の事
 六百十八 家康公慶長五年七月會津御番向の事

六百十九 秀吉尾州進發の事
 六百二十 朝鮮陣中加藤清正馬の糞下知の事
 六百二十一 秀忠公參州田原御狩の事
 六百二十二 細川家鉄砲口薬入の事
 六百二十三 秀吉岐阜攻の事
 六百二十四 源君久世三四郎坂部三十郎へ物見仰付らるゝ事
 六百二十五 豊前國紀伊谷紀伊彌三郎籠城の事
 六百二十六 清正の十腰兵粮

と持すして不興

六百二十七 直江山城守伊達政宗に加勢を乞ふの事
 六百二十八 赤井惣右衛門武勇の事
 六百二十九 源君長久手御馬揃の事
 六百三十 大坂夏御陣真田左衛門佐幸村勇戦の事
 六百三十一 同時木村長門守敗北の事
 六百三十二 岡本御陣前忠

直卿の手仕寄の事

六百三十三 信玄の士小幡豊後物見の事
 六百三十四 島原一揆の時寺澤兵庫頭知計の事
 六百三十五 源君御扈從中根左源太勘氣御免の事
 六百三十六 島原一揆の時紀伊頼宣卿明知の事
 六百三十七 大坂陣渡邊國書即知の事

島原攻並河九兵衛足輕下知の事

六百三十八 島原攻並河九兵衛足輕下知の事
 六百三十九 伊助右衛門水戸家へ召抱らるゝ事
 六百四十 島原落城足輕陣佐左衛門手柄の事
 六百四十一 松山新助の勇將中村新兵衛が事
 六百四十二 大坂攻の時平野村失火安藤治右衛門運參の事
 六百四十三 城和泉守長盛謀害の事

六百四十四

權現權豐臣太閤
に御對面の時の
事

六百四十五

權現櫻花女と御
使にて 台徳院
様へ菓子と進せ
られし事

六百四十六

新太郎様夏目氏
の忠死を御賞歎
の事

六百四十七

本多三彌木下肥
後守義經并慶を
批評せられし事
板倉周防守 大
猷院様へ草鞋を

六百四十八

六百四十九

献せられし事
美賀内通忠功
の事

六百五十

飯田角兵衛其主
肥後守を誅めし
事 并新太郎様備
後守様へ御教訓

六百五十一

松前伊豆守用意
の事
古の名將學問和
歌を嗜れし事 并
酒和田喜六番量
の事

六百五十二

武邊は律義者に

六百五十三

六百五十四

ありといふ事
常徳院様越後家
の所懸御殿願の
事

六百五十五

土倉市正中村邊
右衛門を勤めし
事

六百五十六

毛利元就大内義
隆と鎌倉の事 并
熊澤勘右衛門捨
言の事

六百九十七

船薬二徹又學よ
依て死と免れし
事
中院内府幼き

六百五十八

六百五十九

宮に後見の事 并
本多佐渡守謀計
の事
名將たち質素よ
して下情に達せ
られし事

六百六十

威恩を以て國を
治められし事
佐藤五郎左衛門
吐の事

六百六十二

阿部豊後守明諭
の事

六百六十三

加藤清正吉岡建
法撃劍立合の事
荒木又右衛門喧

六百六十四

六百六十五

陣屋五郎兵衛に
撃劍を教ふる事
山崎闇齋攻守問
答の事

六百六十六

外人五月の祝旗
を見て驚く事

六百六十七

撃劍の師弟子の
術を試て刀を
與んとする事

六百六十八

若松籠城の事

六百六十九

近來珍しき謀略
の事

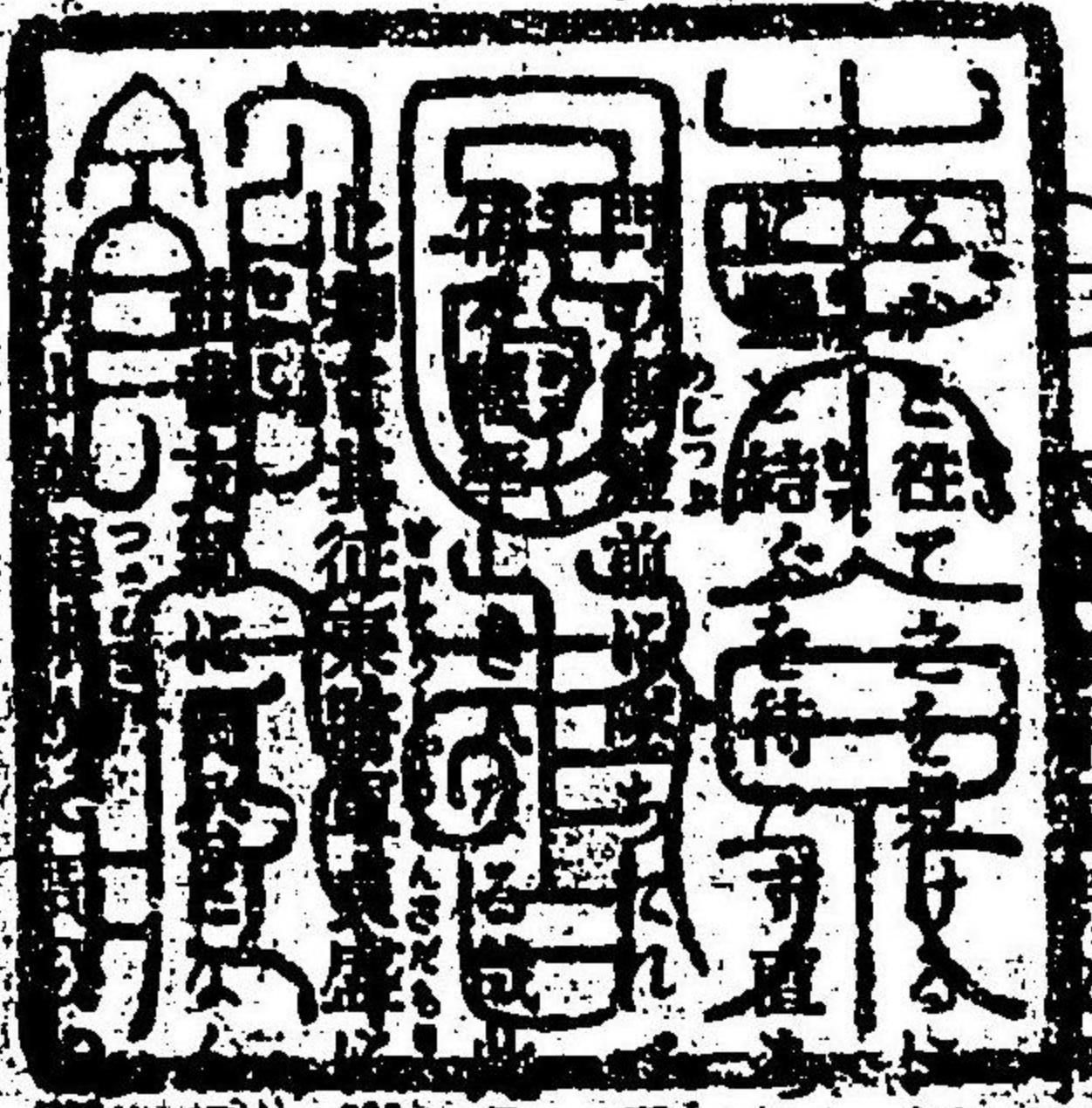
評註 常山紀談目錄終
増補

六百六十一	...	六百六十一	...
六百六十二	...	六百六十二	...
六百六十三	...	六百六十三	...
六百六十四	...	六百六十四	...
六百六十五	...	六百六十五	...
六百六十六	...	六百六十六	...
六百六十七	...	六百六十七	...
六百六十八	...	六百六十八	...
六百六十九	...	六百六十九	...
六百七十	...	六百七十	...
六百七十一	...	六百七十一	...
六百七十二	...	六百七十二	...
六百七十三	...	六百七十三	...
六百七十四	...	六百七十四	...
六百七十五	...	六百七十五	...
六百七十六	...	六百七十六	...
六百七十七	...	六百七十七	...
六百七十八	...	六百七十八	...
六百七十九	...	六百七十九	...
六百八十	...	六百八十	...

評註常山紀談卷之一

貸教書

備前 湯淺 元禎 輯錄
東京 杉山藤次郎 評註
増補



評者ノ
論時宜
ヲ知ラズ
ルモノナリ

天正三十四年下野と押頭使藤原秀郷なる者ありけるが平將門兵を起すと聞き如何なる人物な
 りに往て之を見りけるに折りし將門髪を梳りてありけるが秀郷來りしと聞き餘りの嬉し
 其髪を捉みて出で來り秀郷と款接し食を命じて共に食しけるに將
 是れはと斗りにて拾ふて之を食しけるを秀郷は傍よ之を見て心中竊に
 分よては逆も大事をなすこと叶ふまじ與に爲すことなるふ足らずと信
 從て共に將門を擊ちけるとなん
 云へる聖人ありけるが天下の賢人を招くこと急なりければ賢才の人入
 門と叩きける程に或日の事なりしが周公沐ひしてありけるふ士の門
 を叩く者ありしかむ其儘髪を捉みて出迎ふて後ち沐ひかけし髪を沐はんとて復た沐ひぬめけ
 るよ又士の門と叩く者ありければ直ちに髪を捉みて出づること前後三回よ及びけり其後又或
 日食を飯してありけるよ士の門を叩く者ありければ其食まかけたる哺と吐き起て士を迎ふ是
 れも亦同じく一飯の中に前後三回其哺を吐き出しけるが猶ほ天下の賢人と失はんとて恐れ

て先登せんと請ひけるに頼朝の云へるやう馬と乞ふ者多かりけるに吾れ與へず願に範頼等戦ひ
 克つ能はず吾れ且に親ら往かんとす池月は其時吾が乗るべきものなりとて乃ち磨墨を賜ひける
 之馳て諸士皆發しける其翌日佐々木高綱近江より來り謁しければ頼朝問ふて云ひけるやう汝近
 江にありと聞きぬるが蓋んぞ直ちに軍ふ從ふて京に入らざるやとありけるに高綱の對へよ曰く
 臣も一たび軍に從ふ以上は敢て生んことを期せず一たび君よ見えて訣別をなし且つは指揮をも
 奪せんと欲し馳すること三日よして乃ち達と臣唯一馬罷れて用うべからざる故に期ふ後れて漸
 く此に至り候頼朝大に喜び之に謂て汝能く我が爲めに宇治に先登することを得んかと云ひける
 に高綱の對ふるやう臣河上に居りて其深深と識り候間必ず先登仕るべく候と是に於て頼朝左
 らばとて池月を出して之に賜ひければ高綱の感喜云へん方なく謝して曰く君高綱未だ戦はずし
 て死すと聞あば則ち先登すること能はずと知られ候へ若し未だ死なずして戦ふと聞きしならば
 則ち先登する者は高綱なりと知られ候と拜舞て出でにけるを頼朝待て暫しと呼返し之を戒め
 て曰く景季等既に馬を乞ひけるを吾れ與へざるなれば面り之を賜ふと云へん人々さぞな氣分を
 悪しくすなすらめ汝之を記せよ高綱對て曰く諾り候と復た出でにける時に大軍、島に陣しける
 が數百千の旌旗戰船は寒風に吹靡ひかされ驟然と空中に漂へるは宛然長魚の水中に濯るふ鬣鬚
 て甚と奇觀なりけり又此處彼處に嘶く馬の聲は百千合し雷撥ふて凄然とかりける景季群馬を

觀るに磨墨よ過ぐるものなれば鼻を流しつゝも牽きて高丘よ上りて衆に誇示しけるに已に
 して何處ともなく大に嘶くの聲聞ければ人々何くの馬なるかと東西を見廻りしうち畠山重忠
 の曰く這は正敷池月の聲なり何以て此にに至るかと云ふ問も荒々の池月、高綱の僕牽きて至り
 つゝも丘下を過ぎにし程に景季問ふて曰く這の誰が乗るものなるや其僕對て曰く佐々木氏の乗
 るものに候と聞て景季大に懼りて曰く圖らざりき公の彼れを視る我れに踰るとは我れ牽る彼れ
 と死なん公二良を喪はしむるなりと即ち刀を扣へ路を要して待ちける程に馳て高綱來りて遠く
 此の爲體を望見て其駒に謂て曰く彼れ梶原よあらずや公の我れに屬するもの殆んぞ是れが爲め
 なりと漸く近づきければ景季呼んで曰く四郎久瀧なり其乗る所の駒は公の賜ふ所なるか高綱晒
 ふて云ひけるやう否な吾れ善馬なきを患ひ公の腕に就きて之を借らんと欲しけるに聞く子既ふ
 池月を得んと乞ひしよ命を得ずして磨墨を賜ふとか子尙ほ且つ然れば況してや高綱に於ては何
 めて命を得べきなは去りながら君の事方に急なれば彼處と願慮に違あらず遂に底人、誘ふて之
 を竊みけるなり若し後よ責問もあらむ子幸よ之を救解ひ給へよとありける程に景季色解け笑ふ
 て我れ早く竊まざるや悔ゆと云ひ與俱に西よ向ふてど行きにける斯くて兩軍宇治河の中に挾み
 て對し射戦を始めけるに良久しうして二騎わり馬に鞭打ち渦卷きたる水中に烟と乗入れ流れを
 亂して進みけるが先きなるもの景季にして後ちなるもの高綱なり高綱後より景季、給きて曰く

梶原氏よ子の馬の條 慢み候ぞと聞き景季 忝なしと馬を駐めて 條を約さんとあしける間に
高綱は早や乗り超して過ぎ對岸より上りて自ら登高たがに名乗ける景季腫で上りけるより義經功
簿に上すに高綱を先登第一と爲して景季と第二と爲しける

景は詐偽を嫌ひせと雖ども是れは敵に對しての詐偽にまて味方に向ての詐偽にわらず尤も敵
に勝たんとことを期するの策略に於ては或の味方の衆卒をも偽ることあれど其勝ちを期するこ
となく唯己れ一身乃功名をなさんとて味方と偽るは蓋し兵法の許さざる所なるべし然るに兵
家流往々己れ一身の功名を食らんが爲め人は他人一尺の利を書して我が一寸の功より代ひ悟
して顧みざる者あるは甚と嘆かまことなりけり佐々木高綱の如きは梶原景季が一寸の功を
養ふを我が一寸の功となしたるものなれば全體の利害得失に於ては敢て其差あるなれど雖も
己れ一人の功を食らんが爲め人を給くは兵家の道にわらずして甚と取つべし其功は以て其
恥を贖ふに足らずと謂ふべし世は梶原父子を心術正しからざるを大に之を排斥する者多く評註
者も亦之を排斥する一人なるが又此の梶原を給く者あるは愕然として驚かざるを得ざるあり
(五) 文治元年二月源義經南海と征討せんとて衆を率ふる京師を發して渡部より 艦をかけるに東
兵固より水戦に習えざれば人々如何あらん自ら危みける程に梶原景時諱ふ逆櫓をなさんとて
舟も逆櫓逆櫓とは何ぞやと云ひければ景時の云へるやう船艦皆櫓を設く難むに船を以て

退くに隨て以てす美經曰く進まんことを求めて退くは兵の通患なり是れ退かんことを求めんと
するにゐるか景時曰く宜しく進むべくして進み宜しく退く可して退くは 長將なり進むありて
退くなきは野猪武者にして恐るゝも足らず義經色を變へて曰く猪か鹿か吾れ自ら之を知らず吾
れ唯進んで敵を勦して快となすを知るのみ公若し大將ならば逆櫓千百設くるも吾れ唯公の爲す
所と聽かん然れども今日の大將は即ち吾れなり義經の若きは則ち之を欲せずと諸將景時を目笑
しければ景時稍々慚患たる色を顯としける是に於て義經遂に將士を令して曰く進んで死なんと
欲する者は我れも從へ退きて生なんと欲する者は此れより去れと此令下ると忽ち畠山重忠熊谷
直實金子家忠佐々木高綱等を始めとし從はんを願ふ者數白人に及びしかば將に發せんとするに
折じも逆風俄より起りて舟艦破ければ此も留まりて舟艦を修繕ひ漸くにして落成あしけるにぞ
義經陽に落宴と託言して陰に以て糧食を具へ即夜纜と解かしめけるに時に風反て益々暴しく
なりければ舟人肯はざる程も義經大に怒り聲高く荒ら、げて曰く風順あらば盍んぞ發せざるが
と伊勢義盛も命じて弓と張り矢を注ぎて云いしむるやう命を用ひざる者の射て殺さんと舟人此
の爲體と見て相謂て曰く行くも死し止まるも死す死は一のみ孰れ死する身ならば寧ろ發して死
なばとて櫓を發しけるに舟艦五艘戰士百五十騎獨り 炬を義經の舟にのみ置き餘の舟艦は其一
炬を目的として暗に乗り南を指して走りけるが大風の順あれば舟艦の駛きこと宛然射るが如く

にして黎明に尾子浦に達し敵の不意に乗りて雷撃し大に打勝ける
 我朝の兵略家を尋て指を折る者上世は源義經中世は補正成下世は眞田幸村を以て當時に雙び
 なき兵略家となし心竊に我朝三謀士と思惟もふの、如し成程右三氏何れも當時に雙びなき武
 なるには相違なしと雖も之と三謀士と思惟何れも伯仲の兵略家と思惟ふに至りては玉
 石混交の事と謂はざるを得ず然らば義經と最も優る者とし正成之に次ぎ幸村又之に亞ぐ者と
 するにあらんか否を一轉して其反對の點より指折り来るものなり即ち幸村を以て第一となし
 正成之に次ぎ義經又之を亞けり正成と幸村との人物比較の如き總體の上は於ては遙に正成を
 優れりとするも兵略上は在ては遠く幸村と勝れりとする事後章に於て論ふの期あるを以
 て茲に之を略しぬべし而して義經の兵略は正成に劣ること甚だしければ幸村と比較るに於て
 は其優劣甚だ遠く同日の論よわらず是は敢て彼此の兵略を比較るまでもなく本章の記事を
 以て知るべくして義經終身の戰況を見れば智略に屬するものは一もあらず皆勇氣に因ら
 ざるはなし逆櫓争論の如き即ち其一よしして又四國渡海の如き即ち其二なり而して義經の高名
 を博したるものは一の谷鴨越坂落の役にして是れを即ち義經の義經たる所以のものなる
 が是れも亦勇氣の所爲にありて敢て智略の所爲にあらざらん險阻き山坂を降り暴風雨を冒して渡
 れば必ず敵の不意に乘ることを得るにて善きを云ふこと敢て義經と待て始めて知るにあらざ

雜兵葉武者尙ほ且つ之を知る所なり然るに之をなす者少なきは其勇氣の足らざるが爲めあり
 義經は勇氣餘りありて智略亦し然るに敗ることなきは幸にして當時他に兵略を通じたる者な
 きに因れり義經若し永祿天正の頃に輩出したらんには進むを知りて退くを知らざる野猪武者
 何んぞ勝つことと得んや忽ち大死したることあらん馬鹿者多き社會に井人出づれば宛然非常
 の智者輩 したるの状なるべし義經の元治建久年間に輩出しぬるは即ち是れにて鶴鳴の聲
 起るを勁敵と信じ大に駭きて潰走れるが如き平氏の弱兵を敵手となしたれをこそ兵略家の如
 き外 觀を呈しぬれ敢て眞の兵略家にはあらざるなり彼の逆櫓の争論世人は皆義經の意見
 善しと信ずれども評註者は獨り梶原の轉見を可なりと考ふるなり然るに幸にして勝つことを
 得たるものは僥倖なるのみ古人稱す好んで其惡を知り惡んで其美とる者は天下鮮なし
 と蓋し義經は心術稍々正しくして梶原は稍々正しからざるを以て好惡全く其道理に反したる
 ものならんか
 (六) 造化の萬物を造る一として無用のものなし其無用なるが如く思ふものも眞に無用なるに
 ならず唯其用 所を誤るのみ故に能く其適する所を當りつれば天下の物皆有用ならざるはなし
 又各々能不能あり其能くする所に使はる皆有用の人成ざるはなく若し其能せざる所を用おはし
 る人として無用の人成ざるをなし補正成は能く此の道理を知り尙も一藝一能ある者は如何なる
 事なるに
 天九

下賤なる者と雖ども豫て之を蓄ひ置きて萬一の用になさんとを務めたりしが茲に一人善く潜然と泣く者ありけると正成是れも一能なりとて豫て蓄ひ置かれけるが京師烈戦の翌日早且より其泣卒と呼出えて能く教へ僧徒數人と與に昨日の戰場に行のしめて物色をなさしめければ敵兵來りて何故なるぞと問ひけるに彼の男甚と物憐に泣きて云へるやう別事にも候はず昨日の戦争に楠新田を始め七將皆撃死なしけるが私よ於て舊恩のある人々なれば其尸を素の獲て之を葬らんとして探し居るものに候と又潜然と泣沈める其爲體如何様實と見えければ尊氏之と聞て喜ぶこと限りなくして曰く彼れ敵戰ひ勝ちて退くは故なりと思ひしに違はず果して七將撃死なしけるよな來ざ去らば正成義貞等の首と素めて之と梟けんとして稍々肖たる者を獲て之を具と信じて之を繋けて以て密に示し天下亦恐るゝ者なしと思ひける此方は正成其夜卒數千を遣はして炬を執り北走るの體を示しけるに炬動累々として絶えざれば尊氏の軍之と望見て倍てこそ敵軍其將領を喪ふて潰去と覺るたり一人も漏さず奪取れと急ま其兵を分けて四出要撃し本營にゐる者復た敢て備へを設けざりけるにぞ正成時こそ善けれと諸將と兵を合し其夜發し味爽に直ちに尊氏の軍に薄り火を縱て鼓譟して揉立けるにぞ何かの以て支ふべき不意と喰ひま而々大に潰れて走りける

(七) 新田義貞上野に兵を起しけるに關東八州の豪傑響に應じて歸しければ其兵凡そ十二萬騎

ふ及びけるを分て三軍となし三道より鎌倉を攻め假狀坂より火を五十餘ヶ所に縱ちて進みけるよぞ鎌倉之と聞て震駭きけるが北條氏の見兵も猶は十餘萬ありける程よ分て三道を拒ぎける此方は義貞義満進んで山内に入りて兵を交へしに味方の一將大館宗氏此の役に戦死し其兵皆卻きける是よ於て義貞自ら選兵二萬を以て夜に乗りて之よ赴きけるに則ち敵大兵海岸に據りて柵を樹て兵艦を其南に列ねて以て傍射に備へたれば容易く渡るべうもあらざりける程よ義貞馬より下り舟を免ぎ海に向ひ拜して云へるやう天子逆臣の遷し給ふ所となりて西海に越在し給ふこと臣義貞坐から視るに忍びず兵を提げて賊と討たんとす伏して願ひく海神臣が忠義を眷て潮を退け以て道を開き給へかして其佩る所の金装刀を釋きて之を海中よ投げゝるに果して曉に比んで潮大に退きければ敵艦皆漂去りける程に義貞大に喜び衆と摩き進み諸軍之に従ひ直ちに府中に入り風に乗り火を縱ちければ烟炎天に漲りて甚と凄然しく義貞兵を縱ちて鑿殺にちし高時舉族遂に誅に伏したる義貞兵を擧げてより此よ至りて蓋し十五日此の如く速かなる戦功は古今其例を見ざる所なり

潮の進退は月輪の所在如何に因りて變化あるものにしに敢て人類の願ひに因りて動搖くものにあらず蓋し義貞豫め潮の退くことを知り兵氣を鼓舞せんとて此の如き演劇をなしたるものにして智者の往々なす所なり閻龍衆を率ゐて洋中と航しぬるに折しも舟破壊ければ牙買

加の海岸に泊しけるに土人の之と遇ふこと頗る厚ありしをも顧みず西班牙人閩龍の在らざるを窺ひ竊に出て鹵掠を始めければ土人大に怒りて糧餉を給せず飢餓に迫るを待ち其機に乗りて之を撃んと謀りければ西班牙人稍々糧餉の乏しきと告げ來りける閩龍は豫め某夜月蝕するを知りければ其日の來ると待ち土人と召きて之と誑して云へるやう天神汝等我輩を遇ふまど甚と亡狀を怒り是れより日月をして復た汝等と照さしめんとすと其言未だ了らざるに月漸や暗みければ土人恐懼て殆んど措く所なく地を頭とつけ罪を謝して曰く我々の爲めに天神を謝せよ金銀財寶唯命の儘之に従はんを請ひければ閩龍之を許しけるに既よして月漸く明かになりけるにぞ土人閩龍をよも人類にはあるまじし是れ必ず天神使ならんと信じ糧餉と給して厚く遣りけるとなん智者の權略東西符節を合せるが如し

(八) 楠正成宇都宮公綱と對陣なしけるよ正成敵軍の屯陣せる處の周圍山林に埋伏の勢と置き毎夜鬨の聲を揚げ今にも夜討のあらん體に爲せしかを宇都宮が軍勢は一夜も寝ること叶はず終に身心疲勞れ心ならずも退きける又楠千破失に楯籠え時二重塙を作り敵軍の攀登るを待て其偽塙と共に敵軍を堀水の中に顛倒して溺死しめたることあり或は熱湯熱糞を敵軍の頭上に注ぎ掛けて大に惱したることあり又は藪人形を以て敵を欺きし等奇計妙策甚と多かりける

(九) 細田城は古へ長州第一の堅城なり城主は大内介康俊と云ひけるが官軍に従ふて京都に行きにし留主中に賊將純友が爲めに城を奪はれ妻子從類も行方知らずと聞きて憤怒やる方なく思はれけるに其整手の大將に之保衡頼種命せられ之れに洩れしことを甚と遺憾に思ひ種々に意を碎き今近き地に居るこり幸ひなれとて郎等と相謀りて夜潛に防府を立出て細田にぞ向ひける去程に明くれば天慶三年七月七日官軍細田に押寄せ三方より攻上りて追上し追下し火花を散らしてぞ戦ひける原來城は屈竟の切處なるに兵士八千餘騎にて籠りしことなれば官軍も攻めあぐんでぞ見白にける斯りし程に其日の晩景に大内介康俊其身は能く威毛見苦しし黒草威の冑着て軍勢の中に打交り家の子中山才治道朝を最と華美に鍔はせつ大將の出立になし其勢五百餘騎旗をも差す笠符をも付けず閑々と西の尾崎よりぞ上りける斯れば官軍にも城中にも敵とも味方とも見定めねば雙方戦ひを止めて事の様を窺ひ見るに彼の勢城中に向ひ旌旗指上大音に呼はるやう是れは筑紫より城中へ後詰の爲めに指向られたる勢の中筑前國の住人多々良新助宗秀にて候今日下津の港に着きて候が今日の軍ふ逢はん爲め拔免して只今此處に馳參じて候城中の人々少々此れへ御出ありて我々が剛愎の程を御覽じて後日の權證に立給へと聲々に呼はりて寄手に向ふて鬨の聲を揚ぐれば官軍も實ぞと心得て偕ては敵にてありつるを見遁せしこそ口惜けれ一人も城中に入れしとて先鋒の兵士千五百餘騎蒸地暗にぞ蒐りける大内介の兵士共態と手痛くも戦はず遠矢少々射させて城の方へ引上る城中には之を見てあれへ出向て味方を援兵撃すなど

て一二の關を開きて八百餘騎鋒尖と揃へて奪て出で散々に戦ふたり大内介の兵士共多くの敵味方と出抜て八百餘騎の城兵に打交り難く城中にぞ入りける斯りし程に其日も早や暮れけり賊將は中山才治が大將の真似びして居たりけるを眞の筑紫勢多々良新助ぞと心得て急ぎ對面して九州のやうを問ふよ才治小賢き男にて知りすかしたるやうに眞しやかに語りける賊將船木言葉を改めて軍の意見と問ひければ才治膝立直し左ればとよ今度京勢と九州へ渡さず當國にて支へん爲め且つ此城の後詰の爲めにとて軍勢二萬騎にて太宰府を打出候が皆後陣の勢を待ち揃へん爲め下津の湊に船を懸けて相待ち候定めて明日こ此城へ到着致され候はんか左らば敵大軍に後と巻れじと必定敗北仕るべきにて候へむ當手より左のみ御手を碎かれずとも敵の自ら敗れ候はんすれども當國の固めに籠置れて候御勢の後詰も敵と追拂せしめ勳功を他に譲らんは残念のこと、や申すべき又宗秀先魁して手柄の程をも人に知らせんと存じ候ひしに海上意ならず遅参して今日の合戦にも逢はず候へば空しく志を黙止候に又筑紫勢に敵を拂はせば彌々先魁したる甲斐も亦く覺は候定めて敵は大勢の後詰を聞て臆病神がつき今宵は一人も心の落付たる者候まじ今宵敵陣に夜襲せば千一ツとも仕損じそあるまじ未だ後詰の來らぬ先きに一散しに致し候は、當城諸士の武功又宗秀も聊か先魁しぬる甲斐ありとこそ存じ候へど辭と盡し氣を闘まして申ければ座中皆此議に同じける左らば打立てとて城中には一千餘人残り置き其夜の時刻にか

りに城と出て二手に分れてぞ寄せたりける大内介は思ふまゝに敵をすゑし出して今は官軍の對陣よ近付きぬらんと思ふ此城の後なる人夫の小屋に火を掛けて五百餘騎の兵楯を叩き、敵を鳴らし同音に鯨波をぞ揚げたりける城に残る者共は墓々まき兵士もなかりければ関の聲も驚き織の火の手も騒ぎて度を失ふ大内介の兵士共と固より己が居城のことにしあれば豫て案内知りつ此處彼處に關と作り切て廻りける故賊兵共は弓箭を捨て物具を忘れ關と開き山を越て我れ先きにぞぞ逃げたりける官軍之を見てすはや城は落ちけるが鯨波を合せよと四方の寄手一萬餘騎聲々に關を作り、櫓を揃へて攻上りければ、悉に打出たる城中の兵士進まんとすれば官軍鎧を揃へて待ちかけたり退かんとすれば敵城中にありて木戸を閉て入れず進退谷まり如何ともすべきやうなかりければ賊兵呆然と暫し茫然としてありける所を官軍次第に攻めつけ、れば賊兵右往左往に落行きけるは大内介の謀計にてさしも強敵なりし賊兵を追散して城を復しければ人々皆感せぬ者ぞななかりける

(十) 源頼義の家臣お日置九郎と云へる者存りけるが未だ壯年の勇士なり驍勇にして善く戦ふ小松の夜軍も清原武道と共よ搦手より攻入て遂に味方の脇利となれり然るに九郎去年の軍に馬物具金銀を鏝め珠玉を飾り近邊を拂ふて出立けり之を見る諸軍勢天晴勇々しき武士の出立今日の莊觀なり斯る馬物具持てこそ良敵にも逢ひ捕分高名もすべけれ實に能き武士の嗜なれど

て各々之と感ぜぬ者なかりけるその中に獨り頼義は一目見ると氣色以の外は損じ終に何等の言もなく甚と不興氣にて退去りけるが翌日頼義九郎が方に使者と立て夫の物具思み思ふ仔細あり汝持なきを必ず亡びなん早々賣却ふべし但し固と思みの物品なれば味方の中へ賣るべからず縁と求め敵の方へ鬻べしと申越ければ九郎何等の仔細かは知らぬをも何は兎もあれ主君の命令なれば慎んで承りぬとて即ち其儘にぞ計ひける然るに後日乃軍に又もや先きの如く馬物具同毛にして最と爽るに出立けるに頼義疑ひ訝り怪みつゝ又人をもて初めの物具なりや思はしと申送りければ九郎も心中竊に怒氣と含みつゝ御前も參りて這は初めの物具に候とす着替の領にて候なりと申けるに頼義面相と變へそは着替なるの左なりと雖ども尙ほ亡瑞あり又宜しく敵も賣るべし穴賢看ることあるべからずと固く申されける程は九郎不審しく思ひけれどもそと問へんも流石にて唯命之れ従ひける是に於て小松の役には如何も威毛見苦しき黒革威の古物具をぞ着たりけるに頼義小松の戦は打勝て兵士を休め干戈を整へん爲めにとて營の岡は歸られけるは前又は宗任の一族并に武則が一家譜代の家臣等を始めとし數多相集ふて軍の談議をなしけるが聽て談議果しかば頼義日置九郎と身邊近く召して申されけるは這回小松の軍は着したる物具こそ最上の鎧なれ随分共は秘藏し置かるべし總じて物具は唯實よく鍔裏を搔ず太刀は物の骨を切るを要とす金銀と鏝め財寶を費したりとて人の目を悦ばしむる迄まで敢て害を免かるゝの

便にならず汝の先きの物具の亡瑞も願れたるものなり謂はれなき物具に過ぎたる美と盡して財寶を失ふは一家の費を又一國の費となり若輩は之と見て甚と苛めしきことに思ふて皆之を異似なん財寶は天よりも降ず亦故なく地よりも涌け限りありて年々に生出するものなるのみ然るを入らざる所は美麗華飾を好み財を費す豈に其家貧しむらざるを得んや貧うしては何んぞ善き士を畜ふことを得んや其費金ふての善き士の一人も畜ふに若かず然るに事此に出ずして彼も出づ是れ兵中の盗人あり其主豈に亡びざらんや己は敵味方相挑んで雌雄を決するの時は出立華美なる者は敵の衆之と目に的て此處彼處に馳合せ射落さん撃取んことと振舞ふべけれ是れ即ち亡瑞にあらずして將た何ぞやと有ければ其前にあり合ふ輩は云ふに及ばず遠く隔て之と聞きぬる者に至るまで皆々感じける是れより時の人結構したる物具をば亡瑞の鎧とて諸人之を忌嫌ふこといひなりにける

(十一) 衣 河城 城攻の役城將貞任戦ひ破れて力なく搦手より密に脱出散々になりて落行きけり八幡太郎義家は城中の騒動を見落行く敵を撃留んすと加美川と打渡りて北岸に兵を伏てぞ構へたりける如法暗夜のことなれば貞任は斯くとも知らず馬を早めて打過けり義家は貞任と見てとりければ遁さしと片手矢はげて追ふたりけるに貞任は日來の勇猛にも似ず今日は跡をも見ずして逃げたりける義家聲を揚げ臆くも敵に背を見するものかな暫く返せ言んと云ひければ貞任も

義家も知りて儲てはよも通れば得じ如何せんと思ひ煩ふてやとら馬を靜めければ義家大音にて衣のたては縫ひにけり

と下句を詠すれば貞任馬の鼻を引返し鏝を振向け取り敢へず
年と經し糸の亂れの苦しさに

とぞ上句付けたりける義家如何思ひけん番ひたる箭を差外して引返しければ貞任は虎口の死を免れ吻と一息繼ぎ遙に落延けり義家の馬廻りに候ひける兵共何とて斯く手に入りにし大事の敵を撃洩し給ひけるこゝろ不審なれど其旨を問はれければ義家申けるは左ればとよ此年來義家が矢表に向ふ者一人として生きて歸る者とはなし貞任も亦此事能く知りつれども敵に辭をかけられて彼れなればこそ引返して今の如くには仕りたれ當代若殿上人いかめしく歌讀給へどもかばり事の急なる千死を前に置きながら貞任が如く詠じ給ひなんや拙き夷心に飽く仕りたる志をも感ぜずして一矢に射落さんこと無骨の至りなり一旦命助けたれども此後十日とも保つべき命にあらずかしとわりける實に天地と動し目に見ぬぬ鬼神と哀れと思はせ猛き武士の心をも慰むるは歌なりと古今集の序に書ける理なりさばかりの戦ひの中若大將の心探の飽しかりつる情かなと感し思はぬ者とはなかりけり

(十二) 純素の黒崎城に籠るや左馬助満仲寄手の大將として晝夜を分たす攻めたるに城中術と

變つ、も防禦ける故更ニ雌雄決せず數日を経ぬる程に兩軍戦ひ疲營てありけるが純素は竊に謀計を巧み使者を官軍の陣中に遣はし過ちて賊に組みし今や大に悔悟しぬるの情を申述べ和を謀せんとて満仲に城中へ駕と枉られたしと申送りける尤も要心の時節にも候へば嫌疑と避けん爲め城中の兵と盡く柵下に出し候べし但し變應の爲め若輩の歩卒百人城中に残し候はんとなりければ兵衛尉重光等は其偽計なることを推し其使者を切て捨んずとなしけるを満仲押し止め甚と懇切に使者を款待し明日は満仲必ず見参入るべしとて使者を歸しけるにぞ重光等怪みつ、只今の返答餘りに穩便の沙汰なり道は敵の謀計に落ちたるに似たりさりととも又如何なる賢慮の任しませざるにやと問ひけるに満仲の答ふるやう左ればとよ其事なれ是れ敵の謀計なること我れも亦既に之を察す然れども敵の謀計に就て計れば勝たずと云ふことなし史を接する昔し漢楚の合戦始まりし砌り鴻門の會とて世の知る所なり其れと學んで純素我れを欺き城中に招き寄せ撃んと謀計ならん我れ之を知りながら行かざるは臆したりと云ひんか殊に敵の謀計却て味方の方便となると云ふことは使者の言葉に城中の兵士盡く柵下に出し變應の爲めは百餘人を殘さんと此百餘人は定めて純素が股肱腹心と頼める兵士共ならん我れも亦百餘騎にて行くべしとて翌日満仲遣兵百餘騎を撰りて城中に行きけるにぞ純素を謀り計りしと思ひの外却て己れ圍られて終に満仲の手に撃れ其城とも取らざるこそうたてけれ

敵の謀計と察するときは必ず其謀計も就て味方の策略を運らすこと古來兵家の常態にして多
 くは之を破り得ると雖も這は凡將に對しての策略たるも過ぎず若し敵將深く兵略に通ずる
 者ならんには敵の謀計に就て圖ることは頗る危険のものとす何ぞや敵將深く兵略に通ず
 る者ならんには已れ敵と謀るの體を示し其巧を以て容易く敵に知らしむるの工夫をなし先づ
 敵をして充分に反を謀らしめ置きつ己れは却て其又反と計ることあればなり孔明司馬懿の百
 將に秀る所以のものは全く茲にあり故に若純素として智將ならしめんには滿仲をして反を謀
 らしめ己れは却て其又反を計らんも知るべからず然れども滿仲は又々其反と圖らんか實に兵
 道は巡還極まりなきものなり

(十二) 寛治元年九月源義家自ら數萬騎の將として金澤柵を攻んとて發行なし柵を去る數
 里此方よ來か、りける時何の心もなく仰ぎて四方と見けるに折しも秋の末とてや南に渡る雁の
 數多連りたりけるが雁陣忽ちに破れて八方に散亂けり義家遙に此の體を見て怪み驚き馬を扣へ
 て云ひけるやう兵書に鳥起るものは伏なりと云へり今夫れなる雲間を渡る一行の斜雁忽ち行と
 亂せるは必定此の野に兵を伏つらん四方を取圍み搜索すべしと此の令と聞きたる早雄の若
 者ども我もくと馳向ふて尋りけるにぞ伏居たる敵兵共這は叶はじと我れ先きにと逃れたり源
 氏の兵士喚き叫んで追立追詰射ける程よ何かは以て堪るべき大半撃れ殘る者は皆疵を被り道々

の體にて柵中にて逃入りける其後義家衆に謂て如何に方々武道と心に掛けなば必ず先づ文道を
 學ばれよ我れ今伏兵あると知りて敵の謀計に陥らざりしこと是れ武の徳にわらず其故は九ヶ年
 の戦ひの後宇治殿に參じて軍の物語りしける折江師匡房卿義家が武の道に知らぬよと云はれけ
 るよより彼の卿に就て屢々學びけるもの果して空しからずと云はれければ皆々感羨なしとけ
 る

孫子云へらく鳥起るものは伏なりと又云へらく鳥集ふるものは虚ありと此の二言は正に反對
 の言にして二者共に兵家の宜しく知らざるべからざる所なり即ち目に敵人見ゆとも若し衆
 鳥行と亂し駭ける體にて起るものは即ち其下に伏あることと知るべし何ぞや鳥の性は固と物
 に駭き易くして最も人類と恐るゝものなれば必ず駭き起るの道理なり又假令敵人の
 集體を見ゆるとも若し其近傍に鳥集ると是れ活人にはあらで死人形たるを知るべし何ぞや
 最も人類は駭き易きもの起らずして集ふるは即ち活人にはあらざること推知するに難からざ
 るへし故に推理力に富める者は敢て兵書と讀まずとも此等の道理を知るに易しと雖も推理
 力に乏しき者は宜しく兵書に通じて此等の道理を辨へ置かるべし

(十四) 凡そ物の怖ろしくとはきは直ちに其物と見るよりも寧ろ其前にありて豫め其怖ろしく
 こは意狀と物語に聞か某の物は怖ろしくとはらしと心お想ひつゝ、ありける所へ其物を見るもの

甚と怖ろしくこはきこと心理上の定則人情の常なり彼の漢士の張飛如何も驍勇なれをとて八
 十萬の大軍と白眼返すと云ふことハ人力の能とべき所ならざるに之を能したるものは關羽の傑
 め張飛が怖ろまきことを云ふもの曹操が軍中に漸くしみこみておれをなり开と偕て置きつ源平
 富士川の役平家方に於て齋藤實盛關東勢の驍勇なることと物語りしければ平家の軍兵之を聞き
 臆病神に取つかれ戰慄つゝも富士川を狹みて對陣なしけるが川廣く流れ急にして何方よりも渡
 すの術なければ空しく時日を費すうち平家方には宿々より傾城遊女と招集ふて帶紐引解て歌と
 謠ひ酒盛きて居たり源氏は明日は矢合あるべしと軍議ありて終夜箭火を燒きたるが水の流れ
 に輝きて澤邊の螢かと疑はれける平家の方にも箭火燒さしが夜も漸く深けれを各々熟睡し或ハ
 寐言云ふもあり或は鼻より挑燈吹もあり或は齒嚙或は大の字百千の寢様に打臥し今は夜半白川
 夜舟の熟眠盛に富士沼は群集ひ居たる水鳥いくらともなく源氏の兵士共の物具のさ々めく音馬
 の嘶く聲などを驚きて一度にドツと飛出たる羽音夥しかりけるにぞ此羽音に平軍眠を覺せし
 が寢惚て互に源氏の軍勢近づきて関を造るぞと心得スハヤ敵寄たるぞと云ふ程こそあれ平家の
 總軍大將を始めとし取る物をも取り敢ず甲冑を忘れ弓箠を落し馬鞍物具小荷駄糧食に至るまで
 打捨つ周章狼狽甚だしく親ハ子を知らず從者は主を顧ず唯我れ先きにと京を指してぞ逃落ける
 此日此呼集へて遊びつる遊君共或は踏殺され或は手足を折られなきして泣々逃迷ふもありける

其状態は見苦しども又可笑かりけることなりけり源軍ハ斯くとも知らず翌日の曉お替を捕へ
 瀬踏して関を咄と作りかけて寄せたれども平家の陣に人ありども見はざれば人々張合抜けしつ
 ても其跡を廻りて見るに忘れ置きたる物夥しければ大に怪みをなし若しや京に源氏の方人蜂起
 けるによりて馳登りたるやらんと云ひしが頭を踏破られて病臥たる女一人ありければ是れに其
 事を問へば彼の女やら頭を擡げて云るやう此日此處にて遊びの相方となしつるが昨夜寐入
 て後夜半計に此殿原周章狼狽て逃迷ふ時妾は馬に踏れて斯く怪我をなし侍り其時は水鳥の羽音
 夥しく聞は候と聞き源氏の兵士申けるは實や水鳥の羽音今宵ハ常よりも夥しかりつるなり之を
 敵の聲かと疑ひ京家の者共なれば寢惚て逃げたるにぞあらんすらん臆病の士卒風聲鶴唳を以て
 勁敵と誤認すと聞きつるハ其れ此等の故みや矢合の撃手の使矢一ツだにも射ずして逃登りたる
 可笑さよと咄と打笑へば之を聞き傳へて行末危しと京中の上下安き心地がなかりける斯くて東
 國撃手の使空しく歸りて古京に着しけり軍は向ひては命を亡ふと聞くハ一人も関が上られたる
 ころいみじけれ遊るをば剛者と云ふ事ありとて人皆笑ひあへり一が太政入道清盛の門に落書あ
 り奈良法師が詠れたりけるとかや即ち其歌に

富士川の瀬々の岩こそ水よりも早くも落つる伊勢平氏かな

太政入道清盛之を見かれを聞て安からぬことに思ひ東征將軍小將維盛を鬼界島に流し侍大將

忠清が首を刎よとぞ購れけるとぞん

(十五) 木曾川の役平家の侍士齋藤別當實盛は最早從心所欲ふ年開たれば今は後營の恃みなく
閻王の使と通るべき身にあらねば何國まで死なんも同じ命なりとて思ひ切て赤地の錦の直垂に
黒糸威の鎧を着十八差たる石打の征矢負ふて敗軍の中に唯一人踏留まりて死生知らずに戦ひけ
り源氏方より手塚太郎光盛と云ふ者ありけるが此日實盛を目的て歩せ寄れば實盛も亦手塚目的て
進近づきけるにぞ手塚は又もや近寄りて誰人ぞ唯一人残り留りて戦ふぞ大將軍か侍士か名乗れ
斯く申す某之信濃國諏訪郡の住人手塚太郎金刺光盛と云ふ者なり能き敵と見受けたり名乗れよ
組まれよと云ひつゝも駒を早めたりけるに實盛云ふやう嗚呼我れは去る者なり思ふ仔細のわれ
を名乗るまじ汝と嫌ふにはあらず唯首を取て源氏の大將の見參に入れよ能き所領の價なるべし
徒に淵瀬よ命を捨つべからず木曾殿は見知り給はんずると思ひ切たればこそ唯一人踏留りて
相戦ふなれ敵は嫌はじ軍の習ひ勝負すること面白けれ寄合や手塚と云ふまゝ、弓と捨て無下に近
づかれれと手塚が郎等主に組せじと馬手に并んで中に隔てたり實盛に押並て無手と組附きける
に實盛心得たり應汝は手塚が郎等にぞあらめと云ふまゝ、に鎧の押付の板を掴み左手ふて手綱握
くり左右の鎧を強く踏て馬の脇腹に引付けて提げもて行くに足ひ地より一尺計り上りけり手塚
之を見て郎等を撃せじと駈並べて實盛が鎧の袖に掴み付き曳聲出でて鎧を越し三人組合ながら

馬上より撞と下にぞ落ちたりけるが實盛手塚の郎等と押へ刀を抜き頭を掻落す其間に手塚實盛
が弓手の草摺引上げて柄も拳も共に透れかしと指貫き纏て上に乗り頭を撃落しける手塚其首を
郎等に持たせ木曾義仲の前に行き申けるは光盛只今癖者の首取て候名乗れと申せば存する旨の
る故名乗るまじ木曾殿御覽せば知り給ふべしとて終に名乗らず侍士かと思れば錦直垂を着たり
大將軍のと思へば續く勢なし京家西國の者かと思へば坂東聲なり若き者かと思へば面の皺徒心
所欲に憂めり老武者かと思れば鬢髪色黒々と去て甚と盛なるの體なり何者なるらんか最々解
難しと聞き義仲打案じて哀れ武藏の齋藤別當にぞあるらん但し一年前に見し折には頭に霜雪を
戴りたりまかを今は更に白髪ならん鬢髪の黒きころ不審なれ樋口の古同僚なる故無見知りた
るらんとて召されたり樋口 誓を取り引仰けて其首を一目打見て涙といらく流し穴無慚や
な實盛にて候なりと申す義仲之を聞き如何に鬢髪の黒きこと問へば樋口左れば其事思ひ出られ
侍の實盛日頃申せしは弓矢取る身は老體とならば軍陣に向ふ時に髪に墨を塗らんと思ふなり其
故は合戦ならぬ時だにも若き人は白髪と見て慢る心あり況してや戰場に進まんとするよは古老
氣衰しと悪み退く時は今ハ分に叶はせと誇ん實に若き人と先きを争ふも憚りあり又敵も甲斐な
ら者よぞ思はめ悲しきものは老の白髪にて侍り俊成卿述懐の歌に
澤に生ふ若菜あらねどいたづらに年とつむよも袖をぬれけり

と請せ侍るとかや人は聊の言葉にも後の形見と遺し置くべきことふなんと云ひつるに違はず墨を塗りて候ひけり年來内外となく申せしことの哀れさよと樋口次郎兼光傍の池水はて自ら之を洗ふに墨は流れ落て白髪の尉にぞなりにける偕てこそ必定實盛とは知られにけり

(十六) 一の谷は役九郎義經は搦手の大將軍なりし程に其手に従ふ軍勢を率ゐて只管道を急ぎ山路にかゝりけるに鷲尾三郎と云ふ者逢ひ之を案内者として行き途中にして義經鷲尾に向ひ此の山の容子は如何にぞと問ふに鷲尾答ふるやう當處は峠越と名づけて極めて惡處なる故左右多く人馬も通り果まじ上半段の屏風と立たる如くにして白砂交の小石なれば草木生ず馬蹄も留り得ず又其れより下の半段は巖磯にて人だにも通り難し義經又問ふ此山に鹿のなき歟彼の惡處に鹿の通はずやと鷲尾對へて左に候鹿は多く居り世間寒くなれば雪の淺きに喰はんとして丹波の鹿が一の谷へ渡り日影暖かになりぬれば草の繁み臥んとて一の谷より又丹波へとてハ蹄り候なりと申すを義經聞き諸士よ偕ては心安しやとれ鷲尾肥に四ツの足あれば馬にも亦四ツの足あり彼れも獸此れも獸なり唯尾髪の有ると無きと又爪の割れたると圓きとの違あるのみ西國の馬はいざ知らず東國の馬は鹿の通ふ處は馬場を行くに同じけれ今は心安きぞ進めや進め皆進めとて巖の鼻岸の額を馬の手綱に合せて馳落し或は馳上り尻輪に乗りかゝり前輪に平み引居引詰鞭を鎧と打合せ打亂し虎の如くに走らせて北の山下おぞ至りける中にも島山重忠は日頃馬に奔

走せ未だ其勞に報ゆる所なく且つ前に大切なる軍を扣へたる身にしわれを今馬蹄を疲らすこと本意にわらず來ざ去らば今日只今は我が足を勞して馬蹄を休めんとて兩の腕を差伸し右手を馬の前足二本にかけ左手を其後足二本にかけたるよと見わけけるが曳と一聲諸共に頭の上に差揚たるまゝ坂を下りけるを自覺のりけることなりけり是れ義經の雄氣絶倫よして之に従ふ人々何れも猛賁の類の樊籠の輩あれば連きて險阻を越しにけるなり果せる哉一の谷の城此手よりぞ破れける

義經 越の坂落世人皆智略の所爲とて之と稱賛すれども蓋世子は獨り智略の所爲と信ずること能い老鳥も翔り難き山坂を下り進まば敵の不意に出で善きと云ふこと豈に義經を待て始めて知らんや凡將愚卒も尙ほ且つ之を知る然ると之を爲す者少なきハ其勇氣の足らざればなり是に由て之を觀れば義經越の坂落は智略の所爲とわらずして勇氣の所爲なること推して知るべきのみ要するに義經終身の軍の皆を勇戦にして其間智戦と云ふもの絶あるべきもの如し猶ほ委しき論は逆機争論の下に附評せるものあれば讀者宜しく彼れを參看すべし

(七十) 平家の一門一の谷の戦ひ破各々落延けるよ平將修理太夫經盛の末子無官太夫敦盛は紺地錦の直垂萌黄句の鎧に白星の甲被り滋藤弓に十八指たる護田の鳥尾の矢月毛の馬に打跨りつゝも知盛の乗らせぬる船を目的て波上一町計游つゝ浮きつ沈みつ漂ひけるに爰に源氏方の

一將熊谷次郎直實は天晴良き敵に組まばやと獨り渚に立て東西と見廻居たりしが之を見るより馬ノ海に颯と乗り入れ日の丸の扇子右手より取り打擲げ大音聲に呼はるやうオーイノ其處へ落行き給ふは大將軍とこそ見受け奉れ癖が目かよも違ひはあるまじ何とて敵に背を見せるか返し給へ斯く申す某は日本第一の剛者關東の旗頭武藏國の住人熊谷次郎直實なりと敦盛之を聞き何と思ひけん馬の鼻つらを引廻らし渚へ向けて游がせ來り馬の足立つ程になりければ弓矢を抛棄て水做太刀引抜き頼に押當來さ勝負せんと喚はりて岸に上らんとなしけるを熊谷待ち受けて上りも敢へず水鞠颯と蹴させつゝ馬と馬と馳せ並べて引組ながら浪打際に撞と落ち上になり下になり二度三度が程轉々けるが太夫は幼若なり熊谷は古兵なり結局の勝負知るべきのみ熊谷遂に上なり左右の膝もて冑の袖を無手と押へたれば敦盛毫も身動ならずまゝに熊谷は纏て腰刀を引抜て既よ頸掻落さんとて思はず内甲を見れば年齡漸く二八にもなるらんか未だ乳香消せて間もなき若上臈の薄化粧して漿水黒々と着けたるが莞爾と笑まれて見ければ鬼を欺く熊谷も穴無慚やな弓箭取る身は如何に情なきやかばかり若く美しかる上臈の何身に刃を當てらるべきと心弱くぞ思ひける故詞を和らげ抑も君は誰人の御子にて渡らせ給ふぞと問ひければ唯疾々斬られよと云ひしの名乗らねば熊谷押返し斬り奉りて雜人の中に棄置進せんも便なく侍るなりうきふしも知らる東國の夷比下臈に逢ふて名乗るまじと思召さるゝぞやそも亦道理に

は侍れども存する旨ありて申すなり厭はしからずば名乗り給へかしと云ふ太夫名乗りたりとも名乗らずとも通るべきにあらす存する旨とハ勳功の賞と受けん爲めならめ組むも斬らるゝも先世の契讎を思にて報るなり左らば名乗らんと思ひつゝ此方も亦存する旨あるなれば名乗り聞あするぞよ我れこそは故太政入道清盛の舍弟修理太夫經盛の季の子未だ無官あれば無官太夫敦盛にて生年十六歳になりぬるなりと云ふを聞き猛き熊谷も思はず涙をはらと流し生心愛の御事や偕ては我子の小次郎と同年よな三千世界よ子と持た親の心は皆同じ況してや此程の叔智にして嚴き御方と聞くと爽ひ奉らば父母の悶へこがれ給はん哀れさよ特に倅小次郎と同年にあり給ふ最と愛さふ助けばやと四方と窺ひしが又思ふやう先きに日本第一の剛者と名乗りしと聞きながら今落武者の身として此年若に返し合せしは大將軍の功と覺たり之れは公軍なり生惜や如何せんと暫し躊躇ふて案じけるが前にも後にも思ひく分捕する折なるを熊谷は一の谷よて現在組敷たりし敵と述して人に取られたりと云はれなんも子孫に傳へて弓箭取る身の名折なるべしと心と定めて申けるは世にも最と惜さに助け進らせばやと存じ侍れども如何にせん源氏の兵士陸も充滿たり特に梶原平山なぞの軍兵前後にあれば迎も遣れ給ふべき御身ならず御菩提は直實能々吊ひ奉るべし草葉の蔭にて御覽せ上疎には努々存せまじく候とて目と塞き齒を喰合せて涙を流し暫し時をぞ移しける敦盛は振返り見て如何と熊谷憶しつるの早や疾々斬られよ

と云はれければ熊谷の其聲を力に心中竊に南無阿彌陀佛と唱へつ、敢へなく首と打落す無慚と云ふも愚なり平家の人々の今撃るゝまでも風流の道を忘れず致盛陣中よても閑暇あらば頼んど思ひけるにや色懐じき漢竹の笛を香も睦める錦の囊に入れて鑑の引合に差れたり熊谷之を見て最と愛や此程も城中に曉方音樂の聞えつるは此の人々にてをわしけり源氏の軍兵は斯く數萬騎攻上りたれども皆東夷なれば樂など奏する者あるなし如何すれば平家の公達たかやうは優にはありけるぞとて涙を流して立たりけり躑て熊谷は笛と頭とと手に捧げ子息の小次郎が許に行き之を見られよかし修理太夫殿の御子無官太夫致盛とて十六歳と名乗り給ひし故助けらばやと思ひつれども前後に味方の勢充滿たれば之を憚り情なくも擊奉りぬ汝等が弓箭の末と想像て斯く愛目と見る悲しさよ假令直實世になき者となりたりども穴賢後世を吊ひ奉れと言ひ含め其れよりして熊谷は彌々發心の思ひ出しるは是れより後は絶て戰場よ出でざりけるが其後上洛なし吉水に至り法然上人の弟子となり蓮生法師と號し念佛堅固に修行なしたりしが命終の日を知りて其事を書きたる高札と立て群集の中にて稱名と共に目出度往生を遂げぬるは實に類ひ稱れなる英傑なりけり

(十八) 屋島の役一戦して兩軍疲勞たれば暫し息を繼て又戦はんとしけるに折しも沖の方より飾りたる船一艘渚に向ふて漕寄ると源軍の者之を見るに如月二十日の事なれば春風に翻翻と

柳の五重なる衣裳を翻し紅の袴着して袖笠被れる女房あり又紅の扇子に朝日の出たる形を書きしと狹て船の舳頭に立てたりしが彼の女之と射給へとて源氏をぞ招きける抑も此の扇子と申すは平家の寶扇ふて敵の箭は却て其射し者の身に中るべしと云ひ傳へたるものなれば若し源氏射外したらば平家軍に勝利なり若し又射中てたらば源氏が利を得ることなるべしと軍の占形にぞ立られける斯くして女房は船の中に入りければ源氏方遙に之を見て海上の風景と添ひ斜ならぬ面白さよ眼を驚かし心を迷はす者もありけり判官義經畠山重忠を召されて云ふやう我れは女をめづる者と平家は云ふなるか斯く拵へたらば定めて進出で興入らん所を能き射手を用意なし置き真中を差當て射落さんとの計策とは覺ゆるなり如何に和殿彼の扇子を射られんやと云へば畠山畏み君の仰せ家の面目と存する上を子細と申すに及ばざれども之れは勇々しき晴の雲なり重忠打物取ては鬼神と云ふとも更に辭退申すまじ如何にせん身體脚氣の病ある上よ此間には特々氣分の悪しきと覺へ侍れば射損じての私の取はさるとにて源氏一統の御瑕瑾と存する故一向他人に仰付られ給ふべしと辭退せり畠山斯く辭しける間此事と我れにや言附けられんかと諸人色を失へり判官と偕て誰かあるべきと尋れば畠山當時味方よて下野國の住人那須太郎助宗が子なる十郎兄弟こそかやうの小物は賢く仕候なれば彼等を召されて仰せ附らる可と云ひければ判官左らばと十郎を召て彼の扇子と射られよと仰す十郎御誼の上は子細と申すに及ばぬ共一

の谷巖石落の其砌馬弱くして弓手の臂を砂に突せて侍りしかば灸治も未だ癒す小震する故定りの矢仕りぬるとも存せず弟にて候與一冠者は小兵にて侍れども鳥小翔的などに掛りて外るは殆んど稀れなり定め箭仕りぬべく存ず仰せ付けらるべしと弟に譲りて扣へたり左らばとて與一を召されたるに與一其日の装束は紺村濃の直垂に緋威の鎧鷹角反の兜と居頸に著なし二十四指したる中黒の矢を負ひ滋藤弓と赤銅作の太刀を佩ぎ宿赫白馬の太く逞きに洲岬に千鳥の飛散たる貝敷置きて乗りたりけるが體て判官の御前より弓取り直して畏りたり判官之と見てやよ與一彼の扇子仕れ晴の所業を不覺すなと云ふと與一承りて子細を申さんとする所を伊勢三郎義盛後藤兵衛實基等與一を判官の前に引居て面々の故障にかへり日將に暮なんとす兄の十郎貴殿を指して申上は子細やあらん疾々急ぎ給へく海上暗くなりなば由々敷味方大事なり早々を急がし立つれば與一甲と脱とり童子に持せ採烏帽子と引立て薄紅梅の鉢巻なし手綱搔練扇子の方へぞ向ひける生年十七歳色白く小髭生ひて弓の取りやう馬の騎り風俗優なる男にぞ見たりける浪打際にて打寄て弓手の沖を見渡せば主上を始め奉り國母建禮門院二位殿其外官女の御船數多く漕ならべ屋形くの前後はは翠簾几帳を掛けあらへの内さへもさゝめきわたり袴涅卷の坐せども楊梅桃李と飾られたれば汝風に誘ふ虚焼の香は東の袖にも通ふらし御方の軍兵共は與一が背後を遙に見送りて此の若者必定仕るべく覺ゆるなりと申ければ判官も亦頼母氣にぞ見せ

ける矢比少し遠かりければ海上へ與一馬と一段乗り入れけれども猶扇子の隔は七段計もあるらんところ見たりければ頃以二月十八日酉刻計のよとなるに折節北風烈しく吹きければ磯打浪も高うして船を洶り上げ洶り振ひ漂へば扇子は申に定まらずしてひらくとこそは動きける沖には平家船を一面に雙べて見物に陸は源氏轡を揃へて見張りければ實は希有の晴業なる故與一眼を閉て心中竊に祈念する所ありて眼を見開きたれば風少し吹き弱りたる様子よぞ見ければ與一鏑を取てつがひよく引きひやうと放ちたるに過たず扇子の要際一寸計りの所をふつと射切りたるに鏑は海へ入り扇子は空中へ飛揚ししが春風に一舞二舞なしてのち海へ墮と落ちたるが紅の扇子の日傾く夕陽は輝きて白浪の上は漂ひ浮きつ沈みつ揺れけると澳には平家の兵士艦と叩て感じ陸は源氏の軍勢艦を叩て器々ける兩軍の感聲與一の一身にぞ集りける其營譽餘りて與一は暫しが程は人心地ぞなかりける

(十九) 同役に判官義經前と馳て戦ひけるが如何致しけん弓と水中より取落まける故うつぶしとなり鞭を以て控寄せ取らんとをまければ御方の兵共唯捨させ給へやと申けれども更に聽入らず遂に取て笑れつ、歸られけるを老臣共皆爪弾して假令千金を延たる御弓なりとも争で御命お代させ給ふべきと申ければ判官是に向ひ弓の惜きを取らば然らざる言ひるべけれ義經が弓ならば二人しても張り若くは三人しても張り叔父八郎爲朝をどが弓の様ならば態とも落して取すべし柔弱

なる弓を敵の手に取られ是れころは源氏の大將軍義經の弓よと嘲弄れんが口惜さよ命に代て取
りたるぞかじと云へば昔之をぞ感じけるとなん

義經惜弓の事とは其事と異すれど其惜むの情に至ては稍々似たること漢土春秋は世に之
れありたり故に參看の爲め之と記しぬべし楚の昭王與の國と軍と起し終日大に戦ひけるが照
王の勢戦ひ破れて士卒散々になりて敗走なしけるに昭王も履く所の履を落して遠て三十歩程
逃げ出しけるが又引回して失ひ履を尋られけるよ味方の諸將聲々に追撃の勢早や近付き
たり何故一回へらせ給はざると問ひければ昭王答へて云ひけるは我れ履を失ひし故に立歸り
て尋ねんとす諸將皆曰く履と失へばとて此れ程の物に身と代へて尋ね給はんや一足も先きへ
落延給へ照王の曰く楚國小なりと雖ども我れ豈に敢て一ツの履を惜んや唯此の失ひし履は今
朝より我が艱難に伴ひし故捨て走るに忍びずとて遂に尋ね得て歸れりとなん和漢名將の惜物
の情は相同じきものとこそ見たり

(廿) 武藏坊辨慶は固と僧なりけるが僧の行狀をせき左りとして亦武家にたよりて仕官もせず
唯意の儘に擧動けるが熱々心に思ひけるは古より大丈夫は好む所の物を千の敵を揃へて持つと
云ひ傳へり今も亦奥州の秀衡は名馬千疋鎧千領を貯へ松浦太夫爲次は胡箆千腰弓千張を持てり
と聞く然るも我が身と顧るに鎧一領太刀一振長刀一枝の外貯ふる物とては一物もあることな

し何卒人類に生れ出たる冥加に他人の佩きたる太刀なりとも千振奪取て我重寶にせばやと世に
も甚と稀れなる望を起し夜々京都の町々を横行して太刀帯びたる者に逢へば有無を云はず奪ふ
程に夜毎に五振七振取らざるはなかりけり然れども其武勇怪力頂羽樊噲よ劣ざりければ誰あり
て敵する者なく其頃落中の風説には此頃長け一丈計なる大法師徘徊して人の太刀を奪ふこと連
夜なり何さま天狗なんどの所爲ならめと臆病ある輩を昏るを限りに行すること恐れ適
腕力を好む者は試見として出づれば却て辛さ目に逢ひ太刀を奪はる、者數知れず彌々以て變化の
所爲と云ひ觸しける斯る程も辨慶は奪ひ溜めたる太刀と繕見るに既に九百九十九振ありけ
れば今は一振みて宿願成就此度は並々の太刀よは目も掛けず如何にも善き太刀を奪ふて望み
を達せんものをと五條の橋の近邊より往來の人の太刀に目を付くるに折しも八月十七日の
夜にして月は隈なく朗わたり宛然白晝の如く隈々まで見ゆれども心に適ふ太刀帯びし人もな
く辨慶殆々退屈し欠伸してありけるに其夜も既に明けに向々としにければ今宵は空しく歸るの
かと心に思ふ折から遙か彼方より笛面白く最と清らかに吹鳴しつゝも此方を指して來る者あり
て如何なる人によと待ち設けて見るに年齢は未だ志學か二八か升りて十七八の若上臍人品優美
にして白き直垂に善き腹巻して精好の大口を穿ち黄金造の太刀の柄も詞も及ばぬ計なるを帯び
たり辨慶争でか悦ばざらん宿願成就の期來れりと願れ出て二匠立に衝立上りて聲をかけわら儀

しの御方や、曉に及び候に何方へとは御出候を囀にも聞きつらん我れは頃日浴中を徘徊して人の太刀を奪ひし法師にて候よ見申せば少年には善き太刀こそ帯び給へり此處に過ぎか、りしこそ不幸なれ其太刀我れに賜はりて疾御通り候へ其報には行給ふ方まで送り参らせんとぞ申ける此の少年は是れ別人ならず牛若丸にて後年判官義経と云ふものなりければ莞爾と笑れ實に此頃ざる者ありと聞つるが傍て、和法師がこゝなるか懇望のうへは太刀を待させ度はわれと遣の家重代の秘藏にて備前友成が鍛し名刀なれば我が手より與ふること能はず左りとも亦欲くば倚りて取られよと云われければ辨慶も亦冷笑し左らば賜はらんとすつと寄りて奪ひ取らんとしけるに御曹子即ち牛若丸は後さまに三間許飛走さり太刀抜き放ち寄らば斬らんと構へたれを辨慶勃然として獅子の憤怒と發しいらざる小冠者めが腕立かな假令天魔鬼神なりとも今海内に我れに敵せん者こそ覺ぬわいでや一擲にして呉んずと大手を擴げて立向へども奇妙不測の秘術を究めたる身構なれば一點の透間なく手と出さんやうなれば心焦燥て太刀抜き弱し曳やと喚きて切てかゝる御曹子は右請左拂上下前後に躍り宛然小鳥の躡るに異ならねば流石鬼をも欺く辨慶も支へ難て大に駭き此の兒こそよも人間ははわるまじ化粧の者か變化の類ひか何ぞ致せ何程のことかあらんと太刀取直し精神と勵まし汗を流して闘へども御曹子が神變不思議の秘術に碎かれ姿も定かに見とむること能はず唯醉るが如くにまて了に二三段引退くと御曹子は待たり

や應と向真目的で斬りつけたるよ辨慶も眼早く之を見て拂切に斬り上げしに過ちて築地の軒枅に闖破と切込たり抜んど一曳引く所を御曹子躍り上りて辨慶が眉間を強く蹴て九尺計の築地の上へ飛上りけるよ辨慶は急所を太く蹴られて目眩き太刀とぼろりと放ちて尻居に倒れたふれけり御曹子は辨慶が太刀を奪ひ莞爾として築地の上に衝立て如何に賊法師よ我が太刀と奪ふまでこそなけれ却て汝が太刀を奪はるゝと不覺おろすや今より以後心と改め斯る狼籍すな太刀も取りて行くべきなれど斯程の古びたる太刀欲しさよ取りたりと思はれんも後めだければ返し取らするぞとて築地の棟を推曲りて投返し其儘物別れとぞありにけるが其後も後とて辨慶は懲りずまよ復もや五條の橋に於て牛若丸の太刀奪はんとて闘争けるよ又々大く負けたれば恐入り了に主従の契約をぞなしにける

此れを思ひ彼れを想ふにつけ少しく疑惑する所のものあり何ぞや武藏坊辨慶は當時海内無雙の剛者なること世人の皆許す所なるべく又實に去る剛者なること疑ひなし當時又平家方に能登守教經と云へる剛者あり此人終に辨慶と太刀合まぬるまどなまど雖ども若し太刀合するこゝとありと假想へば勝負は時の運とは云ふもの、十の八九は辨慶の勝ちたること想見に足れり然らば之を論事矩に掛けて見んに辨慶の義経に若かず又教經は辨慶に若らず故に教經を固より義経に若かずとの歸結を得ん然るに此の海内無雙固より教經等の及ぶべしにあらざる辨慶

を未だ年齢も行かぬ時に於て斯の如くわひしらひ悩ましたる義経が屋島の役此の教経に出逢
戦慄して逃げ迷しは何等の怪事ぞ若し果して辨慶に打勝つ武術ありとせば何故又教経の輩てか
りりし時容易く之と撃留ざりし若し又教経劣るとせば豈亦辨慶に打勝つの理あらんや
然るを年齢猶ほ若く未だ乳香も消やらぬ頃ハ大剛の辨慶に打勝ち其壯年に及んで小剛の教経
お辟易しこと疑惑せざらんと欲するとも豈に疑惑せざると得んや嗚呼孰れか義経の實力あ
る後人として適信する所を知らざらしむるものあり

(廿一) 備後三郎は中世の忠臣なり時の帝西遷せらるゝと聞き己に従ふ衆卒に向て吾れ聞く志
士仁人は身ヲ殺して仁ヲ成すあり義を見てせざるは勇なきなりと恐れ多くも今や帝にハ賊徒の
西遷する所となり給ふ由人臣の聞くも堪へせ見るに忍びざる所なり如何に面々途に要して駕を
奪ひ以て義を擧るふ意はなきかと云ひけるに衆卒皆奮然として之れに従はんと應へければ左ら
ば片時も早く打立つべしとて舟坂山に伏ちけるに良久しくして至らざれを其様子如何にと人々
遣はして候はしむに駕は山陰道に向ひぬと報せ來りけるにぞ左らばとて間道と經て杉坂に至り
けるに已に過ぎにし後に着あけれ七人々皆空しく散去りける三郎は悵恨やる方なく去ること能
はず乃ち服を變へ駕又尾ふて行くこと數日一たび帝に見白て言ふ所あらんと欲しければ間を得
されば了に其意ヲ達すること叶はず是に於て夜竊に帝館の庭中ふ入り傍ありける櫻樹と白

りて一言と書す即ち其文に

天莫空勾踐一時非無三范蠡

且日護兵聚視たれを固より漢文のことにしあれば下卒は讀むこと能はず偶々讀み得る
者あるも其意味に通せず兎や角空解をなまつゝも之を奏しければ帝之を熟視まで思ふやう昔し
越王勾踐吳王夫差と會稽に戦ひ終に破れて其身擒となりて恥辱を被りしが其臣下ハ范蠡と云へ
る者あり種々心を碎き再び兵を擧げて會稽の耻辱を雪ぎけるよしありよしが今も亦天朕を空に
うすることなく范蠡の如き者現れ出て朕を救ふ者あらんと意を寄する者あるは未だ朕の運命盡
きぬものと見たりとて欣然として笑ませ給ひける實に備後三郎ハ多く得難き忠義の士なりと
て後世まで賞賛ぬ者ぞななかりける

(廿二) 足利尊氏の叛くや楠正成新田義貞と共に之を防禦んとて其々の手配の方に行きけるが
正成は櫻井驛に至りけるに其子正行時に十一歳正成之を河内に遣歸さんとして之を誦て云へ
るやう汝幼しと雖ども已に十歳に過ぐ猶ほ能く吾が言を記せよ今日の役天下安危の決する所
意ふに吾れ復た汝を見ず汝吾れ已に戦死すと聞かば則ち天下盡く足利氏に歸せんこと知るべし
慎で禍福を計較り利に嚮ひ義を忘れ父の忠を廢ること勿れ苟も我れの族隸にして一人存す
る者あらば則ち率ゐて以て金剛山舊址を守り身と以て國に殉ひ死ありて他なし汝我れに報ゆる

所得此れより大なるはなしと帝の嘗て賜ふ所の寶刀を之に授けて訣別んとなしけるに正行従ふて共に死なんと請ひければ正成之を叱りつゝ、起ちけるに正行涕を揮ふて去りにける果して正成湊川にて戦死し美名を千載に傳へけり

(廿三) 武田信玄或時部下の諸將士を集へて種々の物語をなしける末其時の形勢を評して云へるやう織田羽柴徳川の三氏の實に大幸の人なり何故となれば我れと謙信とにして存命ならんには彼等三將の覇を成さんと思ひも寄らぬことなれども我が命數も最早近きにあらんか我れ死するの後は恐くは謙信も亦遠からず我が跡尾して黄泉に來りて所謂三すの川にて復た對面すべし其時に至らば天下乃勢ひは自ら織田羽柴徳川三氏の上に至らん必せり是れ彼等三將の大幸なる所なりと果して其言の如し

當時の形勢を懇々觀察するに信玄ありて謙信なければ則ち天下之既に信玄の有にして織田羽柴徳川の三氏は其國を擴ること能はず其國を擴ること能はざれば天下を取らんこと到底企て及ぶ所ならず若し又謙信ありて信玄なければ則ち覇は既に謙信の有にして織田羽柴徳川三將は到底覇たること能はず然るに信玄謙信世を同うして生れ並び起りしは織田羽柴徳川三將も亦大幸よして信玄天下を取ること能はず謙信覇たること能はず左りとして織田羽柴徳川三將も亦信玄謙信の存命なる間ハ天下を一統すること叶はず唯甲越互に嚙搏解けざる幸ひとし其間

に地を擴るの益あるのみ然れども其地を擴めつゝ、ありける中に二氏交々黄泉の人となりぬれば得たりとして織田天下と併呑しなり織田の天下を取りしは羽柴の覇を促し豊臣の覇は又徳川の天下と促したり實に織田羽柴徳川三將の爲めには甲越のあらんには寧ろ信玄謙信二將のあらんよとを要し若しならんには二將共にあからんことを要す一將ありて一將なきは織田羽柴徳川三將の大不幸なるに事此に出せずして彼れに出であるときは信玄謙信共もありなきときは間なく交々なき人となりぬるは人力にあらずして天なり織田羽柴徳川の三將は實に大幸の人と謂ひぬべし

(廿四) 長尾輝虎のよき名と猿松と申す

輝虎始めは景虎といふ後京に上られし時公方より輝の字を賜て輝虎と稱す鎮守府將軍長兼四代の孫左衛門尉致遠二男村岡五郎忠通が末にて其後長尾と稱す後管領上杉の讓を得て上杉と稱す甲陽軍鑑に輝虎景虎が末孫といへるは誤なり

兄と三郎といふ猿松わら者にて父爲景の心にそむく是繼母の讒言故とを聞くとりて出家にせよとして下越後の椋原淨安寺に追やられけり金津新兵衛供して米山越にかゝる時猿松八歳なればかちの士背にかき負て山を登り嶺なる堂にあり居て破籠やうのも乃とり出しまおらせけり猿松遙々頭城府内を眺やりやうち涙ぐみて我るくれちふる、事こりくちをしけれやがて軍をお

として志をとぐるならば此山によぎ登り府内を目の下に見れるすべししかるべき軍の地なりといはれしかば乳母子なる本條美作守も舌をふるひ其詞なわすれたまひそと悦けり

一説に爲景猿松を憎みて其傳城越前守にあづけらる此時十二歳それより諸國をめぐりて風俗を見人情を察し地の利を窺ふといへり

かくて猿松九年の間寺よあれども僧になるべき志あし天文十四年爲景越中にて討死あり嫡子三郎暗弱にて越後亂れ所々を敵に掠奪れたりしかば父の吊軍せんと思ひ立宇佐美駿河守定行をかたらひ天文十六年正月十八歳にて元服ま平三景虎と名のり椋尾乃城に旗とあげられたり三郎是と聞長尾越前守政景に七千の兵をそへて攻うたしむ景虎矢倉にありて敵の今夜引かへすべき物いろありといわれけるを定行聞てはるく攻來り空しく退くべきやといふ景虎敵に小荷駄なし久しく圍むべき計にめらずひき退ん處と撃は勝こと疑なしといはれければ定行も然るべしとして夜半に打て出る果して政景の軍みだれたらて敗北しけり三郎又打向ふ景虎柿崎の下濱に陣とりやがて三郎と打やぶる三郎府内をさして引退く時景虎米山の東坂本よて我ねむり氣さしたり休て後追うたばやとて小家に入る定行あるべくもなしとく追討ならば破竹の勢とは是なるべしといへども高いびきかきて眠られしのを覚かゝる時を失ふ事よとなげきあへりや、有て景虎つと起あがり三郎の軍兵山と三分の一あまたに越たりと覺ゆいと追討やとて馬よのり蝶の

貝吹たてさせ龜破坂よりかとしかけ大よ打勝れけり定行けふ北るを撃べき時ろら眠せられしは山を追上らん敵をかさにうけなば利有べからず敵下り坂になりて引立たるをうたんとこの事なり是老臣等が及ぶべきにあらずことしはわづか十八歳弓箭をとる事誰やの人か肩をならべなんどずのたりける景虎越後を治め得て高野山に出奔せんとす長尾家の長臣相集り景虎なくは國を敵に奪るべしといふとて關の山ふかひ行てさまくにとめければ景虎のいはく我年わめて威重からず老臣等我と輕せば國の根本立す此國人の爲よ利を求るは我身の害をまねくなり是より後吾命を背くまじとならば神文と書て得させよさらすはといまらじといはれけるよもとより君と仰ぎ奉るべきなりいので命と叛き申べきと申ければさらばとて立歸り三郎を隠居させ是より威とふるひ越中に攻入て父の吊軍とげられたり長臣の中に二心ある者を林泉寺といふ處よて腹切せて國と治められけり晩年謙信と稱しぬ

景虎假眠の謀計唯敵として下り坂に至らしむるを待つのみの一事にあらば敢て眠る就かずして可なり然れども是れには又他よ計る所あればなり何ぞや三郎下濱よ敗れて米山指して引退くも雖も敵の追撃あらんことを察して埋伏の勢よ置き且つ敵の動靜如何と問者を放て窺はしむるよ景虎又之を推知ところから故意假眠の枕に就き暫し間睡ける體を見えければ敵の間者此爲體を見て借ては景虎に疲勞て最早追撃心なしと察し此由早速埋伏の勢よ報せれば斷

くは長居も無用なりとて曾々立拂ひ本軍を尾して引退きける景虎は此時と計りやをら做
眠の頭を掻げむくくと起上りて俄然追撃て大み打勝ちしことなり智將の一匪等閑なら古
人曰く志士の誇は老聃の一笑に如かずと評註者も亦云はんとす曰く萬卒の奮闘は景虎の一
睡に如かずと

(廿五) 狸虎ある夜石坂檢校に平家をかたらせて聞かれけるに夜段を聞てしきりに落涙せら
れけりかたへの者せもあやしみ思ひければ狸虎れはく吾國の武徳も衰へたりとおぼゆる也昔
鳥羽院の御時禁中に妖怪ありしは八幡太郎鳴弦して鎮守府將軍源義家と名のりければ妖
消ぬといへり其後頼政を射たれども猶死すして井野隼人さし殺してとめたりと聞ゆ義家
鳴弦せしは天仁元年の事なり鶴の出しは近衛院仁平三年なれば僅に四十六年なるに武徳既に
とれる事はるかなり今又頼政に就くる事四百五十年われ又頼政におもる事遠かるべければ
ほは涙の流る、よとぞ語られける又相似たる物語あり附記す相州北條の幕下佐野城主天徳寺
勇將なりしにあり時琵琶法師に平家と語らせて聞けるにいまだ語らぬ先われは唯わはれなる
事を聞度こそわれ其心得せよといひしに法師承候とて佐々木高綱が宇治川乃先陣を語り出
たりしは天徳寺雨東と涙とながして泣たりけりさて又今一曲前のおどくわはれなる事と聞たし
といへば那須與一が扇の的をのたる半に及て天徳寺また落涙敷行に及べり後日は側に仕へし者

ともみ過ふし日の平家はいか、聞つるといふに昔面白き事に覺へ候但し一つ心得ぬ事こそ候へ
二曲どもに勇氣功名たる事にてわはれなるあたすこしも候はぬに君には御感涙にむせせせられ
候今に不審なる事と申わひ候といへば天徳寺驚きて只今迄は各々頼母しく思ひ候ひしが今の
一言にて力を落したるぞと先佐々木が事をよく心にうかべて見られ候へ右大將舍弟の蒲冠
者も賜はらず寵臣の梶原も賜はらぬ生倭を高綱に賜はるに非ずや其甲斐もなく此馬にて宇
治川の先陣せずして人に先をこされれば必討死してふた、び歸るまじき暇乞して出ける其志わ
はれならぬ事かぞとてしばし涙をのびひつ、まぼしありていひけるは又那須與一も人多き中
より撰ばれて只一騎陣頭より馬と海中に乘入るのむかふも至るまで源平兩家鳴として
めて是を見物すもし射損しなば味方の名折たるべし馬上にて腹かき切て海に入んと思ひ定め
たる志を察して見られよ弓箭とる道ほどわはれなるものはあらじわれは毎も戰場に臨て高綱
宗高が心よて鎗を取候ゆゑ右の平家を聞時も兩人の心を思ひやり落涙よたへざりし然るも各
はわはれにばかりしと思ふも各の武邊は只一旦の勇氣にまかせて眞實より出るよてはなさ
やと思はれ候夫よて頼母しからずとなげきけるぞと
(廿六) 善徳公 御諱清康安祥二郎三士卒をあらはれみ勇財おはしませしかば人々其徳よなき從
ひ奉れり尾張國よ向せ給ひ森山に陣せさせたまひしに不慮の事出來て安部彌七郎弒し奉りける

植村出羽守いまだ新太郎六郎と申せしが十六歳にて御側に有合せ彌七郎をばたち所に誅してけり御家人はせあつまりて唯あされ居たり植村人々に向て御敵をば既に切て棄て候思ひなく事もなし腹切て御供可仕といふ人々主君のかたきたらん者をたちどころにうちし其功いふに不及これに候者ども、御側よだに候はば誰か御身よおとるべき御身一人幸よ御側よ有し事これ神明の冥助とやいふべしされを腹切て冥途の御供申さん事また誰かは御身におとるべきされば各其所存のおとくにふるまひて可然我等の必死近きあり今日いたづらに腹さらんとも存せずと答ふ植村聞て其必死は如何と問ふ其時抑われら必死はわづか十日を過すへからず殿かくならせ給ひぬとかたきの方又聞はば彈正忠信秀軍勢をひきゐて岡崎よ攻來らんわれら爰まで腹さらば誰の若君の御爲に矢のトすぢもはかしく射出すべきさればわれらが討死の此時に有と覺も同じく死せん命運速は十日を隔つべし御身が切腹をしひてとやめんとにも非ずといへば植村聞てげも理かなさらば人々と俱も同じく討死せんとて岡崎よ引返す案にたがはず織田信秀八千の兵を引率して三河の國よ打入り大樹寺よ陣どりたり此時内膳正信安も背き參らせ上野の城に在て兵とも出さず昨日まで屬せし國人ども多く心變えてけり引返したる御家人等僅に八百人わか君に御暇乞して一同にどつとなきさけびてこり打出けれ二手にわかちて伊田のあなたに打て出づ此人の義心を神明感じ給ひけん此所よ見給ひし八幡宮の鳥居のかたきの方

に向て六尺餘りみづから動きけるよぞ不思議といふも餘りわれ人々大に力を得てよせ來る敵をまつほどよ此所は上は霜枯の野路はるか下は賤が田の面にかよふ道一すぢあり織田家の軍も同じく二手に成て上道下道こなたに向てよせ來る八幡の宝殿の方よりして白羽の矢ふり來りかたきの上よれちかゝると見物の人の目には見えてけり上に向ひし味方野はひろし真中にとりこめられ一人ものこらや討死す植村下道より向てまっさかをかく味方僅四に百人四千の敵と打破り又上道におし向ふ野路のかたきも散々にみだれ立信秀からさいのち生々尾張國に引返すこれ伊田の合戦とて十倍の敵よ勝し事ためしそくなしよして大將ましまさぬ軍していとけなき君をたてしこと古今よ比類有べからずと義臣の節操を語りつたへて美談とせり

神助の談信す可らず古人の之を不思議となして感服すれども今人は之を物理上の所爲として敢て感服せず然れ共兵家の神助に托して謀計を施すこと少なからず嘗て豊臣秀吉朝鮮を撃んとて安藝に至り嚴島祠に講し百錢を投げ祝して曰く吾れにして明よ勝たば面なる者多きに居れど乃ち投けるに皆面なりければ衆大よ喜び勝利の吉兆とぞ勇みあひけるに這の像め兩錢の裏と裏とを糊合にせしものなれば孰れが出るも面の現るゝの工夫に巧しものなら是れ其一例にて其他此等の類少なしとせず本章八幡宮神助の件蓋し亦此等の巧にやあらんすらん耶若し然らずとせば蒲瀧空説にして敢て信すべからざるなり

(廿七) 文龜三年細川武藏守政元の臣澤倉といふ者武畧ありて近江を半切したがへけれども
 蒲生下野守貞秀入道知閑音羽の城に據て澤倉と軍す澤倉音羽は山城なれば水乏しからんとて水
 の手をとり切たり知閑敵より見ゆる矢倉の前に馬どもあまた率出させ白くしられたる米を桶よ
 入くみかけて人々裸になりて馬を洗ふ澤倉遙に見て思ひの外に此城水多しかくで久しく陣せば
 兵糧盡などて圍を解て引退く處を知閑案内よくしりつ小倉なはての要害に撃て出一同に切
 か、り十分の勝利を得たり知閑は氏郷の祖父なり

有れば則ち無しと見せ無ければ則ち有りで見すること兵家の常此策畧を知りて始めて敵に對
 すべし知閑が澤倉を欺くこと即ち是れにて眞に妙と謂ふべし然れども敵若し大に智略に富め
 る者ならんには有りて故に有りを見せ無くて其儘無きと示し敵として却て其反にあらんか
 と疑はせて之を欺くこと肝要なり孫臏孔明が能く敵を敗るもの多くは茲にあり試に其一例と
 示さんに孫臏嘗て龐涓と對陣せる時糧食餘りあり然るに故に砂石を糝に包みて糧食の如く
 仕立て敵の間者に見せたりければ倍てころ糧食に盡きて其實を知らざると斯くは偽飾るよ
 なと思ひつ其趣き注進なしけるに龐涓果して然りと信じて追ふたりける程に終に孫臏が謀計
 に陥り増兵減竈と欺かれて撃れけり智將の謀計虚々實實々々ひ知るべからざるものあり

(廿八) 大永年中細川武藏守高國と入道道永と三好左衛門督と相戦ふ三好桂川を渡りて高國の陣へお

しよする波多野備後高國と怨ありて丹波の兵を引具し高國は叛き三好と與しければ高國の軍敗
 れたり高國は將荒木安藝守百ばかりの兵を引わかち人々此有さまを見よ月花酒宴の時の詞よは
 似さりしよ恥をしる弓とりなき世なりやわれ只今道永の爲に命をすて、思を報すべとさらすは
 道永のがれたまはじ此戰場を引退きたりども人並なればあながら獨のみ誹らるべきよ非ず候へ
 ども義を義とせざるは弓箭とる身よ非ず各又眞の士となりてわれと同じく義とふまんやハなど
 思はんには強べらさずいかといへば皆こは口惜き事をも承候日比の所存をしらしめさずと覺
 候いかでかかゝる時きたなきふるまひとすべきとて少しも落ちるべき色なし荒木さざらん寔
 よ主従の契此世のみよはあらざりけりと打笑ひて京軍の崩るゝとよろに見てひしと折しき待
 かけたり阿波丹波の兵競ひかゝるを間近く引うけわれと誰とか思ふ管領の下よ荒木安藝守とい
 ふ者ぞと呼り一同に立わがり先かけた敵十人ばかりつき伏ればしる處を追たつる事五六
 間をかりを限としはなれゝよあるべからず遠く追つめて疲れなしと又そこよ折しきかゝる
 敵と待うけてつさしりぞけいく度となく戦ひたるに敵討るゝ者數をしらす荒木主従一人ものこ
 らず討死しける間に高國僅に近江よのがれ得たり荒木平生士卒を愛するゝ惻情を盡せり古への
 食を分衣を解樂と申し苦を共よするの風あり少しの功ある人をすてずある時荒木がした
 しきゆかりある人と荒木が士のかるき者と俱ふ疫痢を煩ひけるに療養力のかざりに心を付

てゆかりある人よりもまさりければこれを恨けり荒木縁者はわれ問すとも心と附る人ありわが
何がしを賤しいやしき者は人おろそかにせんわれ心と盡さずは療養おこたりあらん縁者を
りかよする又は非れども先重き處に心を盡せるなり無事の時は縁者したしといへども事ある時
ハ士卒の切なる故なりしたしき一族ゆかり有ととも陣々わかれたれを互に死生もしられず士
卒は戦場は死生を共にするものあれば一人とても本意を失ん事わが大なる患なりと答けるを士
卒出て人々恩を思ふ事骨髓に徹せりとぞなん

(廿九) 武田晴信父と逐の後諏訪頼茂小笠原長時多兵にて甲斐に攻入り非崎にて一日の中に合
戦四度に及びり晴信非崎に向ふ時諏訪小笠原のもとにゆありある者原加賀守と始としてあまた
甲府に残されければ原人々に向ひけふの合戦に各たち功名をどくべきにとゞめおかれしは二心
を疑ての事なり今日敵に向は長く弓箭とる躬の恥とならんいかにといふに皆二心なく疑
と蒙らんより敵にあひて討死せん事勇士の志に候とてわれ先よと非崎にはせ行けり此時晴信軍
する事三度戦ひ疲たる所に頼茂長時一手になりて進み來れを既み危く見にしるをも原が來る
に力と得ていさみす、も晴信原とよびて其志と感じ日向今井等と後ふひるへさせ競ひり、る敵
ふ當りて打やぶられけり是晴信士と激勵の策にていざと原等を甲府に残れしなるべし
(三十) 織田備後守信秀松平三左衛門忠倫と密謀りて岡崎の城を攻とらむとす岡崎小池聞

へまのば應政公甚いきどほらせたまひて寛平三郎重忠を召上和田に往ていつはりて降参し三
左衛門と刺殺し來れ偏に汝を頼むよと仰ありしかば寛承候とて上和田に至り降参するよしたば
かりければ三左衛門岡崎の士心と通ずるものあれども寛兄弟と味方にせばやと思ふ折からなれ
ば大に悦て懇にもてなしにけりかくて夜深て後案内はよく見とゞけつ忍びよりて賜りたる脇
差を以て三左衛門がわき腹を二刀刺てのがれ出る平三郎が弟助太夫正重も兄がわとをまたひて
上和田に至り墮の中にかくれ居たりしが待うけて打つれて岡崎に歸る上和田の者ども追かくれ
ども及ばせ應政公感狀と賜はり羽粟よて百貫たまはりぬ天文十六年十月の事也應政公は 東照
宮の御父なり

一説脇差を賜はりける時これを以て刺殺すべしつゝ貫きたる刃をぬかば 必聲を立てて然ら
ばおきわはせ追かけて汝のがれ得じつき棄て遣歸れど仰られしかども賜りたる脇差をすてん
と本意に非ずと思ひぬいて出ければ果して三左衛門聲をわけ人を呼ける故 各 起合て追かく
れどもとく逃れ得て歸るといへり又一説に平三郎は忠倫が平安城長吉の刀をとり得て歸り忠
倫を刺殺せしあると申せしかば 即 其刀を平三郎に賜はりけるともいへり
(卅一) 天文年中大友義鑑の臣朽網下野親滿謀反して高崎の城の二の丸を乗とりてたてこもり
しに佐伯惟常ハ大友家の旗下なるがかくと聞梓築より馳來りぬ佐伯平生鷹狩を好む 専かりの

爲には非ずまで軍だちの爲なり狩り出る時ある日途中より使を走らせて士よぶ士よ將たる者
 の騎馬の軍兵を引つれて即時に來る歩士又は弓の物主たればくみの卒をひきつれてかけ集るこ
 れゆる不意の時といへどもさわく事なし半時斗の間あらん敷日前より下知せしよりも陣列整ひ
 てしづかなり使え走らるる者は壯なる者を三十人撰て馬の前より打つれたり常しかけ走りよなれ
 て息長く足健にして馬もあつらぬはさなり此時佐伯が士杉谷次郎太郎同次郎三郎とて兄弟
 あり相共み一番乗と志し城の壁いづれの方か上るよよろしからんと目とくばりけるよ壁の隅あ
 り爰に目を附直やりの柄を四五所纏めて足だまりを結び一同に攻か、る時杉谷兄弟兼て心と付
 置し所に始より近づき居て走りつくと鎗とたてかけ終り登りこけて一番に入たり
 (卅二) 北條早雲盲人は無用の物として小田原領分のめくら法師とからめて海にふしつけに沈ん
 どせられしかば盲人皆四方に逃ちりける其中を潜に間に用ひられまどぞ
 (卅三) 陶尾張守晴賢大内義隆を殺ければ毛利元就陶と打滅んと計れけり陶めくら法師一人を
 間者として元就の謀としる元就始はかくともしられざりまかや、心付ぬある時陶が臣永來丹
 後守われよ志を通ず時賢をうち破ん事近きにありと語られけるを彼法師やがて陶に告たりけり
 元就又書簡を贈らる永來は周防の岩國の城もあり彼書簡を山口にて奪とるべきやうにしたくせ
 られければ陶大に怒て永來を殺しぬ元就彌かの法師と近づけ平家をかたり習ふと稱しかたへ

まはなされず陶傳へ聞て悦ぶ事限なし元就またある夜軍評定せられけるが敵大軍にて宮島にお
 しわたらばいかゞはせん是吾亡ぶへき運のきはめと覺ゆるなり又草津廿日市におしよせなば岩
 國の弘中參河守われふ心をあはすれば裏切させて陶をうら破るべしとぞ語られける是は陶と防
 がん地に櫻尾の城あらでは然るべき要害なし宮島に渡らば乘來る船を焼たて歸路と塞ぎて軍す
 べしと思ひける故なりけりめくら法師かくと陶に告ければさらば宮島を攻なんといふ弘中參河
 守隆包然るべからじといへども陶は弘中が二心と疑て聞も入らぬ弘治元年十月四萬あまり大船
 よどり乗り宮島ふらち渡り四方を取かまみたり元就も今度は十死一生の軍と思ひ定め吉田の城
 を出わづかに四千斗の兵よて後卷せられけりこゝ地御前の祝日おとよ蛤舟よ乘宮島に渡り
 けるよ近づけ心をわはせ士一人祝のまねさせ宮島にわたらせらる陶が者ども元就いかにと
 問祝さん候元就は草津廿日市へ陶殿おしよせたまはんにけ勝利なるへきと宮島を攻させ給ふ故
 手だて空しくなりぬとて火立浦にゆきれておはし候が引返され候らめどかたる是より陶が者ども
 もれこたりぬ元就はひそか軍のしたくをなし一手は洲屋明神の前より船よりあがり天本の御
 前よ多寶如來のあたへを通り宮島の町口へ向ふべし一手は吉田郡山の百姓をら五千餘に嫡子隆
 元を大將として彌山島より西の山の木末よたのまつと結つけ百姓ばらに手々よたい松ふたつ
 持せ夜半の鐘と相圖よ同時よ火とつけよ吉川元春は船にとり乘浦口にうけ並べたる陶が船ども

を燒しつめよと謀と定めらる十月晦日けふ草津に引退へし風雨やますは元就は今夜火立浦
よとまるへし二日の兵糧を物の具の上よつけよとて小荷駄どもを先返して引退く体にもてなし
日もや、暮ければ俄に唯今宮島へわたり思ふ敵を討とるべしとく船に乗へしと下知しひたし
と打乗簀なごともして元就が船の火をしるしよともへの梟と守れとて西の刻斗りに火立浦を出
る折ふし北風はげしう吹たりければ北手の風ぞいさみす、んで亥の刻ばかりは宮島の西よ
つきて陸よわがり船とば一艘ものこら火立浦に返されけり元就かのめくら法師をひき出した
のれゆゑよこりけん年頃の志をばとげつれとて海中にしつめられけるとのや隆元ハ彌山島よ打
上り元春ハ洲屋明神の前よりれし寄る小早川隆景ハからめてより向ひたるが一度は開乃聲とわ
げ彌山島の木末よ結付たるたい松に火と付たれば陶が軍兵驚きさわぎける處を元就かのいて
先をかけたれば陶の者ども數白人討死したり元春隆景も横さまに進て三浦越中守と隆景鎗を合
せ三浦とつき伏れば内藤内藏亟あり合て首をとる弘中三河守も討れ陶が軍さんくは敗北しけ
り陶も旗本とす、めて隆景と戦ふ元就の兵栗屋又四郎眞先かけて討死す元就わさより切てか、
も終らうちかたければ陶ハ引退きて道場山にあり明れを十一月朔日元就諸軍をわつめ卯の刻
より午の時まで十二度の戦に互に討る、者數をしらせ陶終よかなので自害しけるを首をとり出
して梟せられぬ討とる所の首四千七百八十餘生どり八百五十餘人とかや是より西國元就になび

從軍けり

凡將の愛とする所の味方の密謀を敵の問者に知らる、ことあり然るを智將ハ其敵の放る
問者を種にして却て敵を破るの用よ供す全く往くと返るとの差あり淮南子兵略篇よ云へるこ
とあり曰く兵を用うるの道之よ示すに柔を以てして之を迎ふるに剛を以てし之よ示すよ弱と
以てして之よ乘るよ強を以てし之を爲るよ敵を以てして之に應ずるよ張と以てし將に西せん
と欲して之よ示すよ東を以てし先よは忤りて後よは合ひ前よは冥して後には明かなり鬼の迹
なきが若く水の創なきが若し郷ふ所の之く所にあらせ見る所は謀る所よわらず舉措動靜能く
識ることなし雷乃擊つが若く備となすべからず用うる所復せず故に勝百全すべしと毛利
の謀る所全く茲にありて陶之を知らず是れ元就の勝つ所以晴賢の敗る、所以なり
(卅四) 宮島合戦の前陶伊豫の河蚋は船をかる同じ時元就も又船をかりに使をやられけり陶は
毎まなくかりたり元就は只一日かしたまはれ宮島にわたりて即戻すべしといひかくられけれ
ば久留島通康聞て一言なれと思ひ入たる處あり毛利必勝べき事疑ふべからずとて三百艘をか
しなけるが果して陶敗れて滅亡しし

(卅五) 野州宇都宮の軍那須よよせ來けるを擊破り既に大將をも討とるべかりしを那須の長臣
大關夕安兵をままとめて北るを追す人皆今度宇津宮をも破るべきにといふを夕安聞て「雲はみま

のらひはてたる秋風を松よのまきて月をみるかなといへる古歌あり今味方にさせる根本の固もなくて宇津宮を攻破らば小田原より那須を敵とせん然らばいかよして那須を守りかたむべき宇津宮をのこして小田原をあいしらのせ其ひまよ那須の根を深く帯を固くして小田原を敵よもしつべしといふ皆人まれを感じけり

(卅六) 太田左衛門大夫持資は宣政の長臣也鷹狩よ出て雨に逢ある小屋あ入て鏡とあらんといふよわかき女の何とも物をべいはすして山ぶきの花一枝折て出しければ花を求るよ非ずとて怒て歸りしよ是と聞し人のうれの七重八重花はさけどもやまぶきのみのひとつだよなきぞ悲きといふ古歌のこゝろあるべしといふ持資をさるきてそれより歌よ志をよせけり宣政下總の廳南軍を出す時山涯の海邊を通るよ山上より弩を射かけられんや又潮満たらんやはかりがたしとてあやぶみける折ふし夜半の事なり持資いざ見來らんとて馬と馳出しやがて歸りて潮の干たりといふぬかよしてしりたるやと問ふ「遠くなり近くなるみの濱千鳥鳴音よ潮のみちひをがしる」とよめる歌あり千鳥の聲遠く聞ゆつとひひけり又何の時よや軍をかへす時はも夜の事ありしに利根川をわたさんとするよくらさはくらし淺瀬もしらす持資又「ろこひなき淵やはさわく山川の淺き瀬よころあだ波はたてといふ歌あり波音あらしき所をわたせといひて事なく渡しけり持資後よ道程と稱す

雪玉實隆乃歌に雨にきるみのなしとてや山吹の露にぬる、は心つかしを抄中後拾遺和哥集云小倉の家よ住侍るころ雨ふり侍りける日みれある人の侍りければ山吹の枝と折てとらせて侍りけり心もぬでまあり過て又の日山吹心得ざるよしいひおこせて侍りける返しにいひ遣しける兼明親王七重八重はなはさけども山吹のみのひとつだよなきらわやしき「かあしき」イコアろよひなき淵やはさわく山川の淺き瀬よころあだ波はたてと云ふ歌の西諺の深き川よ流るゝの聲なく淺きは却て噪がしと云ふものよ暗合して其意蓋し學識の深き者は敢て喋々せず其淺き者は却て喋々鼻よかけて博識なるよ云ふを誡めたる教訓の歌なり又老將の所謂知る者は言はず言ふ者は知らず善する者を辨せず辨する者は善らずと云ふものよ同じ斯く教訓を主としたる歌の意を轉じて他に用うる變化の妙推理の術今日泰西よ行ゆる、論事矩の趣ありて感ぜべく驚くべし

(三十七) 持資京に上りしとき慈照院殿(義政)饗應せんとり慈照院殿よ一ツの猿あり見しらぬ人よ必すかき傷ふといふ事と持資聞て猿つかひに略して猿をかり旅亭の庭につなぎ出仕の装束して側よ過るに猿飛るゝと鞭を以て思ふさままた、き伏たれば後よは猿首とたれて恐れ居たり持資猿つかひの人よ禮謝して猿とかへしたりあくて饗應の日かねて慈照院殿の猿を通るべき所につなぎれきて持資が猿狽するを見んと待れたるに持資をかの猿見るとひとしく地

に平伏す持資衣紋ひきつくりひ打過たりければ唯人に非すと大に驚れたるとなり彼猿を繋ぎたる戸を猿戸といふそれより猿戸といふ名はあはれるとなり
 道灌の讒言によりて殺されたり文明十八年七月廿六日なり辭世の歌とて世に云傳ふる「かゝる時こそ命のをしからめかねてあき身と思ひしらすは松田の家物語にもおくしるしたり
 道灌の和歌の集見へしに戦士をいたみし詞にて康正元年の冬藤澤の役あ至り敵も味方も入まじり三日とかさねていどみあらしふ事に成ぬされどもやわたの武威つようして北條憲定のぬし終に自腹して餘兵おのが志空しうなりあるはわたにあたりてたごに死するも侍りしとき藤澤のかたへの松原のむれよてたゝかふ男ありしに味方中村治部少輔藤原重顯とて京家の人の世おしつみてやかたよ扶持せられて侍りしになん敵の男はくりけなる駒にのりて二つびき輪のぼり龍の紋付けたるさし物なりけり遠目ながらよるひいかめしく見へけるしべした、かふて鎗とあはせしに目の前敵の男つさとめられやがて中村が手づから首をとりて我陣に來りてかうくなんとかたりけるよいまだ壯年にもたらぬ男の色しろくしてたけ高かるべき心持して鬢のあたりたゝならきたさしめつゝ哀もいやましあななぬらにくからぬおも影なり中村重顯此まゝるばへのやさしき哥ひとつ物して手向にとすゝめければ其首よむかひてかゝるとさ云と見えれば松田物語并世に傳ふる所は誤なり

(卅八) 安藝佐伯郡に木全知矩といふ者あり後宗輔といふ毛利元就も從はざりければかこみ攻らるゝに兵糧すでよ乏くなりければ降參とすゝめらるゝに父祖よりうけ傳へたる城をたやすく人お授くべきやとて彌服從せず宗輔は連歌に心をよすると元就聞傳へて箭ぶみを城中に射入させられけり

秋風にかたき木またの落葉かな 一説秋風にまたき 木またの落葉かな

やがて射かへしけるよ

よせ来てしつむ浦瀨の月

元就大に感じて圍を解て引返し程經て和と求られければ宗輔われより降參せむこそ恥辱ならめ此上はどて城を出けると元就ねんおろよもてなし賓客のやうにせられける

(卅九) 輝虎武藏の私市の城よかこまれま時此城は後大なる沼有て堅固の地あり本丸と外より見ゆるやうに築たりけるを打巡り見られしに本丸より二の廓にうつる廊下の橋すのこにて作りたるに地白のかたびらきたる人の影水にうつらひ見へけり地白のかたびらといふは地と白くもんを黒く染たる物にて其比女の多く着たる物とぞ輝虎是を見る事三度に及べりかれば本丸には人質の女童とこめおきつると察しやがて柿崎和泉に下知して大手を攻させられけり城中おはや唯今攻らるゝといふほどにわれ先にと防ける其ひまに近きあたりの民屋を壊ち篋ふくみ

て後の沼よ打いれ開の聲とわけかめきさけ本丸の女童大に驚きさわいで二の廓とさして逃
 まよふ大手に有て防ける兵どもさては内通の者ありて本丸を打破られたると思ひ或は自害し或
 は降人となる輝虎の謀によりて力を勞せずして城忽落たりけり
 (四十) 輝虎と北條と武藏の忍にて陣を合す此時太田美濃守資房入道三樂ひそかに謀を北條に
 通す輝虎かくと聞て馬副の者も具せず唯一騎三樂が陣に行て三樂が三男安房守十二歳なりしを
 ひしとどらへてよくもかひたちつるよいざわが子よせんとてうちつれて歸られけるよ三樂が軍
 兵ども其猛威に恐れて手さすこともなかりけり是より三樂も誠心服したりけるとかや
 (四十一) 上杉憲政關東八州の豪傑八萬騎を率めて北條氏康を撃んとて南下しけるに氏康も亦
 出て入間河の南に陣しけるが上杉氏の兵來り迎ふと聞き氏康戦はずして走りて小田原に入り謀
 者の歸り來る者に向て敵中何と云へるやと問ひけるに其者の云へるやう敵皆笑ふて云へるには
 豎子走ると筒様に申居り候と斯くて氏康小田原に居ること五六日又出て河南に至りけるに敵來
 りければ前日の如く未だ一戦にも及せずして走り又謀者を入れて敵狀を問ふに其者の云へる
 やう敵の云へるには豎子復た出づること能はず若し出づれば走るとのみと復た顧る者之れなく
 候と聞て氏康の云ふやう敵既に驕る時こそ善しと其夜將士を集へ親ら之に誓て曰く吾れ聞く戦
 ひの道衆しと雖ども未だ必ずしも勝たず寡しと雖ども未だ必ずしも敗れず唯士の心の和すると

否などの如何を願みるのみ故に智將は時に或は小敵に怯れて大敵に勇めりと吾輩々上杉氏と戰
 ふ常に我が一人を以て敵の十人に當る寡を以て衆に敵す何んが必ず今日に始まらんや勝敗の決
 此の一擧にあり汝將士よ其れ心を一にし力を協せて唯吾が嚮ふ所を視よと其兵をして皆白布を
 鎧上に尙へしめ之に約して曰く白ならざる者に遇はば斬り敢て其首を取ること勿れ首を
 取らんことに汲々たるは一人の功名を貪るにて全體の戰爭には其既に斫殺したる死首を揚ぐる
 の間を以て又新たに活敵を撃ば大に勝利を増すことならん此意を心得よと令既に畢りしかば
 人は枚を銜み馬は鏝子を被て此の夜子二ツの比及よ河を渡り咄めさて突然無二無三に上杉
 氏の軍を衝き入りけるにぞ何よかは以て堪るべき怠たりきりたる不意喰ひ武者大に驚き或は繫
 じ馬に鞭ち或は弦斷たる弓を執り或は一條なる鎗に兩三人手と掛て相争ふて捫擇す其擾亂云は
 ん方なき所を氏康の兵縱横奮撃したれば一人百敵に當らざるはなし遂に二萬餘人と殺傷し朝
 定を虜にし晴氏憲政と走しらしけるにぞ八州の豪傑即夜氏康に降る者九十餘姓よ及びける是夜
 難波小野など云へる將帥皆死しけるよ本間某單騎止まりて戦ひけるが本間軀幹魁偉よして九
 燈を竿に累けて以て脊旗となして曰く吾れ此の燈旗を以て關主に關を燭すと北條の部將大
 導寺駿河守と闘ひけるよ孰れ優劣す劣らす其勝負何時果つべうも知れざりける程よ本間先づ手を
 引き如何に大導寺氏暫く留まり候へとて背向に指す所乃九燈を外し大導寺に授けて曰く吾れ復

た此れを用うることをあし之用めて標と爲し好く北條公に仕へよと乃ち死しける大導師是れより九燈を以て記帳あなすと云ふ

(四十二) 徳川家康使を發して好を上杉謙信と通じ武田信玄と夾撃んと請ひけるに折しも村上義清及び其子國清越後より寓りしかば力めて之を賛成し遂に夾撃の議に決し元龜三年四月謙信一萬人と將つて信州に打出られ火を長沼に縱て遙に徳川の懸援をなしけるに此時信玄の子勝頼伊奈にありけるか其響を聞き直ちに兵八百を以て赴き拒んとなしけると謙信遙に此の體を見て曰く彼れ敢て寡兵を以て我れに當らんとす信玄の兒たるに愧ぢず吾れ其勇を成さしめんと兵を引て還りけるとなん

西諺に云へらく大概の人は唯丈け高さ小供たるも過ぎず其意蓋て世人の八九の智慮なく成人氣たる氣象と存せずと云ふにありて實に能く人類社會の眞情と寫出したるの格言とこそ申すべけれ今本章謙信の進退は眞に成人氣なる成人の所爲にぞて豪傑の氣質自ら見るべし

(四十三) 武田信玄の領國ハ甲信二ヶ國にして孰れも海に濱らざれば糧を自國に取ることも能はずして遠く東海北條の領國を仰くこととなり氏眞北條氏康と謀りて陰に其鹽を閉ぢて甲信を送ることに禁めたりける程に甲信兩國の人民ハ固より兵士とも亦大に困しみ一種の兵糧攻に異ならざりける上杉謙信之と聞き信玄は書を寄せて云ひけるやう聞く氏康氏眞君を困むるに鹽を以て

すど是れ不勇不義の極めなり我れ公と争ふ所は弓箭に依りて米鹽をならず請ふ今より以往鹽を我國に取られ候へ多寡唯命のまゝなりと雖も賣人に命じ價と平にして之を給へける

(四十四) 吉川元春未だ伉儷あらざりける時毛利元就兒玉就忠と以て元春の意の嚮ふ所何れの女を欲するかと問はしめけるに元春吾れ熊谷信直の女を得んと欲すと云ひければ就忠然として大に驚き郎君遣は其美を認聞つらんか彼の女の醜惡こと云はん方なく殆ん其匹なし君必ず後に之を悔つらんと云ひけるに元春晒ふて云へるやう然り吾れ素より其醜きことを知る既に知りて之を望むものは敢て奇を好むにあらず抑も亦故ありて存することなり古來名將女色を以て其勇を失ふ者多し人の取る者吾れ之を取らば人の取らざる者吾れ之を取らば信直の心中さぞな嬉しきことならん其感喜の情吾が爲めに死力を出さんこと最も親易きの情理なり此間將卒孰か信直の右に出づる者わらん然らば吾れ之と鋒を聯ねて以て家君の先鋒とならん向ふ所摧破らざるなきのみと就忠之を聞て慚服なし聽て元就に告げて之を娶りけるに信直果して大に喜び其力を盡すこと頗る勉めたりけれは是れより毛利氏の兵鋒益々銳利かりける

(四十五) 武田信玄は豪傑にして近國に敵する者なく向ふとして勝たざることをなかりけるに天文十五年は別けて數度合戦ありしと雖も甲府勢何時も勝利を得ければ皆々勇まらずと云ふ者なし殊に板垣駿河守信形は剛勇の大將なれを此の上にも甲府勢を何分勵まさんと思ふにより廣き

せ一人毎に柄杓と興へければ皆々悦ぶこと限りなく大将よりの御免しよて寒氣を凌ぐ嬉しさよ
 と我れも／＼と酒と呑み舞ふもあれば諸ふもありて左も勇々しく小見にける信綱苦々しき體
 にて昌幸に對ひ遣は何等の舉措なるぞ陣中に於て諸卒に酒を飲ましめば必定過ちあらん此儀は
 無用なるべしと云へば昌幸答て先々見給ふべし我れ胸に一計ありとて士卒を呼び何んと皆々酒
 を飲み寒氣をも忘れしかと問へば皆一同に然候ふ大将の御情にて寒氣を凌ぎ手足暖まり候と舌
 鼓を打鳴して笑ひ樂むの體なりしかば昌幸指さし那れ見よ方々薩埵嶺倉澤山の峠等に備へし敵
 兵左こそ寒きことならめ弓を引くにも鐵砲を發つにも手屈まり進退自由ならざらん平地にある
 爾等さへも寒氣嚴烈しき故酒にて暖まりしならや此の勢ひにて那の敵を一當めてんは如何に
 どやと申ければ皆々踊上りて勇立ち是れこそ望む所なれ酒を給ひし其代りに功名して敵の首を
 着に又々祝ひの酒宴を仕つらんと力足と踏み鳴らして悦びける程に昌幸令して左らば打立つ
 べしと眞先かけて馬と出しければ誰か猶豫ふべき我れ劣らじと三千餘人酒の勢ひに川を渡りて
 薩埵嶺へ押登りけるに折節雨霰降りて其寒きこと云はん方なし然れども眞田勢は更に事どもせ
 ず喚き叫んで押寄せけるに昌幸が謀りしに違ひを雨霰降りて寒氣殊に嚴敷かりければ峠に扣へ
 たる北條勢寒氣を凌がん爲め皆々峠を下りて民家に入り陣所々々は唯旌旗指物のみ建て置きて
 一人も居ちざりしかば昌幸令して早く小屋々々へ火を掛け鐵武具は望み次第取りせよ各々高

名の此時なりと大音に呼りければ皆々勇氣日頃に十倍し陣々に火と掛けしに北條勢大は肝
 を消し残りし兵士ども我先きにと逃走りける

山嶺の平地より寒きこと理學上の定理なり眞田昌幸之を知るが故に平地にありてすら尙ほ且
 つ寒きこと云はん方なければ山上の寒きこと又一層甚だしからんと察し味方の兵士を酒もて
 暖めて撃入し程ならむ其勝利疑ひなしと夙に心算定まりしと以て斯くの計りしなり

(四十七) 武田信玄北條と戦ひけるに大に打勝ければ勝鬨の式と取行ひて甲府へ凱旋せんとて
 諸勢を繼の引揚げつゝ勝手大明神と云ふ社の前に來掛りしに如何致まけん信玄の馬忽ち跳上り
 て信玄落馬なしければ近習の諸將大に驚きて介抱せしよ左までのこともなかりしかば乗物に移
 られ此社は何と申す神なるぞと尋ねけるに近習の者何氣なく答て是れは勝手大明神と稱し候と
 申ければ信玄思ふやう勝手に云ふ神の前で我が落馬せしこと如何にも不審やと心に掛けつゝ甲
 府にぞ歸られける爰に織田信長は當時近畿に威と震ひ何卒天下統一統の志を立んと思ひける所に
 何分にも信玄の威勢に當り難きにより百方心を碎きけるが家臣羽柴秀吉其身京都にありて諸國
 の智計と以て北條家の大軍を破り其後甲府へ歸陣の途中信玄勝手大明神の前よて落馬せし事ま
 で委しく告げ來りしがば秀吉大に喜悅ひ既に信玄が命數を縮むる時至れりと密に一首の歌と作

りて甲府へ遣はし問者に之を諷へせ何國ともなく流行せける即ち其歌に「頼む甲斐あきにつけては誓ひあし勝手神の名こり惜けれ」信玄の落馬の後種々と心に掛けて夜案じ煩ひ若しや我が命數の限りし兆候にもやわりなんかど快々として樂しまざりける折から甲府近邊怪き歌の流行りければ信玄偕ては我が命數限れる前兆なること疑ひあし我が大望水の泡となりぬるかど此事と明け暮れどなく苦に病み日増しに疲勞けるにより諸方の名醫を集へて種々治療を加へられけるよ全く其甲斐なく今ハ早や食事も進まぬ程よなりぬれば甲府の將大に驚き偕ては此程何國ともなく怪しき調乃流行出せしは此の前表の始めにてありけるかと皆々恐れを懐き安き心地もなかりける真田昌幸之を聞て偕ては織田家の積冠者めが所業たて我が君を欺きしよないでや我が君の病を癒さんとて甲府へ來り急ぎ登城して信玄の病床を訪ひ奉りしに信玄頼み少々の體に在しければ昌幸進み寄り君の御病躰は如何に候やと伺ひしに信玄答て甚だ苦し我れ此度は所詮本復覺束な一と英雄亂れて糸の如き甚と細りし聲をふり放ちて宣へば昌幸之を承り君の御病氣の根元を直さん良藥あり之を用ひ給はば忽ち平癒すべしと聞き信玄起き直りて夫れは如何なる良藥ぞと尋ねけるに昌幸答て御病根は頼む甲斐なきにつけては誓ひなし勝手神の名こそ惜しけれの歌に候はんと申せしかば信玄驚き汝我が病根と如何して知りたるぞと問ひけるよ昌幸笑ふて是れ信長の家臣羽柴の謀計にして是れぞ人と欺く子房が智略なり君欺れて萬金にも

替へ難き尊命を失ひ給ひごと申ければ信玄はたと膝打叩き我れながら愚なりきと限りなく悦び汝が一言よ因りて我が疾病最早癒たり疾々北條と撃ちて上洛と遂げ豫ての望みよ果さんとあれを昌幸も俱に欣喜び童子が歌を以て我が君の命を縮めんとせし秀吉ころ面惡けれ我れ此の返報に一の書翰を以て秀吉が肝を冷させ呉んすと大に怒れを信玄昌幸の智略と感じ古今に又も得難き名士なりとて信州上田の城を與へしよより昌幸恩を謝し是により上田の城へ移轉しが其後昌幸何やらん書翰と認めて京都へを送りける此時羽柴秀吉は京都に政事を掌り居たりしが甲府へ入置きし問者より信玄此方の謀計に當り病床に打臥し由の注進と聞て心中大に悦び我が謀略既よなれり信玄を亡ふふと近きにありと獨り笑みしてありける所信州上田の城主真田安房守方より使者入來の由告げしるば秀吉怪み昌幸の漸く此頃上田の城と與へられしと聞きつるに何用ありて我が方へは書翰と送りしぞ是れ真田は近頃織田の縁者となりぬれば定めて通例の見舞なるべしと想ひつ、其使者と呼び入れ昌幸が書翰を披き見れば豈に圖らんや他の文言とては一もなく唯一首の和歌あり即ち其歌に「難波津の漕わけ舟をこぎて菅の庭鳥立ちあわぐなり」秀吉之を見て良誓一考へしと雖ども當時は軍事は紛れて未だ和歌の心懸あかりしかば更に其意と得ず繰返々々讀み居たりし所へ竹中半兵衛重治來りければ秀吉大に悦び竹中氏好き所へ來られたき今武田家の臣真田昌幸方より斯く怪しの歌を送り某接するに我が不學なるを侮り体も

なき歌を以て我れと迷はし返辭の様子を探らん爲めなるべし憎き眞田めが振舞哉いでや引裂捨
てんすと大い怒りけるを竹中押し禁めて眞田昌幸は未だ若輩なりと雖も中々尋常の者ふあら
ず何ぞ童蒙の戯れをなさんやして其歌は何ぞ申送りしごと尋ねければ秀吉彼の歌と出し竹中に
見せければ重治之と驚と視て眉を蹙め難波津の蘆わけ舟とは誰を指したる辭かは知らず但し管
の庭鳥とは歌道の秘密にして蛙の事とか聞及びぬ立騒ぐとは心得すと考へ居しが暫くありて手
を拍ち一度は驚き一度は感じ倍て怖ろしき眞田哉先達て君の遠計にて甲府表に童謡を流行せ信
玄が心を苦しめしと彼れ必定此方の謀略なりと察して斯る蛙のなす如き事は幾度行ふとも蘆分
舟となりて謀略の穴を見顯し立騒がせんとのことなるべしと申ければ秀吉直立上りて憤り我
れ遠からず彼れ昌幸が生首見せんばあるべからずと以ての外に立腹なしけるも竹中笑ふて昌
幸は忠臣なり君たる信玄あることを知りて他の信長公在すことと知らず臣として君の爲めにす
るは理の當然なり斯る知謀の士を味方となすも良將の工夫なれ何故に左は怒り給ふぞと申
ければ秀吉大に笑ひ是れ偽りなり斯る智將を何とて闇々亡なはんや見給へ秀吉が恩を施し懸て
幕下に付んものどて眞田が使者を重く饗應し早々返翰を認めて返されける深意の程こそ凄ま
じけれ時に永祿十二年六月なり斯くて眞田は使者の歸りしと聞き急ぎ呼寄せ京都の様子と尋ね
秀吉より如何返事せしごと披き見るに其文體甚だ叮嚀よしして怒りの心少しも見はざりければ昌

幸心中に怖れと懐き誠に秀吉は地中の龍も等しき武士なりと彌々内心小感じける

(四十八) 今河義元尾張國大高の城に鶴殿三郎長持を置れけり織田信長も所々に城をかまへ丹

家は水野帶刀善照寺には佐久間左京中島より梶川 鷲津には飯尾近江守宗定又丸根には佐

久間大學助盛重をわきて其外寺部拳母廣瀬にも岩あり大高に兵糧を入なを鷲津丸根に貝を吹べ

し寺部拳母廣瀬の砦より馳集り丹家中島より後詰せよとぞ定られける義元 東照宮の御もとよ

使をもて大高に兵糧を運入させたまへとなり 東照宮心得候と仰てやがて打たれ給ふを酒井石

川等信長の手あてゆ、しく候中々大高に兵糧入ん事思ひもよらずと申せども聞しめし入られず

われに 謀有とて先兵をわかち福釜の松平左馬助親俊酒井與四郎忠親石川與七郎等四千斗永祿

二年四月九日の夜半に大高鷲津丸根をわきになし寺部の砦へおしよせよと下知し給ふ 東照宮

は八百斗の兵とひきる兵糧米馬にとりつませ大高の城二十町ばかりわきにひかへ給ひけり先陣

寺部におしよせ城中さわぐ處を一の木戸口打破り火をかけて又梅坪におしよせ三の丸まで攻入

火を放て焼たつる其焰天をてらし関の聲ひ々きわたりて聞へけるぞ丸根鷲津より是を見て三河

の敵はるばるとふみ越て攻入たるはいかさま故有と覺ゆるぞとく後詰せよとて寺部梅坪よかけ

向ふ其間に 東照宮塵をとらせたまひ米おはせたる馬千二百匹打つれて事なく大高に運入させ

給ひたり丸根鷲津に残る者ども是を見れども大かた後巻に出たればせんかたなし 東照宮やが

て軍兵をひきまどひ岡崎にかへらせ給ふ人は今夜の謀略及ぶべきも非ずと申けれど聞し召れ此
 甚しり易き手だてなり先思ひもよらぬ寺部梅坪を攻て火をかけ丸根鷲津の軍兵を後づめに出さ
 せひきたがへて兵糧をはこび入たりしなり兵法に神速を貴といひ又其不意も出るといへるこ
 とありとのたまひければ皆此殿臨濟寺の雪齋に兵書をよみ習ひ給しかどもかゝる謀はよも出
 じ天性すむれて大將の道を得たまへるとぞ申ける此十八の御歳の事なり
 此時徳川家康は今川義元の麾下に属する者なれば宜しく義元の方に敬稱を使ひ家康の方に命
 語と用らるるものなるに左になく却て右に一轉するの言ふまでもなきことながら徳川覇世の
 輯録されたるものなるにより其世祖に敬禮を失はざらんとて斯くは記せるものなり以下徳川
 に係はる件皆然り今日は王政維新に復するの御代なれば宜しく其文體を改むべきなれと原編
 輯人の本意を失はんことを恐れ敢て變改せず其儘之と存す幸に讀者諸を諒せよ开は借て置さ
 つ此後買羽をして丸根鷲津の中にあらしめば老兵弱卒に多くの旌旗戰械を持せて寺部梅坪の
 方より向はせて後詰の體を示し屈強の精兵は却て竊に大高の方に向ふべし昔は漢土三國の時魏
 の曹操南陽の城を攻めけるに曹操該城の東南の角に鹿垣逆茂木の舊るくして半ば過ぎ朽にま
 と見て莞爾として笑まれ態ど西の方を急攻るの體となし城兵之と防禦んとて盡く此處に集
 ふる時を窺ひ却て不意に東南の角より入らんと心偷に計りけるに城中の謀士買羽城樓にあ

りて曹操が自ら馬に打乗て城を巡視るの體を見て其心算を推知り物の役に立たぬ百姓を驅て
 西の門に集へ喊と作り鼓を打ち鑼を鳴して大勢防禦の體を示しければ曹操は借てこそ城兵の
 我が謀計に陥りたりと愈々西の門に大勢を添ひ雲の梯を懸て天も崩れ地も碎けやすらんか
 と帖るゝ斗りに見せたりけるも城中にても亦喚き叫んで天に防禦の體を示しけるにぞ曹操
 すは時機を好しと精兵を撰りて直ちに東南の角に廻り鹿垣逆茂木を打破りて押入けるに防
 禦んとする者更ななければ曹操は我ながら神通を得たる謀士よと自負心は笑れるに忽然と
 して一聲の鉄砲耳根に響くと齊しく隙て買羽が伏置きたる精兵八方より起りて散々に曹操と
 撃取りけることあり曹操と家康が謀る所は同一計にして且つ平日の兵略も亦稍を仲伯の間に
 あり然るに曹操は以て其謀る所を仕損じ家康は以て其計る所を成遂たるは天の時よ因るにあ
 らず地の利に因るにあらす全く敵將の智愚に因れり故に若し曹操と家康をして其地位を易
 へて謀らしめたらんには必ず右に一轉して曹操は敵と欺き得て家康は却て敵と欺かるべし
 (四十九) 大久保藤五郎は越前の人なりしが武者執行して三河に來り吾姓とゆづるべきは宇津
 新八郎なりとて大久保の姓をゆづりしが其しるしに功名せんとして安祥の城攻に先がけて終
 討死しけり新八郎忠俊後に五郎右衛門といふ今川義元討れて 東照宮大高をひかせ給ふ時夜半
 に大雨にて士卒みだれけるも忠俊御側に附るひ奉り度と乗返し詞とかけ人衆まどめて引退ける

となり

(五十) 永祿三年五月今川義元大軍をひきの織田信長をうつ 東照宮此時陣せさせ給ひ丸根の
 砦を攻れとし給ふ今川家の軍兵も鷺津を攻落之義元桶はさまに着陣せらる信長は素より鳴海に
 打て出防戦せんとの志なり老臣も大敵なれば清洲と守り給へと謀れども聞入ず酒宴して積
 樂又羅生門の曲舞をまはされし時敵既に攻來ると告來る信長少もさわがず人間五十年下天内を
 鏡れを夢幻の如しといふ處をかし返しうたひて 忽螺をふさたてさせ物の具して主従僅よ六
 騎歩卒二百人ばかりかけ出て熱田の宮ふ詣で願文を神殿ふ納らるゝ中に軍兵追つゝき來りけり
 源太夫の祠より東を見れば鷺津丸根攻れとされたりと覺へて黒烟たちのぼる濱手は潮満たれば
 笠寺の東の道と一文字ますゝひで砦々の味方に使をばせ其兵とひき具し中島の砦に至りてわが
 謀の今川の大軍 悉木道へくり出し蘇本小勢ならん所へ山陰より切てかゝり 忽勝負と決す
 べきと大音聲にて下知せられしを士卒皆きそひいさみけり旗とまぼらせ山かげより桶はさま
 に打向ふ義元は駿州の先陣打勝たりと悦び酒もりして有しに折しも天俄よくも夕だちうつす
 に似て風雷のげしかりければ信長の兵懸り來る物音も聞わかず不意の戦にあわてたる斗なれ
 ば水野太郎作清久一番に首をとる義元の綱代の輿を信長見て敵の旗本疑なしとて追たてゝ
 戦れしかは義元も返し合せて戦れしを服部小平太鎗つけ毛利新助其首をとりたりけり左文字の

太刀松倉郷の刀を分捕にすといへり

(五十一) 信長桶はさまて義元を討とりて後潜に士七八人召具し京より帝都の事ども親
 ひ見それより三好が高屋の城へ往て長慶に望しけるは信長が尾張にて領候地をまゐらせ候へ
 其地にわたる回を畿内にてたまへりなば三好家の先陣たるべしといへれしかば三好聞うくべき
 を松永彈正諒て其事止にけり此時齋藤義龍信長を殺さむ爲士十二人堺の津に出たりと信長
 聞て塚に至り義龍が士の旅宿にゆき何義龍が討手とやにくき奴原なり汝等一々首を刎べしとて
 刀の柄に手とかけはたどにらまれたる勢に恐れおはて、平伏しければ信長散々に馬で歸られ
 けり

(五十二) 義元討死の時 東照宮は高の城にねはしませしかを菊屋の水野下野守信元淺井六
 之助道忠ともて桶はさまに義元敗軍命をねとされ候ぬ今川家の城々ども皆あけ退候とく岡崎へ
 歸らせられ然るべあらんと告申されしかばはや御歸あれと人々申けると聞し召下野守はわが母
 の兄弟なるは誰もしりたるまされども今は敵どわかれたる中争ればもしやわれをたばからんと
 の謀なるをしらで此城と明退なば逃奔たりといはれん弓箭どる身の恥辱後世までもわらひ草た
 るべし淺井をかしとめ置て味方の告とまちて後こそ參河へは歸らぬと仰ありてそれまでは二の
 丸におはせしが本丸に入らせ給ひて持口と御くばり有ける處に夜に入て岡崎より鳥井伊賀守忠

吉義元の變と告奉り今川家の人々も駿州へ引とる旨と聞きて召此上は兵をかへすへしされども夜聞くて乱るべしとて月の出るを待て城を打出させ給ひ淺井を郷導に用られ池鯉鮒の驛につかせ給へば坊屋よりも討て出所々一揆起りける淺井馬を乗よせ水野下野守使者淺井六之助案内者たるよし大音に呼びければ皆道をひらきて恙なく夜中ふ大樹寺まで引取せたまひぬ後殿は大久保五郎右衛門忠俊なり翌日岡崎へ歸入せたまひけり淺井をば池鯉鮒より返させ給ひ後の證にとて御扇子をさきて賜はりける扇のはね六本なりしゆゑ永く淺井が家の紋とするとかや是より東照宮の信義厚き御事に人々なつき従ひ奉りける

(五十三) 甲斐のしのびの者數十人信玄に叛く事有て山小屋にたて籠る信玄謀にてたやすく討とらばやと思ひ残り居けるしのびの者は城中に忍び入るにゆるみ入がたきやと問る、よ内の守り嚴敷夜廻りの聲しげく其体あらはれるはかたまりもまた料易く候といふ信玄いま山小屋にしのび入らんはいかにと問る、ふかの者ども既に能其理をしり静りうへりて音もせず候へば其便を得ずと答ふ信玄それより山小屋に向て陳し守り甚きびしく夜廻り透問なく呼らせたり日數を経てや、れこたり出来ぬる時山小屋より夜討に出けるを素より謀りたる事奇れば伏兵をおきて討とられけり

(三十四) 鹿島傳左衛門といふ者伊豆の人なりわかき比武名有けるが後に髪を薙て久閑と稱し

伊東は引まもりて居たりけると信玄聞て三千貫の地をあたへて招けり久閑われ年老たり何の爲に奉公すべきとて出ざりけるを尋問へき事ありとてしひて呼出し春より秋まで夜々軍物がたりせさせて聞れ 自筆とりて是を書しるされけり信玄四方に大國の敵ありて威名をふるはれしもかく心を用ひられし故にや

(五十五) 永祿年中備前上道郡瀧口山の城ふ最所治部元常といふ者あり此時浮田直家既に浦上を滅し

直家は和泉能家の孫なり能家はもど浦上掃部助村宗に仕へ備前邑久郡砥石の城に居れり浦上の長臣鳥村豊後守後入道して貫門彌といひしは鷹取山の城ふ有て威勢ありて能家を殺害せりこれ享祿四年の事なり浦上細川高國の加勢として攝州にて討死す其子與次郎といひしは幼少にて居城三石は播州の境敵に近き故和氣郡大神山へ移れり與次郎は浦上遠江守宗景といひり年長して備前皆從ひ美作の半座せり宇喜多直家の子と與家といふ父死する時出奔し甚恐めて備中邊にさまよひ乞食の体なりし備前へ歸り西大寺福岡のたへに有けるを父も懇なりける阿部定善といふ者養ひ置愚なれば牛飼わらはとせり年経て召つゝふ下女をのわはせて子三人あり直家忠家春家はなり天文五年與家死す三子の中直家八歳なるが定善の方であり弟二人六つと四つよせりけると笠加の尼寺に直家乃母の姉比丘尼となり居たるに頼みたり直

家物静なる生得なりしが十一歳の比より俄に愚昧にありて誠を救済をもわきまへず天文十五年直家十五歳に成ぬ母の方にゆけば母涙と流し三人中にも兄なればせめて人なみにもあれかしと思ひしにすぐれたるおろかさよ人なみならば殿に申て草履をもとらせなん物をいかなる固果にてかくうさことを見るやらんと打しはたれたると直家見て側近く居より實に愚なるに候はずといふ母聞て汝ほど愚ながらも猶かしこしと思ふやといよくなげく体なり直家よ、に一の大事あり誰にもかたらせ給ふなもし洩し給ふほどならむ其事叶候まじといへば母ろればいかなるごぞと問直家よく聞せ給へ祖父泉州をば島村が殺したりさ父仇を得討給はで口惜くころ候へいにもして一度祖父の吊を遂んと存るに島村を殺すに過たる事や候われもしかしこきと島村謝なば其儘にたすけ置べきや只是のみ心を苦め謀をめぐらし父祖の恥と雪ばやと存るや三や十五に成候ぬ殿に宗景を奉公仕らんやうをはからせ給へかりそめにも此一大事口に出させ給ふなどいひたりしかば母驚き且悦て密に宗景に告て直家初て仕へけり直家の、る智謀有しゆえ宗景寵愛し乙子の城とわづけたり此時三郎右衛門とぞいひける此比中山備中は沼の城に在しか宗景の心にそむく事あり宗景直家に密談す直家某は中山が女を妻とし婚姻のよしみ深き者なるにかゝる仰と承る事不忠を存すまじきとしろしめされしならん力の限ばかり見ばや只一の願の候うれとゆるし給はらんやと申す宗景悦て何事にもわれ望む

べき事其志にまかせん物をといへを祖父忠功の者よて候ひし島村私に殺したりき君をかりしむる者なれば願望まじきも必誅せらるべき者なり祖父の仇は候へばゆるされを蒙りて殺申さんと告れば宗景聞て島村汝が祖父を殺せし時予幼かりしゆゑに島村權威を恣にしたりき今我もにくみ思ふ處なり謀よくして島村中山二人と討べしとゆるしたりしかば直家沼の城川の東又茶園畑といふ所あり爰に茶店と設鷹がりに出て日暮れば此所に入て臥し又沼の城にゆきていと打どけたるしたしみをなせり或時直家中山に此川隔りて南の方にまはれば道遠し茶園畑より直に川と渡らん爲に假橋をかけさせられ常はとり置て往來の時のみかけなん物をといへ備中易きはどの事とてかまたりき直家たばかり得たりと悦て宗景に告て沼より天神山の間に狼烟をあぐべししからば備中と討得たりとしられよのろまあげなば島村がもとへ使をばせ中山謀叛したる故直家に下知してうたせぬとく沼にかけ向て直家に力と合せよと下知あらは嶋村年老たれども遠く慮るにいとまなくて一騎がけに沼の城よ來るべきを討ん事易かるべしと日と約しぬかくて其日に及て沼乃鷹狩場に直家有て日暮に成て城よ入どり得たる鳥を出し酒宴に及へり夜もいたく深ぬ備中も酔たりけり直家われ今夜は爰に臥すべまといへを備中が士も座を退出ぬ直家打ふす体にもてなし思ひもかけぬ不意に備中を只一刀に伐殺し躍出て大音聲をあぐれば兼て相圖しける者ども城下よ忍びて待かけたればわれ先よと

城内に馳入しかば城中何事ぞと驚あへり川向に伏たる兵も鬨を作りかの設けたる假ばしを
 攻入うろたへたる中山が士どもを切伏く城を攻とりけりかくて狼烟をあげしかを宗景即
 島村のもとに使を馳て告やりしかば島村聞てつゞけ者共とて馬に鞍置せ打乗從兵七八人斗よ
 て沼の城に来る城はとく乗とりたれば直家本丸にありて門を閉たり島村かゝる謀有ともし
 ず本丸に入處とかねて計り合たれば取圍て討とりたり島村が軍兵一騎がけにまばらに成て來
 るを道に待うけて討とりやがて兵を出して鷹取山へたしすれば防ぐ者なくて退きちりく
 に成ぬ直家の手だてにて二人を殺しこれより勢強く沼の城に居て砥石に弟の春家と置終
 に浦上とほろぼして備前を悉平均せり

沼の城に居て元常と姻類なりしに元常毛利家にかたらのれて直家に背く直家うち滅さんと思へ
 とも龍の口の峰高く大川麓に繞り要害よかりければ力攻にして落べきやうもなく矢津と砦と
 まへ軍兵をこめ置たり直家岡郷介といふ謀ある者に密に手だてをいひ合せある時直家郷介はし
 かくの罪有からめ來れ首を刎んといそれしは討手の士行向ふにさく出奔してけり直家いつ
 はりて怒る事大方ならず郷介は備中にかくれ居たりけるが西郡の中にて乞食の老女の道にふし
 居たるに立よりこいそも不思議にも恙なくればしけるよ年比志と盡し尋まぬらせしに行ゆひぬ
 るこそうれしけれされを淺ましの有さまやさを見わすれ給ひたらん幼き時立わかれなつもの

母うへよとてつれ歸りぬ乞食の女は怪しき事と思へども俄よゆたかなる船に成ければしらぬ体
 にてそ有けるや、有て郷介龍の口山の川向ひ金山寺山の谷山船山の城主湊々木豊前がもと仕
 へ尋ね出せる乞食の老女とれのが母と名づけて人質に出しけり湊々木は故有て元常と不和なり
 ある時湊々木が東國より求得たる黒乃馬を盗み出し打乗山下へ馳下る城中より何とて馬に乗る
 やと呼れども耳にも聞入らず牧石川原を東へかけ行けれを湊々木も矢倉に上りこれを見てにくき
 奴哉討とめよと下知しけれどもとく川を打わたり龍の口の城に乗あがり船山の湊々木が士にて
 候故なきに死罪にわひ申べき由を人のしらせ候ゆる通れ參て候われ見給へ追手の者ども川向に
 みちて候城中にのくされ候へといひければ元常先山下ふかくしおきけり湊々木が士ども岡に誑
 れたるどはしらすかの乞食の老女と川原に引出し歸らずは母と殺すべしと聲々と呼りけり岡の
 の老女は母にて候今歸りたりとも母子一所に死ん事定りたりとても棄へさいのちを君ふ奉り
 此憤りと散じなんといひけり中に彼女をハ磔にして殺しければ郷介悲み怒り母の仇目前に
 わりぬかにして此恨と報べべきと齒をかみてなげきけれを元常も心ゆるしてけり岡あくまでさ
 らくまき者なれば年月経る中に元常が密謀をも聞斗に愛せらる岡今は時を得たりと直家に
 日を定て矢津の岩の軍兵を龍の口の本丸北の川向に出され小舟とかくし置れよと告やりて相圖
 しけり本丸の北の方よ閑所の有けるに元常軍評定する所なり其夜も元常は此所の欄干により

居たるを岡つとよりて引くみて下にころひ落るかねて思ひ設たる事なれば墜く所にて一刀刺し其身も打損じければ元常が首をさうかくし置たる小舟に乗遁れ得て直家のもとに歸る元常死して後竜の口の城落たりければ直家軍兵と入かへて守らせけり

又一説は最所元常浮田家に從さりしかば直家與大郎基家に長船紀伊守延原土佐守添て攻させらる元常城を出山の麓段の原に陣して竹田河原にて軍せしは勇氣わたりがたく基家の岡山より引歸せり城は險阻に據たりたやすく攻がたしと直家家臣と相謀るに長船紀伊守修理は武器餘りあれど色を好む病ありあはれ一手だてして城に入りたばかり討ばやされども才智かしまきすくやか者あらでは叶がたしとしてしまりふに岡清三郎と見やりけれを直家とあく物いはでやみけりさて程經て直家清三郎をとらへておしこめおき老臣どもに清三郎は不義のふるまひあり首と切れと怒られしに皆彼幼少より奉公し今年十六歳に及て一度も過なしと諫れども聞入らず奥に入さまに岡豊前を招き清三郎をひそかに落せし清三郎にわれよく謀をいひ聞せたりといひまかば豊前かくはからひたり其わけの目たしこめたる牢をわくれを清三郎は見にざりければ驚たる斗なり豊前は清三郎と盗み出し龍の口の向牧石原にゆかりの僧の草庵と結びて居たりしに頼てかくし置けり或時修理城下の流し漁獵せしが尺八の聲聞たり人に見せしむるに清三郎が有さまを告れば劍術の師加藤十藏小性の早川左門彼是六七八人川向に渡り

て其様々見るに容貌をぐれて美しかりけるが見る人ありと尺八を納めて菴の中へ入らんとしけるよひきとどめて問けるに宇喜多家の士岡清三郎と申者なるが無實の罪によりて己に誅せらるべきと家老あはれみく爰に隠し置たるよて候洞簫は直家の猶子其家堪能にて少し習ひて候なりと申す其有さま只人ならず覺ければ元常打具して龍口より歸けり人々敵方の者なり用心あるべしと諫れども直家さへ恐るに足らずたとへ問者たりともわれ又彼に付て謀をなさんとて岡山に問者をやりて事のやうと聞え清三郎が詞よたがひざりければ元常疑ふ心もあく清三郎を寵愛し軍場にたこたり城上の北の樓に醉臥する事度々なり赤坂郡和田の城主和田伊織まれと聞龍の口に來り諫れども聞入らずかくて炎熱乃北北樓の上に酒もりして日頃好める尺八とかはるかはるく吹て清三郎が膝枕にして睡たり清三郎よきひまなれば首とらん事いと易しと思ひけるがいかさま過つる比より淺からず寵愛したる人と空しく討んは人情に非ず如何せんためらひしがいやしく仰を奉りて身をすて、此城中にたばかり入りかゝる時を得て私のなさけにかへんも志にわらずと思ひかへし元常の脇指をとりて引よせ首と打おとし袴とぬぎて首を包つゝ折なる道を北の麓に落ゆきしは早川左門來りて見るに元常の尸は未だろまたりたり大に驚きて清三郎ころ殿々きりたれと呼りて追かけて麓に下りけるが清三郎は小舟の有けるに乗らんとせしは左門追つきたり清三郎ふりかへりて切合けるが早川が眉間

を切てさり伏たり城より追ふにせ来りけれどもはや舟を棹さして向の岸にわがりの城兵の上の瀬地藏岩の邊につなぎたる小船に人あまた取乗ておせどもさせども動かず其内よ清三郎岡山にやすくどのかれ歸りけり直家は清三郎が若年にて事よくとげん事叶がたかるべし生てかへらん事は思ひもよらずわはれよしなき謀しつる物哉と悔れけるお豊前清三郎を打連て元常が首を出す直家大に驚き且悦び且あやしみて其功を賞せらるゝ事なみくならずこれより岡剛介といへり龍口ふは人々齒をかみて怒れどもせんかたなし和田の伊織を大将として逆よせに岡山に打てや出んといへども和田も自らの城とすて、無謀の軍すべしよ非ず智あきれたる斗なり直家其勢を料て龍口におしよせたれば城主を失ひたる者共心々になりて防戦の術なく多くは落失ければ元常が頼み切たる山口與市もせんかたなく士卒と共に落んも面目なしとて三の廓にて腹切て死けれを即城落ける間直家火にかけて焼はらひけり和田にも是に士卒力を失ひ落ちりければ金川の城の松田が一族とひとつにならんとて和田の城も一時に陥けり又上道郡中島落城と龍の口落城と一日の事なり直家龍口より引返す時中島の城と取まのれまに城主中島大炊無勢にて防ぐ事能はず榎の大木の洞の有しにかくれしをさがし出して遂に討れたり中島が子孫今にあり又此時の榎今に有てめぐり三丈ばかりなり

(五十六) 浮田直家近國を攻とらんとす毛利元就備中松山の城主三村紀伊守家親に下知して美

作の三星の城を攻させらる直家三村と戦ひおは隣敵其隙よせ来るべし謀をもて三村と討ばやと思ひ遠藤喜三郎といふ新參の士を近づけ

遠藤はもと阿波の人なりとぞ此時備前國津高郡加茂といふ所に居たりといへり

汝は三村成羽に有ける時汝も成羽に有て能見知たらむ美作に忍び行三村が陣に入て討ん事をたのむ所なりといひけれを遠藤三村へたやすく討るべき者よ有左れどもかゝる仰を承る事面目なりしのび入てころ見候はめとて作州に赴けり弟の修理も兄は今度萬死又一生も有べからず同じ枕に死んども是も打つれけり永祿六年 三村は穂村の興禪寺といふ山寺に陣して有けるを遠藤兄弟夜にまぎれ後の竹林の中よりしのび入椽の下にかくれ夜ふけてひそかに障子の外に立より内とさしのぞく又家親柱ふよりかゝり居たり天のわたゆる所よと鉄炮をさし當火蓋をされば火なほの火消けり喜四郎あきれて居しに修理つと外に出夜廻りの人にまぎれかゝりのかたへを通りさまよ羽折の裔に火をつけ高聲に番の者どもいましめもとの所よゆきて兄が火細に火をうつせむやがて三村が胸もとどうちぬきたり其鉛子のあと今に柱にありとのや此時三村がかたへに三村孫兵衛親成といふ老功の兵有けるがちつともさわがず人々しづまり候へとて屏風と家親が前にたて外の体を聞くに静かり扱は夜討にて無りきとて物見と出す小三星より打て出たるけしきもなし親成下知して今夜備中に引返すべしとて松山に歸りて後家親が死したる事を

人皆聞たりけり親成なかりせば大に騒で敗北すべきに人皆いひあへり遠藤はもとの竹林にあり居しが三村は死したりと覺ゆるにあまりにしづかなるは心得ぬ事と思ひながら忍びて出けるに鉄炮とわすれたり後にうろたへたりと譏れんも口をまて又立歸りしにひ行き鉄炮と把て兄弟共に備前に歸りけり後に一萬石わたへて宇垣の城に居しめ修理も中村正晴の城とあづかりけり家親が嫡子は備中猿掛の城より有莊野元祐といふ二男は三村修理亮元親といひて備中松山の城にあり父の吊軍せんとて先謀をめぐらし備前上道郡澤田の西妙禪寺に砦を攻とるならば直家沼の城を出て攻べきなり其時後づめて軍すべしとてすぐりたる軍兵四百人夜にまざれ三棹山よりかしよせ妙禪寺の砦を攻どり藥師寺彌五郎根矢與七郎等を入置たり果して直家妙禪寺の砦と攻たりければ間に入たる者松山にはせ歸りてかくと告げれば三村願ふ所の幸なりとて一族相集り其兵二萬あまり備前幸川の驛にて兵をわかち一手ハ元祐大將とて七千餘を率て萬成山の麓をめぐり春日明神の祠の前より旭川をわたり旭山の下より良に向て三棹山へかへり妙禪寺の後巻とす一手は石川左衛門尉五千計とて首村ひやけばなにかへり岡山の北を過原尾島村に出て直家が旗本へかしよせ一時に勝負せんとなり三村元親は一萬人をひきめて津島村より國府市塙を過て釣のわたりを越四御神村の山を越沼の城を攻とるべしと謀を定てかへり入りけり直家はかくともしらす沼の城と出古津の西穴甘に陳して居ける處に萬成山の砦より敵三方にわられて押

よすると告來る前には敵死地を守りて城に籠りたり又大軍攻來ると聞けければいろめきさわぎけるに直家少もひるまゝあざ笑ひ此城だに攻破らば敵の幾萬もわれ蹴ちらしてすつべき物をといひもあへず甲をとつて着結びたる緒のはしと刀と抽てきりて棄馬に打乗二十餘町の田の中と眞一文字と妙禪寺の砦にのけ向先陣の者共たかくれて砦を攻どり得ず今旗本にて無二無三にのれや者共と下知するに力を得て先陣の軍兵かめきさげんで攻ければ思ひきりたる三村が士ども引くみく討死しければ直家城は火とのけさせ三棹山に打上り山上より遙く敵を見おろしてひるへたり元祐は春日の宮の前をわたり玉井宮の前と過國富村近くす、みける處に妙禪寺にて討もらされたる者とも落きたりて敵ハや三棹山にとり上りぬといへばさわざ立たる所に戸川肥後守花房助兵衛岡越前守長船紀伊守等鉄炮とうちかけす、み來る備中の兵亂れ立て國富より徳興寺の間にて討る、者數としらす元祐五十騎はあり左右ふたて勝はありたる敵に向ひ延原土佐守が兵と追立浮田左京の朱の四半に兒の字の馬じると目がけ直家の旗本なりとや思ひけん馳入て討死しける首をば能勢修理とりたりけり元親は四御神村矢津の砦近くす、む處に妙禪寺の煙天とてかしてものぼるゝ見てすはや城の落けるよとひしめきおへり石川も相圖の皆たがひぬる上は元親とひとつになりて軍せんといふ所に浮田元家丸に兒の字つけたる旗山風に吹なびけさせ一足もひくなと呼はりてれし來り原尾島と北南へ數度追つ返しつ相戦ふ備中兵うら崩して

石川も竹田村に引入んと川上へ人数をまどむ直家兵をおしおろし高屋村まで進まれば石川は八幡村にて取返し元家を目かけ二三度火をちらして相戦ふ浮田の兵もまた討れ雄町村を東へさして敗北す元親は思ふ仇とうち得ざるのみならずいひがひなく兩陣の軍やぶれ兄も討死しける事口をしく馬の頭を南にひきむけ血眼になりて真先かけ只死ねやと罵りて面もふらず戦ければ明石飛彈守岡信濃守此鋒も破られてければ元親軍は勝たるとく鎗を提げ北る敵と追たつる處に國富村にて軍せし長船等横わひにかけ來り中おどりおめければ元親敵の中にかへ入んとせしを士ども轡にとり付今日おからへ再び兵を起し仇を報ゆる時有べしとしひて諫て引返す猶おひかくれば取てかへし相支て釣の渡り越引とりけりかくて彌直家を討て仇と報ゆべしと志深かりし處に光源院殿(義輝)を三好弑して靈陽院殿(義昭)没落し給ひ織田信長をたのみ給へども京には信長村井長門を守護せし靈陽院殿志仲へきに非ず備後の輒に落行き毛利家をたよられしおば信長元親がもとへ使を以て此度將軍にくみせず西國の道路とふさき織田家に忠と致さばやがて信長師を出し中國を討平け備中備後を元親に與ふべしと誓紙を添ていひかくられしかば元親一族を集め將軍家に従ひたりともさばかりの大功あるべからず殊に浮田家將軍に隨ふならば兼て思ひ設けたる仇を報ゆる事も叶がたかるべし信長の望む所に隨ひ將軍と討まわらせ織田家の力をたのみ浮田を討滅すべしと謀りければ皆尤と一同す三村孫兵衛親成同孫

太郎義兼父子は父の仇を報ゆるに他人の力をかる事や候べき弓箭とる射は忠と孝との二より外なし君君たらすとへども臣は臣たらずは有べからずとあう承候へ信長たをかりてかたらひて候を直實なりと欺れ虎狼の如く世に稱する信長に從ひて將軍を討まわらせ毛利家を敵になさん事惡逆不義の名通るべからず信長將軍の威をりて五畿内を討したがへ後には將軍をわさどり都を追出す及ぶは惡逆に候はずやのゝる人をたのみたまはん事有べくもなしと諫れども元親と始皆當家武運をひらくべき時あるに衆議に背く事よど人を怒りければ三村父子せんかたなく成羽も歸りぬ常山備前兒の城主三村上野介高德が妻は元親の妹なり親成をすて替たらんには必と將軍へ告しらせ逆よせずべしとく信長の援兵を乞て手始に成羽を攻めとすべしといひければ此義に同じて信長のもとへ使遣し成羽にはたらくべき設をなせり親成は如何すべきと案し煩ひたる所に靈陽院殿より偏にたのみ思召よし聞へしかばさらば兵をたまはり候なば松山を攻申べしと申けりかくて安藝備後の兵七千三百餘さしむけられしかば天正三年五月廿四日松山へ攻よする松山よは思ひもよらず城遂に陷元親も城を落去りて阿部山にありけるを同廿九日討とりて靈陽院殿へ注進す

一説元親城を攻落されし時升彌助といふ士元親のあどをしたひて安部山にて追つき元親と名乗城に歸りて討死せん其間に愛を落のびて迎をひらき給へといへども元親聞きとてものがれ

ぬ所なりし者を乞て來れ自害すべしといはれしは再三諫め争ひしかども是非共おといひしめば泣々今生の暇乞しかたみをとりて玉村に有し元親の母に送りとけさせたり城に至り元親が匿たる所をしりて告茶るにやと門をひらきければ内より入此城と枕にせん爲に來れるよし名のりて散々に戦ひあまた切伏て討死しけり元親は使者と待れしに音づるもなければ松運寺の道に出郷民をたのみ城中にはひかくり使者と待かけて自殺せられしといへり

それより兒島の常山と攻んとて毛利家の大将小早川伊豆守光重に三村父子相加り成羽にて勢揃して六月四日山村郡兒島に陳し二手にわかれて先陣浦兵部宗勝川吉より藤木にかゝりて押よせ六日の朝大手の木戸口へ攻よせたり高徳は後巻とたのむべき味方なく殊に累年毛利家も弓矢をとりし三村家の謀主なまはのがれんと思ひこそとて嫡子源五郎高秀と共に鉄炮をうち出す高徳の弟小七郎高重の箭つぎばやに弓を射出寄手此三人に防がれて手負ふ者あまたあり七日の曉に及て城中最後の酒宴の聲城外に聞へければわれれとらじと攻よせたり高徳の母我先さき立んとて柱に刀の柄をひすび付走りかゝりつらぬかれて死しぬ高秀十五歳御あまも残らんは心かゝりならんといひて腹を切ぬ二男八ッに成しをひきよせて刺殺しぬ高徳の妹ありしが藤州鼻高山の城主は高徳の弟なればそこに落ゆかれよといへども思ひよりぬ事よといひ捨て母の貫きたる刀にて乳のあたりをさし通し同じ枕にふしたりけり高徳の妻は卅三歳なるが弓箭とりの

女房と成て最期に無しく死する事や有三村が一族今を限に一軍せんとして紅のうす衣を甲の上にてきて薙刀かつとりて出けるを局の女をもかしとむれば早く立忍びて命を全うせよ敵一人をも討とらずして空しく死するやうやあるとてふり切て走り出れば此上は誰のこらんとて立たる長柄の鎧をとり突て出る高徳の恩顧の士八十三人今日を限に切て出て浦が七百計ひかへたる真中に死狂ひに戦ひければ討る者多しされども小勢にて戦ひ疲ければ高徳の妻兵部とよひかけ腰なる刀をぬき出し是は敵平が造れるにて候わが家重代の物なり父にうひ申心にて身とひなさず候が武名聞にある兵部殿にまゐらするなりといひて城に歸り自害す高徳も腹を切れば弟乃高重介錯して其身も腹切りぬ寄守亂れて首共をとり斬の津に送りけり常山の山上今も其城跡あり

(五十七) 永祿三年謙信八千の師を相州小田原より出さる關東の諸將皆々なびき従ひて十五萬に及べり旗本の高麗寺山の麓に陣し先陣太田三樂は小磯に陣す北條の兵戦はまして城を引入れれば蓮池まで攻入るれより鎌倉へ赴き鶴岡の八幡宮に詣らる上杉憲政の長臣等も皆群參す成田長安警固の者と争論の事あり誅罰に及ぶべきといへどもこれを宥らる成田謙信の怒を恐れ病して出ずまれを甲陽軍艦謙信成田 同年六月謙信上京せらる六月廿八日京都に至り七月七日光源院殿を打とせるせしは非なり 同年六月謙信上京せらる六月廿八日京都に至り七月七日光源院殿に詣り吉光の太刀黄金三十枚獻じけり光源院殿より管領の任又諱の字賜り兄弟の歳に

準せらるゝの命を承り越後に歸られけり

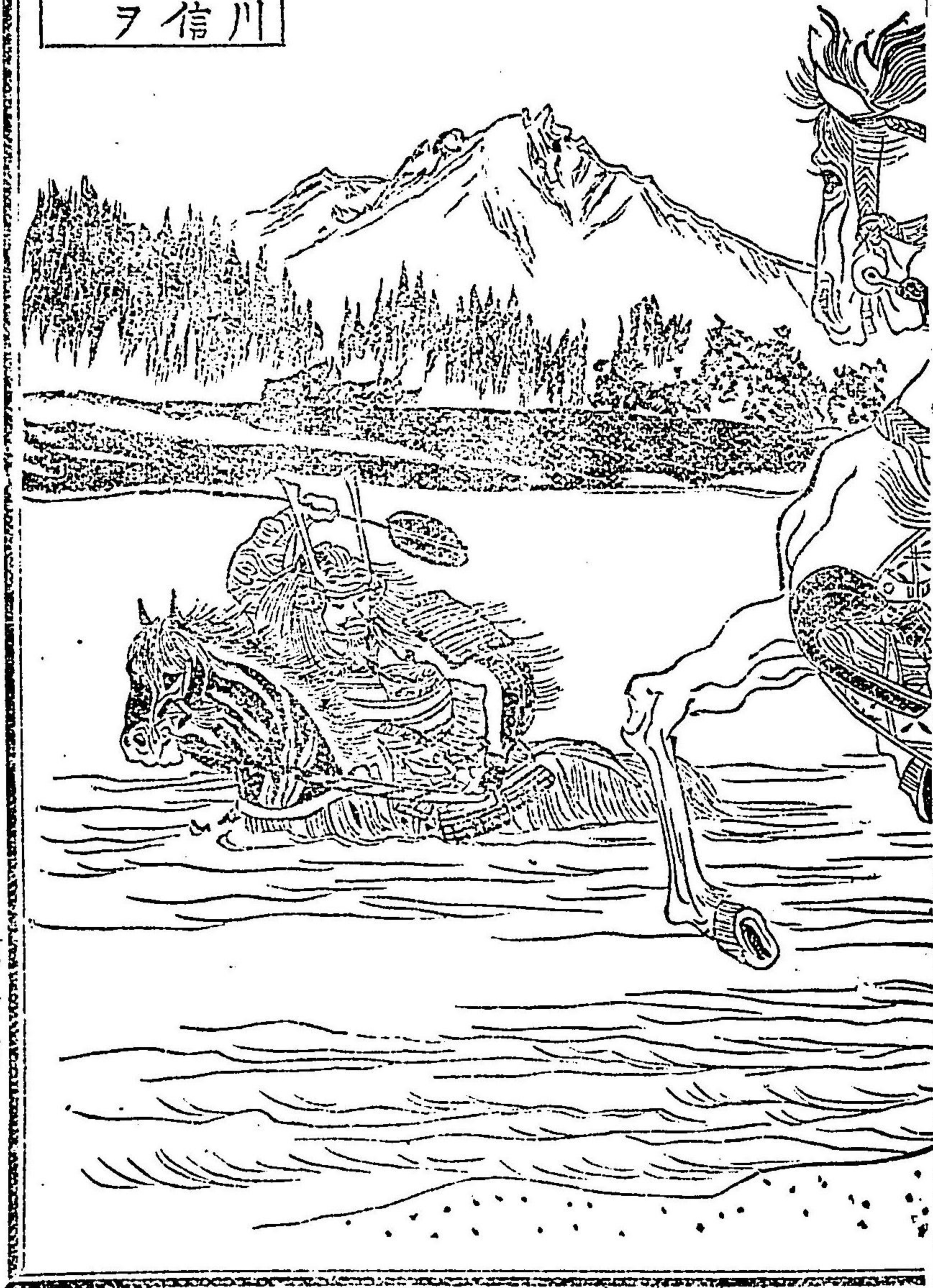
謙信相州に攻入る時京都より近衛關白前久公を進られ管領の職と承る事此時より始るともいへり又鶴岡に参詣し管領の職に任ず近衛關白前久公下向ありて光源院殿の公方より大和兵部少輔使たりともいへり孰か是なる事を知ず又鎌信上京の事三千計の人数まで越後を出られしといへり光源院殿に謁して後京堺住吉所々遊覽して國に歸るに及て光源院殿に三好松永謀叛の相わられ見にて候御書を賜はり候ならば馳上り誅討すべき由密に申されしを三好松永も察しけるがや深く恐れけり程なく永祿七年三好長康河内の津江にて病死しけるを松永かくして翌年の春に至りて公方も聞し召越後へ御書を賜はりける處小松永此をや泄聞けんをそぞ光源院殿を殺しけるといへり

(五十八) 謙信小田原の蓮池まで攻入明日は鎌倉に赴べしとて軍評定ありし時新發田因幡守治長其比十五歳ありしがすゝと出てかゝる手くばりならば必定味方叛北すべしと申す謙信怒りて舌のやばらかなるまゝ、又物ないひをといはれしかば治長居直り謹でけふより君臣の義と絶せたまひり候なば小田原に馳参り北條家の先陣まで君を追討せぬらむとて酒匂川のこなたにてはたやすく討とり奉らん物と申す謙信其特色をやばらげ天晴剛の者よ神妙にも申たる哉明日の後殿をせよと命せられける治長軍だてしかくすべきとてやがて事よく小田原を引とりた

り治長後景勝の世に及て二心ありければ景勝これを討るゝに新發田五十野兩城を守りて三年を経て城落けれを治長染月毛といふ馬に乗三尺五寸有ける光重の刀を抽持て大軍の中よかけ入討死しけり此馬はきはめて色白き尾かみなりしに齒の汁をばけにて染たれば年月を累て後馬紅の糸をみだしかけたるに似たりしかや井筒女之助此馬を得て乗しといへり又景勝治長を攻らるゝ時治長の士に波多野忠左衛門といふ強力の者あり景勝のよせらるゝ道二すぢの中に近き方と三淵といふて一騎打の險阻ありけるに待て景勝のうち道られん時むすど組て刺殺さんと思ひ三淵の岩穴にかくれ居たりける景勝既に打向ふ時皆口々に近き方よりよせ給へと申す景勝聞す兵法お迂を以て直とすといふ事あり危き道に不意の患ありといひて三淵よかゝらず道をまはりてすゝまれしかば波多野がしたく空しく成けり

(五十九) 永祿四年七月甲州に謙信より入あられし問者ども越後に歸りて信州の士二心ある者あまた有しと五月上旬信玄川中島に趣て死罪に行はれ是によりて疑と生ずる者多し又和利が嶽の軍に士卒多く手負討死しける由を告げるを謙信聞て三軍の禍は狐終より生ずといへりは一ツ勢たるに乗すべき是二ツ八月に至て師を川中島に出すべきとて士大將を盡く呼あつめ各謀と問るゝに存する旨を書しるして出しけるを擇わかちて上中下の三等とし其下策を用ゆべしといはれしかば此は如何候べきと怪しみければ謙信のいはく上策は既に敵の察する處

御幣川
二謙信
信玄ヲ
追フ



にてわれを待べし謀かたらざる由を聞待設たる所へ攻入んにいので勝べき中策は数年評議せし所なり下策を用ひて貝津の城をふみ越西條山に陣し姑く敵の後巻を待ん是兵を死地に陥るゝ非ずや信玄おしよせば其時勝負一時に決すべしもし信玄貝津の城に入らば圍み攻ん又信玄川中島に陣せりて吾路を塞ぐならば吾軍雨の宮の渡りを渉らず直に貝津の城に向ひて攻破らんに信玄必救來るべし其時又一戦してかなはずば討死すべし是下策を用るいそれかりとて八月廿四日西條山におし入陣したりけれを信玄後巻して暫對陣せられしが廣瀬のわたりを越て貝津の城に入たりけりかくて九月九日の晚謙信士大將をあつめ明日信玄必打出て戦ふべきよ今夜雨の宮のわたりをさか寄して其不意を撃べし用意せよとて寅の刻に至て川中島に兵をおし出す先陣ハ楠崎和泉後陣は甘粕備後なり果して十日の卯の刻をかりは信玄一萬餘の兵を率ひ筑摩川に打出て善光寺の要路を待れし處に謙信軍とすゝめて一手さりの合戦とせしむ謙信旗本真くろよなりて切かゝり信玄れ旗本をかし崩す甲斐の兵討るゝ者數としらずかゝる所に西條山の甲州の軍兵一騎がけは馳來るを見て謙信兵とまじめ勝を全せられたり甘粕備後後陣の兵をすゝむるをみて信玄の旗本ふみどまりたるが又亂れたちて廣瀬のわたりを引退く甘粕是に因て西川邊に陣する事三日にして引どれり

是謙信實記に據りてしるす處なり川中島の戦異説多く分明ならず一説に天文廿三年八月十

八日川中島よて戦あり謙信旗本半町計敗北する處に宇佐美駿河守定行横あひにかゝり信玄の兵大に亂れ御幣川へ追入られ討るゝ者多し信玄を川の中へ馬と立たる處に謙信縁の曇子にて包たる眉衣にてこてをさし白き手ぬぐひをもて頭を包み三尺計の刀を抽もち虎のあれたる如くなる鹿毛の馬に打のり信玄はいづくに在やと呼ぶ原大隅信玄何事に爰にあるべきやうろたへ者よと罵り鎗にて突けれ共つき外す謙信川へ馬を乗こみ信玄よかけよせ三刀まで斬れしよ信玄持たる軍配鬨も切とられ手負て既に危かりしに原大隅萩原彌右衛門鎗をとりつた、みおけて謙信とたゝきけるに馬のさんづにあたり馬川の深みへ飛入ける其間に信玄の馬副の者ども信玄の馬を川岸に引あげて物わかれしたりと也宇佐美駿河守謙信より賜はりたる感狀も天文二十三年八月十八日川中島に於て横鎗をもて信玄のはた本を突崩したる由のせられたり弘治二年三月廿五日にも川中島にて軍あり謙信筑摩川を涉て夜軍まかゝられしは板垣駿河一條六郎諸角豊後初鹿源五郎輪形月織部山本勘介と始として討死する者多し甲斐の先陣上山よりかゝり來り前後に逼りける故謙信川と涉て引とられけり此時に宇佐美駿河守先陣して功あり又永祿四年九月十日川中島の戦に武田の先陣敗北す信玄の旗本を以てより返し長尾政景等陣をみだしてかゝりける所に渡邊越中一陣衆をこにて鎗と入遂に甲斐の軍敗北せし事皆謙信家臣よ賜し感狀傳のれり甲陽軍鑑川中島數度の軍を附會して一度となすなるべし又一

説に永祿四年九月十日の戦の事は謙信の家にいひ傳たる事なしといへり然るも謙信の感状を傳へて謙信實記と符合するに似たれば九月十日戦有し事疑べからず又上杉義春入道入港京都に開居して有しか徒然の餘り甲陽軍鑑をよませて聞れしに事實認めざる事のみなり高坂が死後の事を多く書置川越の軍も年月大にたがひ人の姓名も以ての外認めざる事多く又なまの造りこまらへたるもあり謙信の世の事は予よくしりたるに如此中やまれるなれば此書更に信するに足らずと復よまする事なかりしといへり今を以て是を視るに甲陽軍鑑過半は贋物なり又按るに今世に専行る、書に川中島五戰記といへるあり此書は川中島の戰五度なりとするせり然るも其中に疑ふべき事なきも非ずまれも又正しき書とも信せられず謙信鶴岡に詣て忍の成田ノ掛たりしかを關東の諸將心々離散し小荷駄を敵に奪われ僅に謙信のがれ得て越後に歸りしと甲陽軍鑑に記さるるも心得られず關東の諸將なひき従はずといかて其年京に上る事の有べき是事情時勢の顯然たる事にして甲陽軍鑑の虛妄論をよまたず謙信が敵情を察したる所以を如何と云ふに西條山にありて或夜高橋より海津の方を望むも煙兩度立ち登りければ信玄大正奇の兩備にて一手の西條山を攻めさせ又一手は我が川中島へ出て越後路へ引退ん時と待受け信玄の旗本を以て我を撃んと謀略なり信玄左様のことならば我れ今宵の中雨の宮の渡を越して思ひも寄らぬ川中島に打出信玄に肝を冷させ呉

んすと一陰一陽車掛の陣法と以て甲州勢を撃破りしものよて是れを即ち川中島の大戦なり此役始めは越後勢の勝ちにして大正の軍歸り來て後には甲州勢の利なり是を以て世人多くは此役の全局には敢て勝敗なしと云ひ又其前後川中島の數戦にも敢て勝敗と云ふ程のことなしと云ふ此見解果して信なるる皮相の見と以てすれば然るが如しと雖も深く其内部に入りて之を察すれば大に懸隔ありて日と同うして論ふべからざるものあり先づ本役よりして論はんか甲越互に一勝一敗あり故に唯此一勝一敗の一字に眼を著け其數同じきの點にのみ心を著これなば其全局の上にて敢て勝敗なきもの、如しと雖も細に事物の輕重に意を注ぐ者は必ず越後勢は大勝小敗にして甲州勢は小勝大敗なるの差あるの事實と知るべし況してや甲州勢は主將創傷を被り部將多く撃死するよ於てをや何んぞ勝敗なしと云ふべけんや越後勢の勝ちにして甲州勢の敗たること信玄が軍屬に於て照し観るが如し又其前後川中島の數戦も常に勝敗は敢てなきもの、如しと雖も謙信の常に八千前後の兵と率の信玄は常より二萬前後の卒を率ふたり山戰の勝敗は敢て其兵の多寡に因らずと雖も野戰は他に事情即ち天の時地の利人の和等に於て異なるにあらざれば兵數の多き者は勝ち其寡き者は敗るべきの常理なり川中島の戦争は即ち野戰にして其兵數の異なる彼れが如く甚だしくて常に五角の戦争なりとせば若し兵數同じのらんふは必ず常に謙信の勝ちて信玄の敗るべきこと理の當に

然るべき所なり皮相に勝敗なしと雖も豈に内實も勝敗なしと云ふべけんや

(六十) 謙信ハ長さのみ高らのす左の脚に氣腫有てわゆむ時足をひく如く見得しとなり物の貝する事は尠く黒き木綿の胴服と着鉄にて造たる小き車笠をのぶり籠る事も尠く青竹を三尺計にして杖の如く提げもちて士卒と下知せられけり梁の章胤が竹如意の遺風也とぞ

北魏の兵鐘離城を攻し時梁より章胤と以て後援させられけり北魏の將楊大眼勇將にて數萬騎を率て戦ひしに叙を素木にて造りし輿に乗白角の如意と執て軍兵と下知し切かちたる事史に見えたり

(六十一) 永祿五年三月北條氏康父子武田信玄父子數萬の兵を以て武州松山の城とかこまる、と聞謙信八千の兵ともて後卷せられしる十五日麻橋に着陣あれば城落けると聞てへければさればこれより山の根の城へたしよせ打破るべし敵後づめするならば北條武田父子四將の大軍うち合せて軍せん事尤望む是なれといふより早く刀根川と打わたりあけたる船橋を切流させ山の根の城にたしよせ忽攻たとし小田助三郎と始として皆なて切にまてけりかくて使を四將の陣よりて松山の城に向はれ候由と承り出向ひ候に城早く攻とられ軍つかまつる事なくして弓箭の禮義も脊て候唯今山の根の城と攻候ほどに後卷や候らんとといひ送りしのが氏康の、りて軍せんとも信玄のいはく今勝たりとも謙信にを四人してかちたりと人に誹られん事口をしさと

てしひてとやめてさて止けり信玄實は、のらず日比謙信の勇氣倍々にても戦がたきに松山の城落て怒をふくみたれを其鋒にむのひがたく虎を恐る、が如くありし故とぞ

又一説に此時信玄兵とす、め太鼓を鳴し軍威嚴然たり越後の軍兵も物の具しはや打向んとせしを謙信いやしく信玄か、り來るに非ず引とらん爲なり馬の鞍とわろし甲冑をぬいで休息すべしといわれし果して信玄引返されたりといへり

將に進まんとして之に退と示し將に退かんとして之に進と示すこと兵家の訣 齊の孫臏は日々籠を減じ退軍の體を示して却て兵を増して敵將龐涓を撃取り後漢の虜羽は之を轉じて毎日籠を増し進軍の體と示して反て退き蜀の孔明も亦虜羽が法に効ふて司馬懿を欺く等其例少あるに信玄太鼓を打鳴して軍威嚴然將に進まんとする體を示すものは其本心退かんとするにあること智將の知る所なり一方は進まんとするの體と示して退き一方は敵密するの體を見つゝ、兵士に甲冑を脱ぎて休息すべしと令すること共に妙と謂ふべし嗚呼兩將の兵略常人の窺ひ知るべからざる所なり

(六十二) 永祿六年十一月十五日一向宗の黨と厚木坂にて軍ありし時一揆より蜂谷半之丞渡邊源藏眞先にす、み味方には上村庄右衛門黒田半平鎗を合せ渡邊黒田を突倒したるに味方きろひか、りて追たつれば蜂谷も渡邊も引退て細なはてにか、るを氷野藤十郎蜂谷いかにのがすまじ

と詞をかくれれば蜂谷ふみとまゝりにつこと笑て藤十郎いかでかわれらに敵すべきいさ參らんとて鎧を地につきたて、手につばきをはきかけらばといふ水野もふみと、めて近づき得ず蜂谷さればころとて又しづかに引退く蜂谷が鎧は三間柄の中を少ふとくして長吉が鍛たる刀なるを勝れて物を貫きけるといへり 東照宮御馬を乗出され蜂谷め返せと御詞をかけらるれば跡をも見ずして逃る松平金助あますまじと追つむれば蜂谷ふみとまゝり 殿なればこそ逃たれ御身にはひくまじいといふて取てかへし金助を五六度もつきしりぞけたりしが蜂谷鎧をなげつきよして金助を突倒す 東照宮蜂谷めとて又御馬に乗つけさせ給へば蜂谷引返し逃退けるもど

蜂谷其後は先だちて一向宗の黨をはなれて降参しろれより人々願申て終に一向宗の黨の者ども罪を御赦有てけり其後二連木の合戦に本多平八郎牧宗次郎鎧を合けるに蜂谷少れくれたりしが蜂谷早とく鎧の合たるにかにといふ者有しを半之丞聞て他人鎧をしたらん我の切合までよといひすて、刀を提げて敵の中へ飛込で二人なき伏たるに河井正徳といふ者鉄砲とかまへたる所に走りかゝる正徳かくれなき手だれにてうちたるに痛手なりしに起あがりてそこを引とりたれども蜂谷つひも死しけるとぞ又此正徳ある時せはしき場にて後殿しける時後より其手おひ討とれと呼ぶこれは正徳生れつき賊なりし故手負たると思ひてかくいひたるなり其時ふみとまゝりて弓箭神に誓ひて手負にてはなし生得のちんばとひひけるより今川家に

ほめて正徳といひけるとなり又蜂谷が痛手おひたると其老母の聞ていかに首尾の有つるぞと問其さまこれくたりと答ればうれしや士の戦場に出て矢もあたるは常の事なりもし手負がまのあしよりせば死したりとも冥途に面目なるべしといひけるとぞ戦國の時婦人の身も弓箭とる家に生れたるは志す所大にことなるもの想みつべき事なり

(六十三) 永祿七年正月十六日三河一向宗の黨と針崎にて終日のせり合わり中根喜藏と名のりて一番鎧を合す一揆の相手は渡邊半之丞なりまが鎧すて刀とぬいて飛込だり中根も刀を抜互に手負ひ相引にしける處に鶴殿十郎三郎渡邊と目がけ追かけたるを渡邊が父源五左衛門たすけ来て鶴殿を突伏たるを 東照宮御覽じて御手づから鎧を提給ひ鎧ぐみたまひて突伏給ふうす手なりしを引退くを見て石川十郎左衛門渡邊源五左衛門競かゝりて 東照宮に向ひ奉る内藤甚市弓とり直し源五左衛門が股と射貫ければ半之丞父をさき負て引退きそれより物わかれせり内藤は渡邊が甥なりけれども御急難の時にあたりけり故射倒たるとなり

(六十四) 謙信信玄と和平を結んどせられし時長遠寺の僧を使にせらる此僧は遊説の人なり謙信かの僧に甲斐れ士に向井與左衛門といふ者やあると問るゝにこれ有と申す又創の痕や有と問るに面に刀の痕有と申す謙信のいそく川中島の戦に名乗かけてわれと後よりつき通す處とふり願て一刀斬たりしづかじよもたすからじと思ひつるにながらへたるよなどて萌黄の胸肩衣に鎧

のあと有をとり出し書簡を添て向井よおくられけり此を世にかへり感状といふ其書中に川中島の事とのせられたりといへり

(六十五) 日吉は尾州愛智郡中邑の産なりしが幼時其邑の傍にありける光明寺と云へる寺院に託されけるに猿兒中々機敏にして甚と悪しきことのみぞ多りける住僧瓶に美菓と貯へけるが不在の節彼の狡黠兒に喰はれなんことを恐れ必算を廻らし日吉に謂て此瓶中にあるものは害物なれば夢々手な觸れなせと云ひければ日吉左様のものに候か恐るべしと云ひつゝ退きける程に住僧ハ先づ是れにて安心と他出なしけるに先きに恐れし體を示したる狡黠兒獨り笑みして彼の瓶の蓋を開け内なる美菓を皆喰ひ盡し候て住僧が秘藏したる湯呑器と打破さけるに臆て住僧歸りける程に日丸はよと泣き沈みければ住僧何故に泣き沈めるぞと問へば日吉の答ふるやう御師匠様の秘藏なされし湯呑器を過り碎さければ申解の術なく死して御詫言仕めと思ふに付けてハ像て承る彼の瓶中のものを喰へば忽ち死すと乃由考へ出でたれば是れこそ死ぬに善しと喰へども今に死なず道は如何にして宜からんかと泣き沈み居り候ものなりと聞て住僧呆然て更に言句なかりける是れぞ即ち後世恐るべき豊臣秀吉となりし者なり桐植は二葉より香しと其れ此等乃者をも云ふらんか

(六十六) 日吉峰須賀小六の下にありけるに小六の所持なせる刀如何にも鋭利りければ戀々の

情止み難く終に小六に向ふて之を乞ひけるに小六の云へるやう此の刀は我も嘗て盗み取りしものなれば汝も亦宜しく之を竊み取るべし然らば之を與へんとて日限を定めて約せしかば小六は猿兒今宵は必ず來ぬらんと大の眼を八角と見開き張臂羽翼の如く左右に廣げ甚と苛めしく手扣へたり折りしも雨降來りければ日吉は是れ幸ひの事と竊に小六が居間の側邊の庭なる樹枝に菅笠を結び付け其身は己が居間に立歸りて安らかに横臥けるに此方は小六今宵ハ必ず來ぬらんと想ひしに違えず笠に雨滴の落つる音しける程に今かくと氣を張りて終夜寐ざりければ終に身心疲勞果て其體は起き其目は開きしと雖も其心は既に寐て茫然たり斯くて夜の將に明けなんとする比及ふ日吉は勃然と起き上り時こり善しと竊に小六の居間に忍び入りしに案に違はず小六か居睡してありける程に難なく彼の刀を奪取りまんと首尾も吉野山と類被を取外し我が居間を指して落行きけるとは夢にも知らぬ小六は嗚呼寐るともなしに思はず居睡しか劍呑々々と傍を見れば呆然れや今までありし刀何處に行きけん居間になし偕ては他人の所爲か左りとも猿兒の竊取りしかと暫し茫然自失なしける所へ日吉ヤッて來り賊魁難なく竊取り候へば御約束の通り賜はらんと云ひければ小六愕然として驚き偕ても機敏き猿兒ある哉盜賊のうはまへ取りとは其れ汝が謂ひかどて又茫然自失するもの良久しかりけるとぞん

(六十七) 黒田孝高頗る器略あり羽柴秀吉に因りて毛利氏の撃べきの狀を説き臣請ふ之れが郷

導をなさんと云ひければ秀吉具に此の趣きと主公織田信長に語りけるに信長固より天下一統の志あれば終に意を決して西征の旨を仰出され秀吉を以て征西大將となしけるに聽て程なく播磨を兼從へければ秀吉をして自ら之れに封せしめけるに秀吉信長の應に入りて辭しければ信長記帳を授けて云へるやう功成らば則ち中國と擧げて皆汝に予ふべし汝遂に進んで九州を取れよ其援師の若きは當に請ふに依りて之を遣はすべしと秀吉拜して對ふるやう君臣の鄙陋をも顧み給ひで勳奮諸將を捨て大任を臣に命せらるる臣争で力を竭さざるべきや臣記帳の賜を辱ふす是れ君臣として専ら制せまひ叛く者と討ち服する者と撫で機に臨みて變を制し以て中國を定めんと臣が度内にあらんのみ君の近臣森矢部福富諸人既に功と積み勞を累ぬるよ未だ報ゆる所あらず中國既に定まるの後は願くは此輩をよそ封せられたし臣は則ち直ちに進み勢ひに乗り遂に九州を下さん若し九州下らば願くは其一歳の入を賜はりたし然らば其入金をして糧伏と善へ舟艦と造り海を濟りて朝鮮に入らん君若し臣が功を賞せんと欲せば願くは其時朝鮮を賜りたし臣乃ち朝鮮の兵を用ひて又明に入らん庶幾は君の威靈に倚りて明國を席卷し三國と合して一となさんこと是れ臣が宿志なり斯くても亦餘命あらば又進んで諸國を壓服し遂に全世界を併呑みて滿天下一統の業を遂げ地盡れば夫より大地を堀りて地獄に攻入り閻魔王を擒にち赤青の鬼奴は一聯の繩に纏り付け引きもて來りて諸將の馬の口取りにせんず是れ臣が與志なりと信長聞

き笑ふて曰く秀吉又復大言かさて遂に便宜事に従ふよと許しける

拿破崙一世の言に稱せらく英雄も地位を得ざれば其用を爲し難去譬へば蔭處の種田全收を爲し能はざるが如しと是れ多くは爵位よ就て云へるものなりと雖ども土地よ就て考ふるも亦此の如く如何なる豪傑とても其輩出の土地武を用うるに適たたる處にあらねむ其雄と施し難きものなり秀吉此の志ありて全く之を遂げず途中にして没しぬるは是れ其雄略の足らざるにあらず蔭處の種田全收を爲し能はざるにて孤島に生れ出でたるよ因らずんばあらず若し亞細亞大陸に輩出しぬらんには即ち東洋の拿破崙にて世界を併呑しこと疑ひなし是れ余が知己某も亦既よ此の意見と述べし所なるが余は又他に想ふ所あり何ぞや假令孤島よ生れしむる事も海路交通の便を開きし今日に出でたらんには多く軍艦と造り海軍を盛にして五洲を蹂躪り其武を嘖すこと敢て拿破崙に劣らざるべきと信するなり然るに其地遠く大陸に孤れ其時海路交通の便を開かざるに生れしは秀吉の爲め惜む所なり左るに尙ほ且つ夫れまでの功業をなしたると見れば秀吉の雄武は亞歷山大、愷撒成吉思汗、帖木兒の諸雄と越して拿破崙と比肩するの實力を有するよと想見るべきなり

(六十八) 酒匂川の役北條方大敗して退き種々計議を凝せし末大導寺駿河守の意見により田島村の此方に地雷火を伏置敵兵の之に當り周章騒ぐ所と斷立んと計けるとは夢にも知らぬ武田勢

勝に乗りて潮の涌が如く押行けるは、劍呑至極のことなりけり然るに、眞田昌幸田島村の方に奮りて陽氣炎々として日に映じけると見て、借ては敵兵地雷火を伏せしと覺えたりとて、主將信玄と謀り相摸川酒匂川の兩役に擒はしたる敵兵三百餘人の命を助けて返へしけると、北條方の松田大導寺はすのこそ甲府勢落入りたりと一聲の鐵砲を相圖り地雷火の口に火を移しければ、何かは以て堪るべき大地より火焰と共に砂石を吹上四邊へ一圓の火炎となりける程に、彼の者共は脱る間もかく面部手足の嫌ひなく焦爛らし見るくうち、に三百餘人一人も残らば焼死けるは憐と云ふも愚かなり遠く此體と見たる松田大導寺は小氣味よしと手を拍て笑ひ悦びつ、時分は能きど者共甲府勢の燒残りし者酒匂川へ逃げ落ちん間一人も遁すなと大導寺の令より一萬五千餘騎は曾我山を廻り酒匂川を指して進みけるに、北條氏忠も亦同じく一萬五千餘騎にて曾我山を廻りて徳間井より進みければ、大將氏康父子大に悦び今や信玄の首撃て來るならんと舌打鳴して待居ける此方は信玄此の火の手を見るよりも、山縣三郎兵衛馬場美濃守の兩人其勢都合五千餘騎めて徳間井に向はせ眞田安房守昌幸同舎弟隠岐守の兩人は同じく其勢五千餘騎にて曾我山の押へとなし雙方へ手分をしてぞ遣はしける借ても眞田昌幸は田島村の地雷火と難なく避け却て兩道より攻掛る手術をなして待ち居しに、松田尾張守大導寺駿河守は斯ること、は露知らず揉に揉で進む所に思ひも寄らぬ松蔭に雁金の旗二流風に靡かし許多の軍勢整々と扣へたるを、松田先陣に進み之を見

て味方ふは見馴ぬ紋なりと怪む折柄若武者一騎其間近く進み寄り高聲に呼びけるは此の手へ向ひしは北條方よ智將と聞いたる松田殿と覺たり斯く申す某は武田家よ於て眞田一徳齋が三男なる安房守昌幸あり此度我々を小田原へ引入れ給ふは極めて良計あらんと存じ先達て相摸川酒匂川の兩陣にて擒にし置きたる北條方の諸卒を先陣に進ませ地雷火の先駈致させたり然るに因て北條の方々此の火の手を見給は、必ず此道へ御出あらんと存先刻より待ち受けしに遅かりしこと哉いさ昌幸松田殿へ見參ふ待ち受け御馳走を振舞申さんと後の方と招きければ、數百挺の鐵砲一度に働と打掛けるに、松田勢は思ひ設けぬことなれば大に敗れて走りける

(六十九) 或時武田信玄近習の人々と夜話ありし時諸國の大將の剛性賢愚の論ありけるに、跡部大炊之介申すは、今川治部大輔義元の沙汰を承るる器用なる大將にて候と上下感じ候由を申す信玄夫れは何のやうなる器用ぞと尋ぬれば、跡部申すは、御客なんぞありし時此人に馬を下さるべしと思ふに必ず馬を賜ひ此人に腰物を下さるべきやなど人の推量するに少しも違はず腰物を與ふる由皆器用のなす所に候と上下噂さ致し居り候と申ければ、信玄笑ひ夫れが何とて器用にてあるべきや夫れは不器用者と申すものなり下々が積りの外刀を呉れべきと思ふに、小袖を呉れ馬を取らずべきものとの人の申すには、一貫文斗取らせ此人には深き物は下さる問敷と取沙汰するよ其者却て金子なき澤山に取らせたるこそ國持大將の法なり敵と取合に必定此地へ出づると思

ふ所へは出でずして敵に骨を折らせ又出間敷と敵の思ふ所へは如何にも輕々と出てこそ勝ちを得るものなり待擡へたる所へ出ては何とまで利あるべきぞ總別器用だてをする者は不器用の異只中分別だてをする者は無分別の九ツ時ヲ武士は手の外として下より積られぬころ其の大將なりと云はれければ聞く者信玄の賢智に感服なしにける

(七十) 武田信玄命數盡て死なんことを前知しければ茫然自失するもの良久しかりけるが斯く女々しく嘆きたればとて天命は戻し難く己を得ずせめては武威を近國に振ひし我が姿形と遣さばやと佛師運阿彌を呼んで我が像を彫刻せしに日を経て成就しぬる程に我が實體と鏡に照して篤と視比べけるに似たりや似たり左も似たり所謂瓜二ツになせしが如くにしく且つ其像宛然生けるが如くなりければ信玄喜悅こと限りなく佛師には數多の金銀を與へ其後彼の像を中央に安置し諸將を招きて申されけるは我れ既に老ぬれば命數も近きにあらん切ては後世に我姿形を遣さんと像て佛師に申付け彫刻せし所既に成就せり然れば我が無き後は各々力を協せ憚勝頼を彌け武田家の隆盛を謀るべし又勝頼には老臣の輩誅むることあらば父の命と思ひ慎んで之に従ふべし必ず身を高くすること勿れと最と懇切に遺命ありしかば諸將等皆拜伏して唯落涙に及びける中に長坂跡部の兩人進み出て誠に君の御姿を後世に遺し給はんこと此の像だに在まれば君御在世も同じからん御當家萬々歳此上なしと頻に賞賛しかば真田安房守昌幸長坂跡部の兩人に向ひ

各々方は君の肖像を造らせ給ふを賞賛給ふなれど是れ大に然らず隣國の諸侯國郡を奪はれし者は今君の武威盛んなる故小笠原村上諏訪の殘黨等首と屈めて或は北條上杉等の處に身を隠し居れど甲府に變もあらむ日頃の戀憤を散さんものをと手と唾して俟つ者其數を知らず今もわれ君御病死とあらば諸國の大軍此處に乗りて押寄來るゝ必定なり然るときは我々種々の手術を廻らし防敵をす共若も敵兵亂入ば先づ此の像を鞭打んまじひに像を拵へ却て後世に恥を残すことあらんも亦測るべからず誠と益なきことと申ければ長坂跡部何と答ふる辭もなく閉口して居たりしが信玄熱々之を聞き誠に真田が申す所至極せり我れ既に病死とあらば近國の諸侯競ひ來り先づ甲府に亂入り是れころ日頃の遺恨も思ふ信玄が像なりとて必ず手足と切離し首を落さん敵の手足に掛けられんことこそ口惜けれ由なきことなしたりと太刀抜き放ち已に彼の像を切捨んず勢ひなれば昌幸之を制し暫時御待ぢあられたし可惜正像を今無解に切捨給はんことこそ本意ならず願くは某に給はらば難有しと謹んで申ければ信玄何に致すやと問はれまふ昌幸答て臣所存御座候へば何は免もぬれ賜はれたしと乞ひけるにぞ信玄も何か仔細のあるまとならんと思され然らば汝も與ふべしと其まゝ真田に賜ひける體て真田御暇と告げて此の木像と我が館に持歸り一間の閑所に引き籠り一日の後信玄拜し諸將と我が館に請待せしかば皆々何事ならんかと到り見るゝ座敷の正面に不動明王と安道し香花燈明を供し誠に生るが如くの尊像なれば皆々

拜をなし信玄公を招待するに何故不動の像を祝られしやなど呶きつ、美酒珍肴の饗應に一同大に興と催し酒既に酣に及んで信玄笑を含み昌幸は何故に不動明王の像を祝りしぞ汝が信仰せし故なるか昌幸答て君よは那を不動明王と御覽ありしや信玄大に笑ひ繩を持ち劔と携へ後よ火炎を負ふも何んぞ不動明王よあらずや昌幸笑ふて那ころ先達乞ひ受け奉り君の正像なり是れ某が工夫と以て斯くを致せしかり不審なし給ふ方々能く聞き給へ折角君の御彫刻ありし木像と打碎きて捨んぬ夫れこり君の思召を反古になすと云ふものなり斯く不動に造り直せば像も捨らず敵兵も不動なれば罰を恐れて迂濶ふは手を出すと之れあるまじ然れば君の御姿損せずして後世にまで傳はらん昌幸が捨て捨ざるは先づ斯く知しとありしかば一座の諸將皆感じ入り暫時は言句もなかりけり其後善光寺に藏め置きしかば果して天正十年の亂に織田父子并に徳川甲府へ亂入ると雖ども此像あることを知らざりしこと誠と眞田が明智と謂ふべし因て今に其像遺れりと云ふ

(七十一) 眞田安房守昌幸僅に二千餘騎を以て北條の大軍と屋布に對陣なまけるにぞ北條古備門之と見て大に笑ひ甲府勢大軍よて向ふべきに僅の小勢おて向ひけるころ淺はかなり一菟に攻破れと早々よ用意なまければ松田尾張守大に制し小敵なりとて悔るハ兵道の誠むる所なり敵の舉動を窺ひ機よ乗りて攻掛るべしと扣へたりしに眞田安房守は別府若狹伊勢崎十郎石田郡次を

とに命じて其夜陣中に明松三百ばかりと燈し那首道首徘徊致させければ北條勢之を見て驚破夜聲を掛くると覺ゆると油断となど用心してある所陣中に近づくこと二町許にして明松一時に打消ければ四邊を忽ち闇夜となり黑白も分たざるよ北條勢今や寄來るらんと待てどもく何の沙汰もなく其ま、夜は明けたりければ餘りに訝るしく思ひ夜前明松の消し邊へ人を出し見するに跡形もなく不審乍ら倍て止みぬ然るよ其翌夜又々明松と五百ばかり燈しつ、押寄せ來るの勢ひに北條勢今宵こそ攻來るぞと急ぎ用意となす所よ辨々と間近く攻來るかと思れば又も一度に消失たり斯くすること五六日に及びければ北條勢は大に心氣疲勞れ晝夜寝ること能はず心身茫然として居たりし第八日目の夜は明松も見ぬされば倍ては今宵は來らぬが帶紐解きて眠れやと前後も知らず臥したりけるに眞田が斥候此體を窺ひ濟し斯くと告げ來りしかや昌幸大に悦び敵我が籌策に乗りたるぞ今宵こそ北條勢を破るべしと先づ一方へは長根肥後守千餘騎一方へは眞田安房守昌幸千餘騎ふて山手を廻り左右二手に分れて押寄せたり北條勢は思ひも寄ぬら不意を襲はれ鯨波の聲を聞くよりも慌忙狼狽て太刀よ兵具よと云ふまよ、鎧と着けても冑なく繋ぎし馬に打乘て鞭打もありて上と下へと騒ぐ所へ鐵砲を打掛々々無二無三よ攻立れば北條勢一支へもならず我れ先きよと逃出したり大將北條氏康同氏忠大に駭き今は戦ふも益なし引けや者共と云ふ程ころあれ主討たるれども郎等之を願みず親擒にせらるれども子之を救はず我れ先きに

と敗走しければ馬も踏れ人も押れて死する者山際に押詰られ人手に掛らんよりは自害するもありて手貞討死歎知れず散々にたりて小田原まで引退きける然るに眞田方は一人も損せず敵のた捨る武器馬具旗幕指物に至るまで悉皆取納め甲府と指して悠々と凱旋なしよける

英人佛以里伯斯の言も云へらく假造の事實は必ず皮相の合宜と備ふと此言固と法律上に於て情況視察の事に就き論へるものにして其言の功恩世界無数の無辜者の情況視察の誤謬に因りて處刑にならんとする者を轉審するに至れり此言の有用なる獨り法律家のみならず兵家も於ても亦至極緊要のことなりとす若くは能く此言を服膺せば決して敵に欺あることなし試み今本章の事と就て論はんは元來夜撃と云ふものは竊なるを以て貴しとするものなれば敵陣に近寄るまでは敢て燈火も燈さず足も静り敵に耳目に觸れざらんことと務むべきものなり然るも明松を燈し連ねて如何も夜撃のあらん體に示すは是れ即ち皮相の合宜とて深く考ふる時は其假造の事實たる敢て知るに難からざる所あり又第八日目に至りて明松の見はざるは是れぞ今宵は來らぬと思はせ是れまで寝ざる疲勞に乗りて眞は夜撃を仕掛けんと巧みなること亦推知し易き所なり北條勢之と知らぬはうたてければ是れ畢竟此等の理を深く考ふる人なきに因るべしと雖も若し佛以里伯斯の言と服膺せば敢て深き考へと要せず容易く敵情を觀破るべし後の兵家も其れ夢な忽せにせせど

(七十二) 尼子伊豫守晴久尼子刑部大賀駿河に兵一萬をろへて備中經山の城を攻させらる此城も中嶋加賀守が子大炊助元行が守る處なり元行僅二百計の兵をれどもちつとも恐れず頼宮次郎左衛門鷲見九郎二郎に百姓ばら二百人うへて寺屋敷といふ地に伏れき阿部左衛門二郎鷲見五兵衛は鬼ヶ城といふ處まかくし置けり敵侮てれしよする時門を開て打て出相圖の貝をふける鬼ヶ城の伏兵後よりまはり又頼宮等百姓も番旗と立させ竹鎗をもたせ関の聲をわぐる尼子が軍兵共前後に敵有とて助け合んとすれども道細く谷深くなだれ落ちてみだれけりされども攻具を設たりかこみしに元行が母物の具の上羽折を著刀と横たへ女房二十人斗相具し元行本丸ある時は母出丸を巡り元行出丸を巡れば母本丸を守りて士卒の息を戒む或夜風雨甚まかりければ元行百人計にて夜討し出半を道に伏置たりかくて亂れ入関の聲とわけ火をかけて靜に引て返る處に敵追來れば思ひもよらぬ徑のかたへより伏兵とつと起りて敵三百騎うち取たり元行に防がれて尼子の軍引返して復攻る事なかりけり

(七十三) 東照宮今川氏眞と御不快の事起りし時兼て駿河に岡崎三郎君とやめおかせ給ひしを生害すべきよし聞ゆ石川伯耆守敷正此由聞ていとけなき御身の失れさせ給はん御介錯に侍ふ人なからん事ころ口惜けれよし敷正罷向て冥途の御供ふこと參らめとて唯一人駿府に來もむくゝる處も今川家の侍大將鶴殿が子二人生とられ氏眞なげさ給ふと聞わか君乃御外

祖關口刑部大輔と相ばかり若君返させたまはんふの鶴殿が子返しまゐらせんと望む氏眞悦てや
 がて若君を返し参らす數正肩にのせ申岡崎は歸りければ御家人はいふにや及ぶ國中の貴賤御ひ
 らひも参りつとて感ぜぬものこそなかりけれ三方原合戦の時數正は信長の加勢として遠州に
 向ひけるが武田おしよすると聞とつて返す美濃の守護土岐家も有といふ淺岡の某弓筋ととりて
 さるふる兵と聞えしかば彼が許に行此度本國に歸りなむ必うち死仕るべし數正弓筋をとり
 打物とりてゐたのとく軍もあふ事度となり然ども軍も臨むの日牒の緒むすむん機故實ある事と
 承りていまだ學候はずされば死後に牒の緒とせらる骨法しらざりしとかたきに笑れ候なん事骸
 の上の恥辱にて候へば效を奉り度ころとて習ひ傳へ夜を日につぎて馳下り味方原の軍にも殊
 にすぐれて武勇をふるひたりけり其後太閤に狀れ岡崎の城を出て上方に登り豊臣家に奉公す
 太閤和泉をわたへ武者奉行と命せられぬ數正徳川家累代の君恩に叛き一生の忠節武功を空しく
 す血氣既に衰ふる時は是と戒る事得にありといへる聖人の言しらざりけるまそなたてけれ
 (七十四) 東照宮三河の一の宮の城も本多百助信俊守りにかかせ給ふ永祿七年五月今川氏實
 二萬餘の兵を以てかまされけり其中八千を引わかちて武田信虎を大將として後卷の防にせられ
 ぬ 東照宮かくと聞し召早うち立て一騎がけふ馳むらひたまはんと見せしかば敵は味方に比ぶ
 れば十倍もわらん殊に信虎の聞ゆる勇將も候と老臣ども諫けれとも其理の然るべからんされ

世も人は貴賤にもよらし信義の二ツによりてこそ身とたつるならひなれ敵の城攻おとし其ま
 揃すてなばさもわらんと既味方を入おきて今さら敵大軍をればとて驚くべさや主の大事は從
 者が救け從者の危難は主のたすくるを弓箭とる道なり今は後詰り打まけ屍を戰場に曝すとも運
 の盡ぬる所也と仰ければ是を聞八々あはれ頼もしき大將かな此殿の御爲にはいのちすてん事露
 ちり計を惜からじといさみす、む其勢に乗て二千計の兵よて後づめみ打向はせ給ひ信虎乃八
 千にてひかへたるをよそに見て眺直ふ城ぎはにれしつけ給ふ城中きそひ悦ぶ事限なし氏眞さら
 を四方を取圍で一人もあまさず討とらんと評定する其間に 東照宮は百助を召具し給ひ城を出
 て引返したまふ百助今日の戦は身よかけてはげむべく候とて手の者四百餘をもて信虎の軍ふか
 け合せ打破りて利を得たり酒井左衛門尉忠次石川伯耆守數正牧野右馬允康成は後殿とある追か
 くるほどならは 忽切くつすへき色あらはれて見ければ氏眞も進み得す 東照宮事なく歸陣
 せさせたまへり此廿二歳の御時なり

(七十五) 永祿八年三好義繼松永久秀大和河内より京に打入五月十九日辰の刻光源院殿の館を
 かこみ亂れ入けれバ防ぐ者ども或は討れ或は自害す沼田上野介と福阿彌といふ者敵の相じるし
 竹の葉を腰に挿て外よりまぎれ入光源院殿の御前にまわりわれ等二人を始として防ぎ箭仕り思
 ふほど戦候はん其間日比愛せさせ給ふ早足の御馬に召れ東川原にかけ出させたまは、御運を

ひらかせ給ふべきと涙を流し申ければ尤忠義の志神妙も申つるよされども汝等討死したる後に残りてまざるべきやとて散々に防戦ひて遂に自害有ける其きりに「五月雨は露か涙かほととぎすわか名をわけよ雲の上まで」自ら筆を把て書残し給ひけるとぞ光源院殿の弟は鹿苑寺の周高といふ有しが平田和泉守といふ者迎に遣はれ北山より出たる道にて討とりしに供せし十三四の童忽にかの平田と討とりければ世の人ほめあへり

是釋の義俊光源院殿と追善和歌の序に見えて扶桑拾葉に見えたりされども童の名見はず後に信長記を見しは此人の姓名をしるせり小川の住人美濃屋小四郎とて容貌世に勝れしが供したりしに此變にあひて三條吉則の刀を拙て和泉の首を打落し手もとにす、む者五六人切ふせて腹切て死せしよし見ゆ

(七十六) 三好修理大夫長慶の細川續岐守持隆の臣あり三好は其先甲斐の源氏小笠原の族にて信州に住せしが三好長房の阿波の守護として世々阿波に有京都と攻上り細川晴元み代りて五畿内の事を執る第二の弟豊後守之長と稱す其弟安宅攝津守冬康其弟十河一存といふ天文二十一年實休持隆を弑し其後室と已が妾と惡逆と恣ます永祿五年佐々木義彌京と攻上りしかば高松院殿は八幡に在て防給ふ畠山尾張守高政佐々木にくみじ紀州より泉州にうち出るにより實休阿波より渡海し岸和田東久米田に陣す久米田寺に橋諸兄公の墓あり實休墓を堀石の郭ととり出

す聞人眉をひろめずといふ事なし三月五日高政兵をわからし先陣を頼が原にれし出す實休山上より見おろし自眞先進で高政が先陣と打破る檜木山に伏たきたる高政の兵に根來法師相加里不意に切てる、り三木内匠一番鎗を合せ實休が先陣敗北しけり實休は將机に腰かけて引な者共と下知し散々に戦ひ残り少く討れしかば實休をば根來左京打とりたり高政大に利を得河内におし入此時長慶が籠りし飯盛の城をかこみ攻る冬康兄の吊軍を志し且長慶を救ふ爲岸和田と打出高政も藤井寺の南葉引野ふて軍あり冬康勝利を得たり實休討死の刀は光忠が作也信長光忠の刀を好二十五腰まで集られしが堺にて第一の好事木津屋といへる商家よかの光忠の刀を残りず見せて此中實休光忠や有と問る、に一腰とり出して是ならんといふ信長何とて見しりたるやと問る、よ切先の少缺て候は實休打死の時根來左京と剗られしよすねめては當てかけたると承り候と申けれと信長よくしりたりといはれしとぞ

實休討死の時長慶は飯盛まで連歌せしに告來る○す、きにましる芦の一むらといふ句人々附わづらひたりし其書を披てどかくをいはずさしおき○古沼のあさきかたより野となりてと附終てさて實休打死なりと告來れり今日の連歌是にて止へしとてさて兵を出されしとなり信長都に攻上るに及て松永の降参し三好長慶が養嗣義繼は河内にて自害し三好の家滅亡せり一説實休は泉州岸和田に安宅攝津守冬康と守らしめたり畠山高政は紀伊國廣浦といへる所に

流落の体なりしが熊野根來寺の法師をかり催し岸和田へおしよする實休後卷せんとて渡海し
 堺の津にて勢揃せり高政岸和田を攻んとする兵を城の上なる山に引とり城を見えろしたり四
 國の兵は篠原右京進長房一宮長門守成助等岸和田の大手を陣し實休旗本は久米田に有しに高
 政が陣と見て高政は東とさして引退くと覺ゆ遙々爰に來て討もらさん事口惜き事なり山上へ
 おしりけて一騎もあますまじと下知するを攝州高槻の城主入江左近大夫搦田采女正二八京よ
 りの使と来て來り居しが敵を小勢なりと見て左のたまひ候へど今己の時なり高政軍配よし味
 方の爲には大凶なり唯今の、らば十に十敗北すべし暫時を移ま東の谷より二手にてあひし
 らひ午の時に及て軍をす、もるか又敵と南山へそびき出すか此二の間は過じといへば實休心
 安かれ時と過さば敵に利有べし切ての、りなばある山を尾傳ひに東北に下るべし左なく
 ば南へ下り右の尾ささへ引とるべし入江搦田二手に兵少ければ篠原をさしとへなん打つれて
 伏兵になられよと高政夢にも知らずして東北の道に出なんを待かけて討は安かりなん高政若
 物見を出して見付るほどなら南の山に登り横合に突か、られよ高政の籠中の鳥也とて二人
 の詞を用ひず入江等東北の山ぎはに道で待居たり實休は篠原が兵をもて高政を誘せけるに長
 房いさみか、りて進みゆく上の山より根來法師成田玄齊雜賀孫市に實休旗本僅にみゆ左へま
 はりて切てか、り勝敗と一時に決すべし阿讃淡の三國の兵を引請て一手立なくのあらじもし

實休をうちもらさむともよ戦死をべまといへば孫子細にや及ぶとて山と下り立異一文字に實
 休旗本にれしか、り忽實休と鎧たまにわけて討とりたり搦田等は敵をまてども見へざれを
 いかにも思ひ物見と出す所に實休討死を告來るさら高政が陣と切て入討死せよとてかけ向
 ひけるに勝にのりたる敵をかさに受搦田も討死せけれを殘る兵ども堺をさして敗北しけりこ
 れ永祿五年壬戌三月五日久米田合戦にて實休三十六歳なりといへり
 (七十七) 毛利元就豊前門司の城のかたみと解て引返されし時大友宗麟の士大將瀧田民部只一
 騎波うち際に馳來る小早川隆景の士浦兵部宗勝船とさしもどし陸よわがり瀧田を討とりて歸る
 遠く是を見る人誰ならんといふに元就只一人陸よわがりたらむ必兵部なるべしといはれしに果
 してたがはざりけり井上伯耆と浦と二人勇名世に高し二人ともちぎれたる物の具をきたり又定
 りたる得道具もあく瀧田を討し時も人の鎧をとりて返せしとぞ
 (七十八) 佐々木と三好と軍す佐々木は亂に陣し三好は赤山に有三好使を以て中村新兵衛とい
 ふ剛の者ありわれと思はん人わらば出されよ人ませもせで戦はせんといひしがは佐々木が内に
 て江州にかくれなき永原安藝守といふ者をすげり出す修覺寺村石地藏の前に出あひて永原は直
 鎗中村は十文字の鎗にて散々に戦ひけるが永原を突伏首をとる中村は近江國の人なり一日に鎗
 を合する事十七度首四十一級を得たる事有けれを世に鎗中村と稱しけり

永原を討とりし時室町將軍靈陽院殿義昭江州矢島にて是を聞き召感状に朱塗の具朱柄の鎧を
そへて給りけるといへり一説に攝州を半分領しける松山源介が士にて唐冠金縷の甲をきたり
と云ふ

(七十八) 相摸の深澤の軍に北條家の先陣の大將北條左衛門大夫綱成敗北してすてたる旗とい
ろひ取て譏りけるを信玄聞て逃走してきたなく棄たるよ非じ必地利をはかりて戦と心がけたるな
らん旗を棄しは旗さしの罪なりいかでか嘲りまらふべきとて眞田一徳齋が末子の源次郎に左衛
門大夫が武勇あやかれとてかの旗をあたへられけり練絹三幅くら葉地黄にて八幡といふ二字
と染たる物よて世も地黄八幡としなへしなり左衛門大夫かくと傳聞て信玄の詞よて恥辱を雪た
りと悦けり是信玄遠き慮ありてのくはいはれしなり左衛門大夫ハ其比すぐれたる勇將なれ
ば嘲りわらはるゝと聞て必死の軍するならを其鋒支がたしと察せられて其憤を散せん爲と
ぞ

(八十) 永祿十二年佐々木承禎柴田勝家が守る所の長光寺の城とこみて攻る途に惣がまへ
を打破る勝家本丸よ有て爰を専途と防戦ふ郷民佐々木が陣にゆきて此城ハ水の手遠く遙なる所
より水ととり候うれととり切る程ならば城は保つべからすと告しらせければ承禎悦て水の手と
とり切たり城中是に困めをもよわれる色とあらはさす承禎これと見ん爲に和平せんとて平井甚
介を使にして城中に入たり平井勝家に對面し手水と請紅み水みちたるを小性兩人してかき出た
るに平井手を洗ければ小性残れる水を庭にすてたり平井歸てあくと云ば事のたがひたる故にわ
やまみあへりかくて城中既よ水竭ければ勝家明日は討て出切死よせんとて諸士をあつめ最期の
酒宴す残れる水を問へば二斛計入べき缸をかき出すさらば此間の渴をやめよとて人々汲のみて
ければ勝家眉尖刀の石づきにて缸を碎たり夜明方に門を開打て出る佐々木思ひもよらざれば大
に敗北しければ勝家首八百餘級を得て岐阜ふ献す勝家は僧長光寺にあり信長感状をわたへ賞
せらるゝ事大方ならず是より勝家を缸わり柴田と世に稱しけり

(八十一) 信長勝家をもて先陣の大將とす勝家固く辞すれども再三しひて後仰を承りぬとて
退出する時安土の城下にて信長の旗本の士に遭たりしに行わたり勝家無禮とせめて遂に切て
すてたりければ信長怒られけり其時勝家謹で申けるはさればこそ先陣とば是非とも辭し申た
るなれ子細なくて辭申べきや先陣の大將たる者威權なき時ハ下知行はれざる物なりいかにと
へば信長詞なかりけり

(八十二) 三好家滅し時料理庖丁の上手と聞にし坪内何がしといへる者生せりとありしが放じ
囚よして有しに年経て後菅谷九右衛門に賄申ける市原五右衛門坪内は鶴鯉の庖丁は云にも
及ばず七五三の饗膳の儀式よくしれる者なり其上子ども兩人は既よ奉公申候へばゆるされ候て

厨の事を司らせ申さんといひけるを信長聞て明朝の料理させよ其搦梅よりなりしかば
則坪内をして膳を出させけるを信長食して水くさくわねざるよそれ誅せよと怒られし
ば坪内畏承候今一度仕らんそれにて御心に應ぜずば腹切んと云へば信長許容せられけ
りさてその翌日膳を出しけるに味のうまき事殊の外によりければ信長悦て祿あたへられけり
坪内辱き由申てさて昨日の搦梅を三好家の風なりけさの搦梅は第三番の搦梅なり三好家の長
輝より五代公方家の事をとり日本國の政をとりはからひぬれば何事もいやしからず其好む所
第一等の搦梅を昨日奉りければいやしみ給ふ事ことわりありけさの風味は野鄙なるおなか風
て候へを御こゝろに入たるなりといひければ聞人信長に恥辱をあたへたる坪内が詞也といひあ
へり

(八十三) 永祿十二年四月 東照宮濱松に歸らせ給ふ時

あれい今川氏實を武田信玄攻落し氏具とき山の山家に引籠りけるを 東照宮父義元のよしみゆ
ゑに遠江をば徳川家よりとさひべし信玄にとられたるよりいさざるべきなりさらむ小田原と
相ばかりて兩旗にて信玄と軍すべきと氏具に仰られしを 忝 由申て掛川の城を徳川家
わたし氏政信玄薩埵山にて對陣足輕せり合有 東照宮の先陣駿河へ攻入山縣三郎兵衛を退か
としければ信玄前後よりとさまれて勝利有まじきを計て甲州へ兵と返されけるゆゑ 東照

宮も御歸陣なり

堀川の城と打過させ給ふ時大澤左衛門尉

これより前永祿十一年 東照宮遠江と過半治め給ひし時降参しけるものなり

が手の者ども去年よりれちぶれたる面々相計り尾藤主膳村山修理兩人と大將にして堀川にひそ
かに一揆をかまへ通らせ給ふと待かけて討奉んとしたくしけるにそれをしるしめさずして七騎
よて打過させ給ひぬ一揆どもあまりに騎馬の少かりけれをくともしらず其あとより石川伯耆
守敷正通りけるを見てさては先通らせられしよやたやそく討べき物と悔みけるこそ創業の
人君天の佑おはしけるを覺へたり其後堀川の一揆と攻らるゝに此城潮のさしたる時は船の出入
自由なるに折しも引潮にて唯一方口の城なりしかば落べきかたなく皆討とられけり

(八十四) 永祿十二年尾張の清洲にて 東照宮信長と始て御對面の時他の刀持たる士式臺と

めたるに植村庄左衛門家政御刀を持て通らんとすこれをもかしたと云むれば徳川家の士に誰が下
知にて止るやといひすて、おしとほり御前の白洲と参りたるを信長見て何者かと問ふよ東
照宮わが士にて候と答給ふ信長植村は聞ゆる勇士也今日の會は大事に非ず心安かるべしあつ
れよき士あまた候とぞ感せられける庄左衛門後出羽守といふ

植村古史に通ずる者なりせば客は何爲の者ぞよ問はれし時徳川の臣植村家政と申す者聊る刻

と舞して一笑を助けんと云ひるべく信長も亦本日の會は古への鴻門の會にわらず安んぞ項伯を用ぬんと云はるべきに兩者共此言なきは風致なきこと、謂はざるを得ず昔し玄徳曹操が會せる場所へ關羽張飛二人の行きにし時の即ち此語ありて曹操は二樊増酒肴を給へて斗卮の酒を與へて大風致と添ひよけるき斯ることは固より贅事として用なきことなれども此勢ひにまて彼語なきは實に遺憾と謂ふべし

(八十五) 永祿十二年信長伊勢の國司北畠中納言具教を大河内の城に攻め敗れ城を離れて城強くしてちつともひるまき信長織田掃部介を使ひして信雄を以て具教の子具房の養子として和平すべしといはせられしかば人質ととるも同じとて和平事なりぬ信長岐阜より歸り二男茶茶丸十二歳なりしが士あまたつけて伊勢に行大河内に至りて國司に對面し船江にあり具教は世を具房に譲りて三瀬といふ所に閑居せられしが尙信長も眷く志ありければ信長國司の家者共をかたらひ天正四年十一月廿五日三瀬にて殺しけり具房の信雄の養父なれを河内にたしこめて置けるが天正六年に死去其元祖親房卿より具房に至りて十世に及ぶとなん具教の弟南都東門院の住僧なりけるが具教殺せられけるを聞南都を出て伊賀に赴き還俗して北畠具親と稱し三瀬河股多藝小梨の諸士とかたらひ仇と報せんとすれども利なくして中國に流落し毛利家とたのむ備後の鞆に居たりけり具親兵を起す時天正六年信雄の兵波瀨峯の城を攻めとす六呂木山副波多瀬三郎此三人を生

どりたりければ死罪すべきと議せられしに三郎が容貌世にすぐれしかば信雄たすくべしといはれしを三郎聞て三人同じく生ざられ罪又相同じ二人死して一人たすかる事而目なし共に誅せられ候へといふ二人は年老ぬ惜むべき身に非ず三郎の仰に従ひ候へとす、むれども聞入す遂に三人共に磔よかけらる、時に三人君の御爲に命をすつる事士の思ひ出面目これに過る事無しとて諸をうたひ物語して誅せられけり三郎此時十五歳をしまぬ人なかりしといへり玉井新次郎といふ者具親の心を合せ信雄に背しが父兵部少輔と母とも神戸にあり居たりしを捜出して櫛田河原にて磔よせらる兵部少輔子の新次郎を呼て汝今度君の御仇と報北畠の家と興んと志しける事士の本意吾生前の悦なりとて水を乞て父子三人盃をくみかはして其後殺されしとぞ織田家の刑罰仁者の道にあらず其暴逆終と令せざる事尤ことばりなり

(八十六) 永祿十二年今川氏眞遠州掛川の城没落の時天王山ふて合戦に大久保治右衛門忠佐敵をつき伏羽の新十郎忠隣に其首とりて汝が功名よせよと呼りければ忠隣十七歳なるが人のくればる首何にかすべきとて敵の中にかりて首ととる笑形原よて諸軍散亂して 東照宮につき奉る人少かりしに御側とはなれず後は歩立にて御供しけるは小栗忠藏敵の馬をとり來てそれに乘れと仰有て其馬に乗て御供しけり後相摸守と申せしは此人なり

(八十七) 遠州にての事なりしがいつれの時の軍みや 東照宮の御内よ高木主水清秀村越與三

左衛門とて聞ゆる兵二人味方にはなれ細なはてをしつくと引退く處に敵十騎計追來る高木鎗
おつとり直し一足も引まじさぞと呼る村越弓に箭とつがひ鎗わきを射ん心づよく鎗をせよとい
ひけれバ敵しらむゆる兩人又引退くかくする事數度及べりかくて左右沼にて一騎うちの地よ
なりてこゝぞよき所といふはせこそわれ高木ふみ留り先かけたる敵をつき伏れバ村越大音あげ
其首どれといふまゝ一敵一人射倒す敵ひるむ所を高木いさみ進で又一人つき伏ければ村越も又
一人射倒てそれより追ざれば心しつかに引とりけり

清秀は水野下野守信元に屬せし時三州柿屋の戦に度々功名あり後 徳川家に仕水野も屬せし
時石が瀕といふ所にて三河の兵と鎗を合する事一日に七度石川伯耆守十七歳にて内記といひ
しが互に名のりて鎗を合せ相引ましたりけり長久手の軍には清秀内藤四郎左衛門武者奉行た
りき清秀老年の後關が原の時隠居せしが野州小山へ参りければ度々の功名を仰られ 台徳院
殿錦の御羽折を賜はりけるとぞ戰國の時も一日に數度の鎗は罕ある事なり高天神小笠原與八
郎が士林平六郎遠州豆大寺にて六度鎗と合せ信玄伊豆薙山と放火し山縣をたさへに置れしよ
城兵打て出引とり口に三河の浪人河村傳兵衛白四方に船の字のさし物にて敵を追ちらし鎗と
合する事一日に六度といへり

(八十八) 太田三樂が内よ太田下野といふ士よく人を諷る其詞たがりざりしがば三樂いかなる

故不と問下野別の子細も候はきたとへば連歌する者の古歌を覺候はわぬ連歌の益にせんとたり
士の功名を志す者も又しかなり其人々の嗜好所よりて察候へば十に八九はたがひ候のぬも
のなりと不答ける

(八十九) 北條丹後一尺四方の白練に黒き蟻を繪に書て指物にしけるを謙信見て汝がさし物あ
まりに小きはいかなる子細と問る、よ丹後誠に味方より見ながたく候べしさはあれども進
むに先がけし退くもいつも後殿せんに他人の大なる指物も此小四半と敵の見る所は同じからん
と存るなりと申をば謙信ことわりなりといはれしとぞ

新奇絶妙の指物其理由解き得て妙なり獨り謙信のみならず誰か感ぜざる者あるべき評註者の
如きは幼時之を一讀して感餘り今又記臆して忘れず却て其大なる物を書さし指物は之を忘れ
てすも留めざるに至れり

(九十) 淺井備前守長政玉淵川をかざりて齋藤龍興と軍すある時長政五百計の兵をすぐり關原
野上の宿火をのけ樽井の前なる小川に柵の木もひて待かけたり龍興一萬計にて出ると長政聞
て百人計を菩提の徑より敵の後へまはらせ自四百計を以て敵のこたたるを夜討にしたりけり徑
よりの兵もはせ來り思ひもよらぬ所より鬨の聲をあげしを龍興内通の者あるよと思ひあはて
、駿阜にひき返す長政大垣の邊所々火をかけさせければ龍興敵勝よ乘て大垣を攻るならん

きたすけよとて岐阜を出しかば長政やがて引返す時足輕の物になれたるを三十人御井の土民の
家にかくしたり龍興御井よ入て士卒も疲しかば兵糧つかふてれたりける時かくしたる足輕と
も所々に火とかけて焼たつる長政思ひもよらぬ所へたしよせて散々にうち破りやがて南宮山よ
登りて敵をまつ龍興二度まで敗北し口をしく思て四面をとり巻てあまさすうたんどかし寄たり
長政見て敵は大軍なり十死一生の戦とは是なるべしわが下知なき内は箭の一筋も射べからずと
いひて攻め、るを待て山の上より一文字に切てか、れば龍興大に敗軍し是より長政を恐れ復
軍する事無りけり

(九十一) 丸毛兵庫助長住其子三郎兵衛長隆龍興よ奉公して美濃の多藝郡大塚の城に有安藤伊
賀守氏家常陸介龍興に叛て大塚にかし寄る兵庫父子三百計大塚より一里あまり出て陣し城近き
百姓老若男女をいはすかり催し手々よ竹竿をもたせ大軍の体にもてなしつひに氏家を撃破りし
かは安藤等も又龍興よ降参し丸毛父子に祿増し威張をあたへられけり

(九十二) 信玄駿河に攻入時朝比奈兵衛を始として軍する者なく今川氏實落られしるば信玄と
く今川の館に馳行て名物の寶ものども奪どり來れと下知らせらる馬場美濃守氏房聞もあへず唯一
騎鞭に鎧を合て館よかけ入火をかけて焼はらひけり是寶物ども奪どりて貪欲の師なりと嘲れん
事を慮りたるなるべし

(九十三) 元龜元年の春大友左衛門督義領肥前の龍造寺山城守隆信とうつ隆信和を乞しかば大
友兵よ加へず肥前と筑後の堺に千栗といへる大川あり吉岡下總入道宗観といふ者龍造寺へ大敵
なり勝負もわかれず故なく和を乞しは謀あるべし千栗をわたらん事たやすからじといへば義領
も尤なりとて豊後乃留守に置たる佐伯紀伊守惟教其子彈正少彌惟實田原近江入道詔恩を呼寄六
千の兵よ二陣として千栗の渡に備へて川よわたる産信たばかりて敵の引退ん所よ不意に撃ん
と謀しに大友の設有事と聞て退ざりしとなり

(九十四) 元龜元年六月信長朝倉をうつて龍が鼻に陣す 東照宮援兵の爲廿四日江北に御陣
評定の時信長鎧を持出て此鎧を鎧西八郎の鍔なり徳川殿は源氏なればまねらせ候明日の軍に勝
利候へといはれけり今の虎の皮なげさやの御鎧是なり

(九十五) 姉川の軍に信長は龍が鼻山を左よして淺井長政に向はる 東照宮は龍が鼻と右にし
て朝倉が二萬あまりふ向せ給ふ時小笠原與八郎氏助二千計先陣に進で川を渉る氏助が兵伏木久
内中山是非之助吉原又兵衛林平六伊達與兵衛門奈左近右衛門渡邊金大夫照七人鎧を合する中に
も渡邊は朱の傘に金の短冊十八つけたるさし物をさし堤の上よ進む信長見て其夜召出して天下
の鎧なりといふ感狀に眞宗の刀を添てあたへらる殘る六人の者共憤て各鎧す、むる鎧を合
せしかども島の中なりし故見とめられず候と申ければ六人共信長感狀をあたへらる

(九十六) 姉川にて酒井右衛門尉忠次先陣たり二陣は榊原康政也酒井と始小笠原與八郎菅沼新八郎與平等川を涉てか、りける岸高く上りかねたる故に榊原眞一文字にすゝむで上りがたき峯を無二無三よかし揚よとるいとらうくといひておしあがり酒井が先よすゝまんとするを見て酒井が兵れくれては無念なりと競のりて和と得たり 東照宮榊原が二の手のしめた以來の手本也二の手はかくのおどくしたくこそと仰ありけり

(九十七) 姉川の戦ふ坂井右近が子久藏十六歳にて討死す久藏は十二の時信長始て京あ入し比近江北郡よて鎗を合せたる剛の者也三井角右衛門生瀬平右衛門二人とも久藏が首を得たりといふ二人後關白秀次に仕へければ此事沙汰ありて三井がいつはりなりとて鷹部屋よかしてめおきて罪に 行れんとす三井のちを惜むに非老人の功名と盗たる悪名の子孫の恥とならん事口をしければ今一度詮議してたまはり候へ證據は淺見藤右衛門に問れなば實否正しかるべまといひたり淺見を安土より呼れけり淺見は生瀬と久しき友なり三井とは日比中よからず不通なれば疑もなく三井がいつはりよ定るべし三井感亂して淺見を證人にしたりと誹笑ふ人多くさて聚樂の廣間よ奉行列坐して雀部淡路守よもて尋問る淺見承り生瀬は年おろの知音あり三井とは不通にて候是非世の人の評せん事も迷惑なり他人に仰付られよと 懇に辞し申す中よらぬ三井が虚妄をいふに心よからぬは理なれとも證人にひきたる上はとく申せと勸らるれども猶辭し申す

秀次聞て重て辭すべからずとなりければ其時淺見今は己事を得ず候武義の論少も詐偽候まじ坂井が首は三井がとりたるにまされなく又其はたらきも比類少く候生瀬は何と存過たるにやといひければ一坐 駭てどかくいふ人なくこれよよりて三井を赦て賞せらる生瀬は秀次よ寵せらる、の故に罪に及ばす右近は信長の大将なり三井生瀬は朝倉淺井兩家の士なり淺見は後京極高次よ仕へて大津の城よて武名よあらはしけり

(九十八) 信長淺井長政ようつ時長政が木造の陣俄にさわぐ体のみえしかば猪子兵助を物見にやられけるが又金松彌五右衛門よも出されけり猪子馬よ白あわかませて馳歸り敵は引退候といひもはてぬに金松乗歸り敵にしよせ候といひすて、又先陣にゆいて鎗を合せたり信長後よ二人よ呼て汝等見し所はいかにと問るゝに猪子敵は荷つけたる馬を遙に遠く引のけ候ほよ引退くと見て候と申金松承り見る處を猪子に同じく候されども軍よ志候長政ゆになくして空しく退べきやれしよせて戦はん爲と存じ候ひきと申せしかば信長大よほめられけり

(九十九) 信長越前に攻入時朝倉義景二萬計の兵にて刀根山といふ大山に陣どり麓に信長の先陣ひかへ居たりある日信長井樓に上り敵を見わたし敵は今夜必引退くべし先陣の者共なれこれりそと使を度々やりて下知せらる是を聞て殿といひてかくは仰候やらん敵大軍よて山に據り地の利よ得て且主戦なれば何條引退べきとあやみけり夜に入ても信長は猶井樓に在て敵陣を睨

で目もはなたずして有し、丑の刻ばかりにすはや敵はひくぞといふは冬こそあれ螺ふきたてさせ馬に乗先陣の大ぬる山のやつをらがゆだんまたる、旗本の者ども功名せよとて眞一文字にす、まれしが果して先陣へかくれて信長の旗本よて勝利と得られけり信長常にこれたる者を大ぬる山とてわらこれしとぞ

(百) 上杉の舊臣上野の長野信濃守業正、百五中將業平の後胤なりといへり世々上野箕輪に在、此城は大名明神の山の尾崎ととりて城の郭とす郭の形箕の手より似たりとて箕輪といふ上杉家衰、けれども獨立えて武威をふるひ信玄に屬せず信玄これを攻ること五年終、一度もたくれとらず病の後二年を経て落城すといへり

(百一) 元龜三年信玄參河遠江軍を出し二股の城をとり巻水の手をとり切ければ中根平左衛門力の限り支へけれども竟にのなはで城落たりけり信玄それより箕形原に軍をす、む濱松には織田家の加勢も有と信玄聞てはるく來て客戦はすまじきとてたさへをおくべきやといふ處に三河武者城をおし出すと聞ければさらば一戦に及べしと備くばり有濱松の軍兵日既に暮なんとすれどもいさみかゝりて一軍すべしと口々に申す鳥井四郎左衛門物見して乗歸り人といかよ申候とも今日の御合戦は然るべからず敵は大军あり先陣に使をやり兵をあげさせ給へもし是非御一戦とならば敵はつたの郷へおしゆのん處をしたひてか、らせな給へと申す 東照宮聞し召

汝の用にも立べき者と思てけふの物見よりたりたるに何とておくれたるや目前に敵をためくくと通してわ生がひもなしと怒らせ給ふ四郎左衛門承り目のあきたる故にこそ勝敗の利害をば見きはめて申候へ御敗軍をしろし召御かゝりあらんは殿の御心の儘なるべきなり勝敗の道と知ぬ人こそたくれ者よと以ての外罵りそことつと乗出し成瀬藤藏と尋けるに功名したりと聞即はれなる討死したりけり

味方原の前夜手わけを定らるゝ時成瀬と鳥井と先後を争ふ事有て既、刺ちがへて死すべき色あらはれしをかたへの人とれしとまめたるよ鳥井成瀬も向ひて明日信玄と一戦あるべきなり織田家の援兵も來りぬ士一人も大切の時なるに私の争論して死ん、不忠ならずや二人共死して殿損かけ奉らんより明日の軍に功名くらへして討死せんはいかに成瀬につことわらひいしくも申されたる哉われも左こそ思へ明日討死せんいざとて酒くみかはし深更に及べり東照宮これをしらせ給はで成瀬の信長の加勢の目付としてあら井本坂に向ふべし鳥井は濱松先陣の目付せよとぞ仰られける二人は必死を期したれば鳥井も一所に有二騎先かけて二萬餘の敵に馳向ふ鳥井冑首三ツとりて成瀬も首三ツとりて行わひ共に打わらひて首をば抛すて又かけ向ふ鳥井又首とりて成瀬ととへば只今山縣が陣にかけ入て討死し敵其首ととりたりといふを聞て成瀬ふ先だれしよ汝はとく歸りて朋輩にかたり候へと從者にいひすて信玄の旗本

をさえてかけ入らんとせしと土屋右衛門が手の者どもとりかこみけり鳥井はすぐれてたくま
しき剛の者よて三尺餘りの野太刀を打ふり死狂に切て廻る土屋が胃を破よくだけよと斬たり
けるよ目眩て馬より落る多兵四方より鎗すくめにして鳥井をうちとりたり敵も味方もおしな
べて惜みあへり

渡邊半藏守綱も物見して馳歸り是も味方中々危く候先陣をよび返させ給へと申すされども壯士
等いさゝか、りて柴田七九郎大久保治右衛門す、みゆくを半藏ひらよ止れといへども聞入らず甲
斐の先陣小山田に向て足輕をかくる軍始りて先陣亂れ足になりければ石川伯耆守敷正馬より
下りたち鎗を提げ一足も引まじと叫り一陣の士卒名折しきて鎗ぶすまを作り待かけたり甲斐の
兵競かゝると近くと引受一同に立ちあがりゑいゝと聲をあげて追かへす外山小作一番鎗を合せ
たり日暮ければ甲斐の大軍進みかゝる東照宮御旗本とひきかて切てかゝらせ給へる遠江の山
家三方小山田追立られ敗れけり申の刻より軍始りて夜ふくるまでの軍に兼勢支がたくて崩れた
りしに榊原は東の方西島も向て引退く信長の侍大將平手汎秀はいなといふ所にて返合せ討死
す鳥井四郎右衛門と始として河澄源五郎長谷川紀伊守加藤二郎九郎等逞兵三百餘人討れ敵しき
りに追來る本多肥後守忠直後殿して敵近付ばとつて返し遂に討死す甲斐の士大將秋山伯耆守晴
近透間なく追かけ來り御馬まはり残り勢くなりしかば東照宮御馬をひきかへさせられし時夏

目次郎左衛門吉信こゝわ御討死の時よては候はずと申て御馬の口を濱松の方へひき向鎗をとり
直し御馬のさんづをたゝみかけてたゝきければ御馬かけ出ぬ夏目ふみ止り多勢よとりまかれ鎗
の柄の折る、計は戦て討死す

夏目は濱松の御留守なりしが矢倉より軍の様と見ていそぎ馳参りしく御城も歸らせ給へと申
せども吾城下に於て打まけなばいのち生て何にかせんとて御馬副の者に口をとなせと仰られ
しと吉信御馬の口をばなしそとかたく下知し馬より飛下り御諱をたまはり候へ討死仕るべし
とて御馬に付たる畔柳助九郎に下知して御馬を御城の方にひきむけさせ鎗の柄もて御馬のさ
んづとたゝき取て返し十文字の鎗にて追くる敵を支て討死せけるともいへり是より前三河一
向宗一揆の時彼宗門と信する人々ひしゝと相あつまり櫻井の松平監物上野の酒井將監大草
の松平七郎もくみしけり中にも夏目次郎左衛門は一族も多かりけるが彼宗門に徒黨して己が
知行所よ要害をかまへたてこもりしを松平主殿助伊忠不意にたしよせ木戸と打破り攻入しか
を夏目防ぎかね帑藏の中にかくれ入たるを殺すは籠の中の鳥と殺すも似たりたすけてこうと
仰有主殿うち殺して後申べき物をといひながら人数と引とりぬ夏目岡崎の方をふし拜みかゝ
る仁愛ふかき殿も楯つきし事の悔さよとて其日より宗門の本尊の前に参りて殿の御爲にいの
ちをすてさせ給はれといのりけるが果して義死をとげにけり又一説に夏目大津半右衛門同伊

織乙部八兵衛等六千餘額田郡野田のふる城にたて籠りけるに深溝の城より松平主殿助伊忠是
と攻る乙部はもとより一向宗に非れども夏目と無二の知音たる故同じくこもりしか遂にゆる
すべからざる事を察し夏目をたすけん爲に久留善四郎と相はあり伊忠に内通し奇手と引入し
かば半右衛門は針崎へおち行夏目ハ藏の中にかくれしを乙部夏目と助け候へと伊忠に乞ふ乙
部が朋友とすてざる事と伊忠感じ夏目も又武功有し者ゆる藏をとりまきて此旨をなげき申け
れば御赦ありけり夏目愚にして一揆にくみせしとを後悔を藏より出て伊忠に降参えけるとも
いへり

氷野左近太夫もひきさがり支へけれども敵猶きろひゐ、れば又御馬をひき返させ給ふ成瀬吉右
衛門日下部兵右衛門小栗忠藏島田治兵衛歩だちにて御供す敵六七騎す、み來るを成瀬一騎切て
落し御馬とかへさせ給へを六騎は追とまりぬ大久保新十郎忠隣御馬のかたへをはなれ奉らず
大久保七郎右衛門忠世さいがけの邊に御旗とおし立敗軍の味方をあつひる其ひまに濱松に引と
らせ給ひけり敵城近くおし寄れば鳥居彦右衛門元忠玄黙口より討て出相戦ふ渡邊半藏兄弟勝屋
甚五兵衛櫻井庄之介名のりかけて鎗を入敵五人討とりおしか、る敵を追はらふ石川伯耆守と大
久保七郎右衛門と相のかり鉄砲とつるべばなしにうちたてさすればつめ寄たる敵も皆引返す味
方渡はてけるに天野三郎兵衛大久保七郎右衛門と心と合せ敗軍の中を求めて鉄砲只十六挺あり

しと引具し信玄ハ陣さいがけに向てうちかけしかを甲斐の軍夜合戦よか、るかとおはて、く
らさばくらし案内はしらすさいがかけへ落る者其數をしらす

又一説其夜酒井左衛門尉忠次今夜武田の軍兵疲たらんは必定なり夜討せんとてしのびを出し
信玄の陣屋の様を見せけるに爰には何色の旗の紋ありかしてには此いろの旗を立たりといひ
けるを忠次聞て疲れたる兵を後陣に引退け後陣と先にくりかへたるなり信玄の慮淺から
ずとて夜討はせざりけり後に聞に其夜信玄の士卒一人もねじれる者なかりしともいへり

夜ひけて信玄兵をかへしておさかべに越年あり是元龜元年十二月廿二日遠州箕形原れ合戦なり

(百二) 箕形原の軍終りて皆濱松の城と攻んといひけるに信玄勝て冑の緒をしむるといふこと
有とて軍をかへされけり此時信長は白須賀より毛利河内守山中に瀧川伊豫守吉田に稻葉伊豫守其
兵三萬あまりよておかれたりも玄信玄勝に乗て引とらずは信長二萬五千とひきおておしよせ毛
利瀧川等も思ひもよらぬ所と打てか、るほどならば必濱松よりも切て出中にとりこめて軍せ
んと吉田より岐阜まで一里に一人のしのびの者といて待れけるは信玄ひき返されしによりて
信長の謀空しくありぬ

(百三) 味方原の軍は甲斐の兵はげしく追かけたりしかを東照宮幾たびもなく御馬を返し給
ふ大久保五郎右衛門忠次手負て歩たらになりしが菅沼藤藏定吉に詞とかくれば忠次を馬の前輪

にのらせて退たりけり後菅沼に長光の刀を賜はりて賞せさせ給ふ菅沼又引返して追くる敵を
 防けり天野康景長坂源次郎坂部又十郎等もふみとまりて防戦ふ大久保相摸守忠隣十郎
 と射られ歩だちも成て危かりしを御覽じて小栗忠藏久次門を稱す
 助けよと仰られしかば久次己が馬に忠隣を抱きのせて引退く敵透問なく追つめ奉りける武者あ
 りけるを野中三五郎重次返し合せて討とりければ後に信國の刀を賜りぬ畔柳助九郎御馬のかた
 へとはなれず後金の扇を賜ひて賞せさせけり猶敵手しげく追つめ奉りける水野太郎作ふみ
 とまりて防戦ふと御覽じて又御馬を引返さる成瀬吉右衛門正一ハ兄が最後は汝は此あたりの
 案内よくしれり御供して恙なく引とらせ奉るべき由云たりしかを御側よつき奉りしが引返して
 敵を追しりぞけ終に濱松の城に入らせ給ふ鳥居彦右衛門元忠に御下知ありて玄黙口の御門をひ
 らさて引とる兵を入せらるたとへ敵したひ來るともわがこもる城にたやすく討入べきや門を閉
 ずしてか、り火を所々にたくべしと仰らる此日は天曇り雪ちりて寒氣殊に甚し御供して馬よ
 り下立城中に入人々は松平八郎三郎康定松平彌九郎景忠平岩七之助親吉大久保忠隣菅沼定吉都
 築惣左衛門秀綱等なり都築が妻粥を持せ來りて御供の人、よくばりたあふ後に衣服を賜りて賞
 美あり今日敵の跡とふんで戦は、勝べきに味方はやり過て心ならず敗軍しぬ口惜き事なりと仰
 わり湯つけ飯を侍女久野奉りければ三度かへたまひわれつかれたりとて御枕とらたふけられ

いびきかきて御睡あり山縣城近く攻よせ門の扉をたつるに暇なしと覺たりいかに攻入ばやとい
 ふと馬場美濃守聞て打まけて引とりたれば門をどち橋をも引べきに左はなくてか、り火白日の
 如しもし謀あるべきかかろ、しく攻べからず徳川殿は海道一乃月どりなりよく見届てこそ
 とて猶豫しける處に城中より鳥居彦右衛門渡邊半藏同半十郎櫻井莊之助勝屋甚五兵衛を始とし
 てくつきやらの剛の者とも百餘人突て出ししかば甲斐の兵虎口を引退て攻ざりけり
 (百四) 天正元年江北の軍に朝倉敗しかば信長の兵追事急なり朝倉が士大將山崎長門守詫美越
 前守柳瀬にてふみ止り支へけるにいげまされて返し合せて討死する者多し山崎も大軍の中にか
 け入て討れけり詫美矢立の硯どり出し詩一首書て落おく者またのみて故郷にかへしけり
 萬恨千一悲 有三驚一然一誰識 今夜入三黄泉三故園 更三莫灑三愁一涙一屍三暴三戰一場一唯一是
 天

かくて散々や戦て討死しける其間に義景のがれ得て越府にひきとれり
 (百五) 天正元年將軍義昭織田信長と不和の事出来て和田伊賀守惟政將軍の味方して攝津の國
 に陣す信長和田と始として誰某が首どりたらん者よハしかく可、黄と書記まて札を立られた
 り中川瀬兵衛重秀此時は荒木村重に屬したりけるが此札を打見筆とりて和田が名よ点をかけ自
 姓名をしるし家よ歸り妻に向ひ事の由を語りて萬一生て歸りなば又ころ見參すべけれといひし

に妻聊患る色なくさらば軍の門出祝たまへとて、薬す、め酒とり出したたり其夜子の刻ばかり
 よ伊賀守が首とつて来りけり村重大にねどろきいかでかくたやすう和田をば討得たるぞといふ
 重秀さん候明日必、戦を決すべしされば討る、者少かるべからず同じく死ぬいのちを此夜の
 中よすてなんには和田が首どり得つべし敵も明日の合戦、大事よ思ひ淀河の淺深をふみ見んよ
 惟政さる大將なり物見とたのむべからず自ら来らんは必定なりあつはれ討とらんす物をもし又
 討死せば多くの敵の中よ入て大將れ首とらんとて討死したりと人いはんは武名と朽じと思ひ定
 め水をわたりあなたの岸の柳がけにふしかくれてまつ案の如く和田二陣にひかへて出来るよま
 ざれ入終にうちとりて水中に飛入のがれ得て歸ぬと申ければ人、感じあへる事大方ならず
 (百六) 天正元年信長靈陽院殿と宇治の檣島の城よ攻る時折しも雨ふりて川水岸をひたせり信
 長馬と水涯よ駐て昔の梶原佐々木も鬼神あてはよもあらじといはる、處に武者一騎川へうち入
 りたるを見て梶川彌三郎高盛なるべし梶川討すな涉せと下知してそれよりわれ先にどうち入て
 わたしけり此戦の前に信長黒の馬を梶川よあたへらる其時信長梶川が志重ての軍に眞先かけん
 ずる者なりとあざ笑ひていはねしが果して其詞よたがはざりけり
 (百七) 山内土佐守一豊其はじめ織田家に仕へたりけり東國第一の駿馬なりとて安土に牽來
 てあさなふ者あり織田家の士是を見るに誠に無双の駿足なれど價のまじり貴しとて求むべき人

あくいたづらに牽て歸らんとす一豊其比は猪右衛門といひしが此馬望に堪かねたれどもいかよ
 も叶ふべからざれば家よ歸り身貧き得ぞ口惜き事はなし一豊奉公の初にあつはれか、る馬に乗
 て屋形の前よ打出へき物をとひどり言しければ妻つくくくも聞て其價のいがかかりにてか候と
 問黄金十兩とこそいひつれと答ふ妻聞てさほどよ思ひ給はんには其馬求め給へ其料をばまおら
 すべしとて餓の畜の底よりとり出して一豊が前置たり一豊大よおせろき此年おる身貧しくて苦
 し事のみ多かりしに此金ありともしらせたまひす心強くも包み給ひけん今此馬得べしと思
 ひもよらざりきと且は悦び且は恨む妻仰の旨こそわりにてあそ候へさりながらこれはわらはは
 此家よ參し時父此か、みの下に入給ひてあなかしよよの常の事にゆめ、川よべからず汝が夫
 の一大事とあらん時にまおらせよと、戒たまひ候きされば家の貧しきも世の常なれば堪忍ても
 過ぬべし誠よ今度京にて馬揃あるべしと承れば此事天下の見物なり君も又つかへの始きりよ
 馬召て見參せさ勢まうさんと存候てこそ奉れといふ一豊悦ぶ事限なく頼て其馬求めてけり程な
 く京にて馬揃ありし時打乗て出しかば信長大にひどろきあつはれ馬やとて事の由聞給ひ東國第
 一の馬遙にわが方にひきて来りしと空をく歸さん口をき事とようれに年比山内は久しく
 浪人して有しと聞家も貧しからんに求得たるは信長が家の恥をすゝきたるうへ弓箭とる身のた
 しなみ是よ過たる事やあると感じて是より次第に用ひられしとぞ